補輯文書

六　中西十郎左衛門ト吉井七之丞トノ相互書翰

童舞抄云々ノ件　　二通

（御手許五番十一号）

六ノ一

（封紙ウワ書）
「中西十郎左衛門殿　　吉井七之丞
急キ　〆　」

童舞抄

右

中納言様江御自分先祖長門守殿より被差上候、于今被致所持候処、此節御用ニ相成候儀ハ御内分御承知通ニ候、依之明日四後可被持出候、左候ハヽ、表向御用ニ相成御返として拝領被仰付候童舞抄も頂戴可被仰付候、此段申達候、以上、

十月廿八日

文書原寸　縦一六・二糎　横五五・七糎

六ノ二

（包紙ウワ書）
「証書」

覚

童舞抄　　全部　一冊

但　本書六冊を合本にして一冊となす、

御由緒書一通相添

右御自分家之童舞抄、此節

斉興公御用相成候、依之為御返拝領被　仰付候、拙者相詰候付、仍如件、

文政六年未十月廿九日　　吉井七之丞　○

中西十郎左衛門殿

文書原寸　縦三二・五糎　横四六・六糎　　包紙原寸　縦四六・六糎　横三二・三糎

七　賢章院ヨリ普之進公へ

年始状ノ返書　　（御手許五番十一号）

（封紙ウワ書）
「しまつ　御返事
普之進殿　いよ
人々参る　ゟ」

返〳〵めて度かしく、
年頭之御文被下めてたく披見致候、先々御障なく御嘉年
御成人被成候御事めて度存候、扨はよくそ御文被下忝、
御着も被下忝、幾久しくと祝納候、御文御見事ニ被成、
いか計悦に候、なを御出情（精）可被成候、御めて度御返事已
申入候、余ハ春ふかく可申入候、めて度かしく、

文書原寸（折紙）　縦一六・六糎　横四六・七糎　二枚
包紙原寸　縦二八・二糎　横四七糎

八　又次郎殿重富家ヘノ移転御用掛任命

（御手許五番十一号）

（端裏書）
「久馬殿より被相渡候御書付写」

坂元平左衛門
有川勇馬

右、又次郎殿御引越御用取扱掛被　仰付候条可申渡候、
正月　久馬

文書原寸　縦一四・六糎　横二九・五糎

九　普之進殿種子島家養子離縁ノ件

（御手許五番十一号）

（包紙ウワ書）
「書附」

普之進殿

右、種子島伊勢養子被　仰出置候得共、　無御拠御訳合
有之、御取返被成候旨被　仰出候、
右御達可申候、
三月　監物

文書原寸　縦一九・五糎　横五七糎
包紙原寸　縦二八・七糎　横四一・七糎

一〇　普之進、又次郎ト改名仰出
　　重富家島津出雲聟養子仰出　　二通
（御手許五番十一号）
（包紙ウワ書）「書附」

一〇ノ一
普之進様御事
島津又次郎様
右之通被成御改名候様被　仰出候、
四月
文書原寸　縦二二糎　横四五・二糎

一〇ノ二
又次郎様
右、種子島伊勢養子被　仰出置候得共、無御拠御訳合有之御取返ニ而、別段思召茂被為　在候処、山城殿より再重願之趣有之、難被黙止儀故、此節島津出雲殿聟養子被　仰出候、

十一月
文書原寸　縦二一・五糎　横一〇三・五糎　包紙原寸　縦二八・八糎　横四一・一糎

一一　又次郎殿へノ文庫其他御品覚書
（御手許五番十一号）
（包紙ウワ書）「御品覚書」

覚
一御文庫之内　一ツ
御矢ノ羽
右表御かつかふ
紋ひろしと御紙入地
阿蘭陀切御胴乱　一ツ
御帯地　二筋
右表御かつかふ
御羽織ひも　二ツ
右同
御股立とりひも　三ツ

右同

右御則御かつかふ

百人首歌煙草入地　一ッ

右之御品表御かつかふ之事

龜十郎殿より承り候、沢ち

一御瀬戸物　小三ッ

右之通り

又次郎様江

文書原寸　縦一六・六糎　包紙原寸　縦二七・一糎

横三九・二糎　横一九・七糎

一二　又次郎殿重富家聟養子ニ付待遇ノ件

（御手許五番十一号）

（包紙ウワ書）「書附」

又次郎様御事、島津出雲殿聟養子被　仰出候付而は、此以来御同列方御同様諸書附、其外此殿文字被相用候様被仰付、

御本丸内江被成御座候内は、何篇都而是迄之通ニ而、御引越之上は家格通御座候様被　仰出候、

十一月

文書原寸　縦二一・六糎　包紙原寸　縦二八・七糎

横一〇〇・五糎　横四〇・九糎

一五　斉興公ヨリ家老ヘノ諭書及家老ノ副書布達

財政困難ニ付非常節倹ノ件　二通

（御手許五番十一号）

一五ノ一

（包紙ウワ書）「仰出写」

所帯方連年不繰合成立、文政亥子年比ニは極々差迫、於三都当借之手便茂尽果、既

公務茂調兼、江戸詰人数賄方十ヶ月余茂相滞候程之儀ニ候ヘハ、余事は右ニ準候形行ニ而

故三位様ニも御聞通、別而御心痛被為
在候ニ付、品々深く御談申上改革申渡、夫迄之大借元利
共ニ一往断置、年々之産物料を以江戸常式続金、京・大
坂入用ハ勿論、国元之用分、又は臨時諸払迄茂相弁候様
趣法申付、大坂表銀主共江為申掛候処、積年之借入金数
百万両ニ相及、皆共無余儀訳筋を以致出銀置候末ニ候へ
ハ、容易ニ承知可致儀ニハ無之、却而品々難題之儀而已
申立、勿論新ニたのミ入候者ともハ右様古銀主之迷惑眼
前ニ候へハ、誰迚茂改革之本手引受候と申もの無之、一
節は乍双方手切ニ成立、実ニ必至之時節ニも為相及由候
処、重畳無和理申込、乍漸熟談相調、先か也致出銀候ニ
付、夫より繰登之仕向、分而綿蜜ニ為取計候処、掛置候
ものハ厚汲受致世話候折柄、吉凶之入価打続、加之両度
之上納金、度々之琉人参府等ニて莫太之及金高、大坂表
差繰必至と難渋之時節ニ、第一砂糖直組礑と下落、旁太
粧之手違相成、其上改革之初迄は家廻雨洩さへも修覆調
兼、或ハ一統江遣分茂分限ニ応し引方迄も申付、其外右
ニ準候砌故難捨置、払方等相滞居候分も太分有之候へと
も、向々金割押て相定稠敷取縮方為致候へハ、眼前難渋
之振合相心得居候故、己と倹約を相用、其詮も相見へ申
たる事候処、近年ハ大坂続金丈は兎哉角無滞繰立、当座
不事欠様成立候ニ随ひ一統油断之姿ニ候也、尤改革取附
よりハもはや十ケ年余茂相立、過去候儀ハ等閑ニ相成候
儀人情之常ニ而、物毎何となく麁略之方ニ傾き、近年ハ
向々改革之取扱、殊之外相弛候様相聞得、夫故年々嵩続
相増候ニ付、漸々大坂新借茂相嵩、今通ニ而ハ利払本済
共及違約外有之ましく、左候時ハ新組之銀主共出銀断可
申出儀ハ必定ニ候、若改革已前之時宜ともニ成立候へハ、
此上外ニ可頼入手筋も無之候ニ付、誠ニ一大事之時節と
存候間、夫々此訳を能々相弁へ、急度右様之時宜ニ不及
様兼而取扱不致候而不叶事ニ候、依之今般身辺之儀より
格外之省略相用、夫々定置候続料より初減少申渡候ニ付、
一統此旨を存、聊緩怠之儀有之間敷候、就而ハ毎度申聞
候通、所帯之根本ハ産物繰立候手続第一之事候ニ付弥綿

蜜取計、猶有来産物抔ニ而ハ其品格別下落之節ハ礑と補調兼候ニ付、先度も申付候通手広之領内ニ候間、嵩之産物仕登可取計候、夫ニ付而ハ定而品々故障之筋茂可有之候へとも、改革ニ付而ハ旧式ニ不相泥様可相心得候、次ニは於国元何様行届候而も、大坂払口之評儀精疎に依格別之相違ニ相成由候ニ付誠実ニ心掛、決而大形無之様可取計候、就中江戸之儀は向々之払日々太粧之金高ニ相及候間、掛役々能々精微之取扱不致候而は定置候金高引足間敷、尤是迄詰人数も追々相減、其外家作等此涯手入ニ不及様永久之仕向相改候ニ付、当分ニ而は以前之入用よりハ格別相減候半、殊ニ改革初迄ハ定兼候儀ももはや治定之儀も可有之候間、此節猶又金割相定、京・大坂ニ而も同様相究置、聊迚茂超過不致様可取計候、何分ニも此基本緩立候へハ改革ハ目前ニ崩立候ニ付、其処深く相心へ候様可致候、就而は江戸・京・大坂・国元共改革方江掛置候者ハ勿論、其外向々申渡候趣堅相守、互ニ一致いたし緩疎なく可取計候、且又近年一統驕奢之風俗押移、着類又は持道具等ニ至まて分限不相応之儀有之、故を以身上さし迫候もの不少、別而如何之至ニ候間、向後質素倹約を相守、決而取違之儀無之様可心掛候、今般従公儀茂訳而節倹之儀を被仰渡、至極之御趣意ニ候間、屹と致忘却間敷候、扨又分限之程々ニ応し知行扶持方も違置候ニ付、別段救筋等申出候儀ハ無之賦ニ候へとも、是迄心得違候者も有之候ニ付、以来は何様申出候共取揚間敷候、

右等之趣度々申渡候へ共、兎角程過候へハ弛立不可然事ニ候条、此度申聞候儀は厚相含致世話、屹と不戻様可取計候、

三月　　家老中江

文書原寸　縦二一・四糎　包紙原寸　縦二八・五糎

横　六五四糎　横三九・二糎

一五ノ二

（包紙ウワ書）
「御添書写」

御所帯向連年御不繰合成立、文政亥子年比ニいたり候而
は、既
公務茂被為調兼、江戸詰人数御賄方茂十ヶ月余相滞、余
は右ニ準候次第故、
太守様
故三位様深く被遊
御配慮、品々御相談之上御改革之儀被
仰出、夫迄三都之御大借元利共一往御断ニ而、年々之御
産物料を以三都・御国許共御用分相弁候様被仰付候付、
御銀主共江利銀等御断之相談取掛候得共、何れ茂無余儀
御訳柄付致出銀置候末ニ候得は、容易ニ承引無之、却而
品々御難題筋申立、勿論新ニ御銀主御頼入茂有之候得共、
是以古御銀主共迷惑ニ相成事候得は、誰御改革之御本手
引受候者茂無之、暫は双方手切之時宜為成立事候得共、
再往無和理及理解、乍漸熟談相調、先可也致出銀候付、
夫より御産物繰登之仕向綿密取計候様、分而
御沙汰被為
在、被掛置候御役々共ニ茂折角懸心頭
御趣意通取計之折柄、無御拠御吉凶御打続、其上両度之
御上納金、度々之琉人参府等莫太之御金高ニおよひ、大
坂表御差繰茂必至御難渋之御時節、第一之砂糖直組礒と
下落、旁大粧之御手違相成候、御改革之儀被
仰出候初比迄は、御家迫り雨洩さへ御修覆茂調兼候付、
一統江之被下分茂分限ニ応し、引方迄茂被仰付候砌故、
諸向難被捨置御払方等茂大分相滞居候得共、押而向々御
金割被相定稠敷御取縮有之候得は、眼前御難渋之御振合
相心得候故己と御倹約相用ひ、其詮茂為相見得事候処、
近年大坂御続金丈は冤哉角無御滞御繰立相調候ニ随ひ、
一統油断之姿候哉、尤御改革茂最早十ヶ年余茂相立、過
去候儀は等閑相成は人情之常、物毎麁略之方ニ傾き、近
年は向々御改革之取扱、殊之外相弛候様被
聞召上、夫故年々嵩御続相増、漸々大坂御新借茂相嵩、

今通にてハ御利払元済共御違約之外有之間敷、左候時は新組之御銀主共出銀御断可申出は必定ニ而、若御改革以前之時宜共成立候得は、此上外ニ御頼入之手筋茂無之、誠一大事之御時節と
思召候付、夫々此訳能々相弁へ、急度右様之時宜不及様兼而不致取扱候而不叶事ニ候、依之今般御身辺之儀より格別之御省略御用ひ遊し、夫々被定置候御続料を初御減少被仰付候付、一統此旨を存し聊緩怠之儀無之様、就而は毎度被
仰出候通、御所帯之根本は御産物御繰立手続第一之事候付、弥綿密取計、猶有来御産物迄ニ而は其品格別下落之筋、礑と補調兼候付、先度茂被仰付置候通手広之御領内ニ候間、嵩之御産物茂御仕登可取計、夫ニ付而は定而品々故障之筋茂可有之候得共、御改革付而は旧式ニ不相泥様相心得、次ニは於御国元何様行届候而茂大坂御払口依精疎格別之相違相成由候付、誠実ニ心懸決而大形無之様、就中江戸之儀は向々之御払、日々太粧之金高相及候間、掛御役々能々精微ニ可致取扱、尤是迄詰人数茂追々被相減、御家作等茂此涯不及御手入様永久之御仕向相改候付、当分ニ而は以前御入用よりは格別相減候半、殊ニ御改革初迄は定り兼候儀茂最早御治定之儀茂可有之候間、此節猶又御金割被相定、京・大坂ニ而茂同様相究置、聊迚茂不致超過様可取計、何分ニ茂此基本緩立候得は御改革は目前崩立候付、其処深く相心得候様、就而は御改革被掛置候者共は勿論、其外向々被仰渡候趣堅く相守、互ニ一致いたし無緩疎取計候様、且又近年一統驕奢之風俗押移、着類又は持道具等ニいたり分限不相応之儀有之故を以、身上差迫候者不少、別而如何之至候間、向後質素節倹を相守、決而取違之儀無之様、扨又分限之程々ニ応し知行御扶持方茂被下置候付、別段御救筋等申出候儀は無之賦ニ候得共、是迄心得違之者茂有之候付、以来何様申出候共被取揚間敷趣共、此節御別紙之通
御筆を以被
仰出、何共恐入難有

御趣意之御事候条、一統謹而可奉承知候、右ニ付而は、
仰出之通御所帯方連々御難渋、既ニ文政之末ニ至候而は
公務茂難被為調、江戸詰人数御賄茂十ヶ月余ニおよひ相
滞、余は右ニ準候形行ニ而、別而被遊
御厚配難被捨置処より御改革之儀被
仰出候得共、一往は御銀主共元利御断之儀不致承引、或
は新御銀主共ニ茂御本手限差出兼候儀共、
御沙汰通之時宜合ニ而、必至御難題之御時節茂有之候得
共、及再往段々無余儀遂頼談、漸熟談相調、勿論御産物
品御繰登方ニ付而茂御改革初迄は物毎別而不行届勝ニ有
之候付、追々稠敷沙汰いたし候故、此比ニ至り候而は、
砂糖其外不依何色漸々手入製法等茂行届候様成立、夫丈
ケは大坂表御払口茂相進、先御続金丈は無滞様御繰立相
調候得共、其内は無御拠御吉凶、或は御上納金旁莫太之
御入価にて御新借茂有之、今以全御古借御元済は勿論、
利足御下ヶ渡之手数ニ茂不至事候処、追々諸向御改革相
弛、御金割通ニ而茂不引足処より嵩御続等取計、弥御新
借相嵩、今通にてハ終に御改革茂崩立候様可成立哉と被
遊
御厚配、猶
御身辺より格外之御省略御用ひ被定置候御続料初御減少
可被仰付と之御事共、重畳誠以何共奉恐入次第ニ候、依
之猶此上御産物品相増繰登方ニ相成候様、夫々掛御役々
粉骨を尽し取計候ハヽ、大坂御払口之吟味は於彼地御役々
精微ニ行届候様取扱可有之事候付、御趣意厚奉汲受、今
一涯御倹約筋懸心頭、聊茂御費筋之儀共無之様、就中御
金割被定置候向々は、是非共年々被究置候内を以相弁シ、
決而超過之儀共無之様取計、近年中急度御改革之詮相立
奉安
尊慮候様面々心懸肝要ニ候、且又質素節倹之儀付而は、
毎度申渡置趣茂有之候処、是以一統驕奢之風俗押移、着
類・持道具等分限不相応にて身上差迫候もの不少旨被
聞召上候段、
御沙汰之趣共重々何共奉恐入、至我々申訳茂無之事候条、

弥以追々申渡置候通御時節柄を汲受、面々万端無益之失費相省、折角麁服等相用、兼而被下置候知行御扶持方等を以取続、決而別段御救筋等申出候儀有之間敷候、

右之通可被成御承知候、此段御達申候、

三月　　和泉

主計

石見

安房

登

央

文書原寸　縦　一九・二糎　包紙原寸　縦二八・七糎

横一二八・五糎　横三九・七糎

一六　大慈院薨去ニ付近衛忠凞公郁姫君ノ悼歌　（御手許五番十一号）

（包紙ウワ書）「近衛様

いく君様より

大慈院様へ御手向御詠」

忠凞

何事も夢のミなれやわかれにし

むかしの秋をおもひ出れは

ありし世もかはらぬ道のたひなれと

かへらぬ旅と聞かかなしさ

六字の御名を句の上にをきて、かなしさの余りつた

なき筆もてかきつらね侍る、

なにことも夢かうつゝかたらちねの

有し御顔をおもひ出れは

むらさきの雲にかくれて明らけき

御法の道ハたとらさらまし

ありし世にうけし恵の数〳〵も

猶したハれて袖そしほるゝ

ミるたひにかなしき数ハ増りけり

心をこめし水くきの跡

手向にとたく香の煙くゆらして
　ありし恵の跡したふ也
ふかかりし恵ハそての涙にて
　更に名残のいとゝかなしき

をき子

文書原寸　縦一八・八糎　包紙原寸　縦二八・八糎
横五四・一糎　横　三七糎

一七　重豪公以来ノ財政整理ト調所笑左衛門ノ功績

五冊

（御手許五番二十号箱入）

一七ノ一

御改革御功績之概略

御参勤御交代幕府御勤事御金納三御邸御用途、大　御台様・郁君様・御子様方御続・江戸詰人数御賄料、其以前多年何事モ不行届、芝・高輪・白金・桜田南向西向・田町・品川・大井御屋敷、大円寺・上野増上寺御宿坊等、雨漏迄ノ御修繕ヲ残ラス旧観ニ復セラレ、御子様方御柄(絡)居等新築、堀端御蔵屋敷御立、御囲予備米臨時御用意、玉川上水樋御入替、鎌倉相承院御位牌所、何方茂被為行届、江戸御構之所少茂無遺漏、予之米金御蔵江御(裕カ)蔵江御貯相成候、

一京錦之御屋舗御座之間御造替、御蔵御長屋四条通御取添地、大客屋近衛様御(裏カ)衷並堀川御屋敷御花畠、東福寺内即宗院、都テ御修繕、

一伏見御屋敷御座之間御柄居替、御仮屋守役宅ヨリ御屋敷廻居宅御修繕、一邸費用トシテ過書座江御貸付以利銭被相弁候、

一通坂人之為兼春文珠居宅造替、

一宇治万福寺御位牌永代御供養之御祠堂金御寄附、

一高野山恵向院御位牌蓮金院江御引直、都テ御修繕、御石塔等都テ御修繕、

一大阪御座之間御造替、御宝蔵御新築、御留守居役宅大客屋御立替、御蔵々外廻御長屋十八番浜御屋敷新築、

中御屋敷御蔵々御長屋・下御屋敷御蔵蔵御長屋御造替御修繕、

一長崎御附人役宅・御長屋御蔵々御造替御修繕、

右何方モ多年之間雨漏御修繕迄ニ候処、新築又ハ御立替新ニ御家並御蔵為被相立茂余多有之、残ラス御一新ニ相成候、

一御城内御休息所・御式台御書院等之外御改革以前ハ可成御修繕茂相省、誠之雨漏修繕迄ニ候処、御改革後都テ御修復、御新築・御造替枚挙ニ遑アラス、各局御茶屋向等又同新ニ為被相立、諸局三島方・骨粕方・藍玉方・木綿織屋御召羽二重織屋之類、御造添多々有之候、

一水引新田宮・指宿新宮社・国分大汝八幡社・西霧島社・高原王子之権現社・大口忠元霊社・西原八幡・羽月下之木場三社・姶良八幡社・内之浦高屋大明神、其外修繕余多有、

一御造替之御寺々、妙谷寺・南林寺・千眼寺仏殿・高原勅詔院・龍シヤウ寺般若院、其外御修繕数ルニ遑アラス、

一初ノ御巡見、郡山ヨリ入来筋宮之城・曽木・羽月・大口ヨリ栗野・真幸・小林・紙屋口ヨリ関外綾ヨリ去川口御通、高城・都之城・福山・加治木迄再御巡見、吉田・蒲生ヨリ帖佐・加治木・国分・福山・末吉・志布志・大崎・串良・高山・姶良ヨリ両根占・佐多・田代・新城・花岡・垂水・桜島、凡郷々五十ケ郷ニ相掛御泊・御休之所、地頭仮屋御造替・御修繕、神社仏宇都テ御修繕、道路御普請、

一指宿二月田御茶屋御造替、同所新田御修繕、

一山川地頭仮屋造替、龍福寺同断、

右御巡見之郷々、宮之城・大口・栗野・飯野・小林・高岡・高城・志布志・高山・小根占・垂水・加治木ハ領主之仮屋モ有之候得共、若非常之事有時ノ為地頭仮屋モ手広ニ致シ、山川ハ海口ナレハ地頭仮屋ト一寺ヲ相立、小根占モ同様ノ所故、地頭仮屋ヲ手広ニ為被相立事也、郷々ニヨツテ皆便宜ノ心得モアリ

シコトナリ、

一肥後石工岩永三五郎ヲ御雇下相成、初旧抱真橋ト唱ヘタル今ノ永安橋ヲ架シタルカ初ナリ、夫ヨリ稲荷川橋々掛替、上町堀筋同シ、甲突川入佐土橋・玉江橋・新上橋・西田橋・高麗町橋・武橋・芝立松橋、磯太鼓橋、谷山脇田橋、小林東方村水道橋、伊集院太田橋・同町橋、串木野五反田橋、隈之城水之手橋、其外近在新田溝小橋十余架方、

一国分小村御新田築方・出水庄潟御新田築方、同所今竈御新田井樋居へ直、加治木新田築方・高江御新田樋スヘ方悪水抜、国分浜之市御新田井樋スヱ方、

一甲突川浚方川幅定川下定、浚土砂ニテ天保山ヲ築川之両側堤築、原良辺田地水除土手新田溝修繕、

一甲突川尻土砂洗出シ無之様、川筋江相拘候村々山野ノ開地ヲ禁シ、田地ノ刈敷ニ相用候様厳敷制禁、近在受持之郡奉行并地方検者ヨリ村々名主乙名ヘ申渡ス、尤竹松ヲ仕立候地ハ村中之薪田地之破損ニ用候為可植付旨申諭ス、

一岩永三五郎ハ初来リシ時ヨリ僕ニ付テ指揮セシ事ナリ、三五郎ハ筆算ニ拙キ故ニ、御大工頭阿蘇鉄矢ヲ接伴トシ、皆近町ニ置タルコトナリ、

前書ニ為申上天保六年末於大坂五百万円之御太借御消却ノ方ヲ被立、其以前迄ハ御改革之初ニテ其年々ノ運用ヲ専ラトシ、又当座之急務ニ而已御手ヲ被施候テ、余事ニハ被為及カタク候欤、然ニ其後一両年過御国産モ日ヲ追テ価ヲ増シ、百事相整、大坂人気モ相定リ、其間

宰相様、広郷御供ニテ山崎御通行ニテ大坂江御泊無之候処、以前之如御滞坂モ被為遊、両三年高崎金之進江相付大坂江相勤、天保十年広郷ニ随テ鹿児島江下リ、其節肥後之米積船ニ倣ヒ造立有之度儀ヲ建議シテ、宮之原源之丞等ト協議シテ、重富ニテ富吉丸・富徳丸・富福丸・富長丸之四艘ヲ造立相成タルコトナリ、御太借御消却ニ対シ余事ニ御手ヲ難被施、此

御船御造立、其後之御手初共可申欤、其後追々諸事ニ御着手為相成事也、岩永三五郎茂天保十二年丑年ニ雇入相成リタルカ、曽木川ノ浚方ヲ僕ヘ為被命モ天保十二年ノ冬ナリ、農政ノ事上見部下リ為被廃モ天保十三年ノ夏ナリ、右尺寸ノ記禄(緑)モナク、皆暗覚ヘヲ事ニヨリ人ニ質シテ書ノセ、年月ノ誤モアラント大ニ恐レ入ナリ、去共事実ハ（後欠）

冊子原寸　縦二七糎　横一八・九糎　六枚

一七ノ二

天保七年ノ夏、広郷ハ江戸ヨリ大坂ヘ出タル時、清凞初テ広郷ニ見エ、広郷ハ六十一、清凞三十四ナリ、広郷ハ夫ヨリ鹿児島ヘ下リ、同年ノ冬上坂ノ時清凞宇都長兵衛ノ代リニテ江戸ヘ随行ス、其以来一両年間高崎金之進ト在坂スト雖モ、広郷江戸ノ往来ニハ随行ス、天保十年ノ下リヨリ鹿児島ヘ下リ、其后ハ随行セサルコトナシ、広郷六十五、清凞三十八、精力及ハサルカ如シ、其比五百万円ノ消却モ落着キ、初テ御国中ノ政事ニ手ヲ展ルコトニナリ、御仕登米運漕ノ船三隻ヲ帖佐ニテ造リ、漸次神社ノ新造・修繕、川浚ヘ、石橋ノ架シ方、農政ノ改正、亦軍備ノ修整、百事残ラス目ヲ拭フニ至ル、江戸・京・大坂・伏見・長崎、両度ノ御巡見ノ道路百里余、御泊・御休ノ所トシテ修正セサルナク、国分・加久藤、且小根占・山川等ハ不意ノ備ヘニ地頭仮屋・寺院迄モ修繕シ、弘化ノ初ニハ租税ノ余米数万石ヲモシテ特ニ蔵ヲ立囲ヒ、金ハ江戸・大坂ニハ予備ヲ貯ヘ、月々ノ続ケハ大坂ニ備ヘ、御国ニハ各局ニ皆資金ヲ備ヘ、別ニ御納戸蔵ニ予備ヲ設ケ、米ハ江戸ハ堀端土蔵ニ予備米ヲ貯ヘ、大坂亦同シ、大炮ハ台場毎ニ居ヘ、外ニ数千挺調練所ヨリ鑄製所ニ囲ヒ、弾薬ハ火薬庫ニ充満シ、東西事有ルノ日ハ運輸ノ規則ヲ定メ、兼テ車夫ヲ設ケ、船ノ運送ハ三島・琉球ノ船ト諸郷ノ鰹船ヲ使用スルノ方ヲ定メ、其他ノ事務皆スベ司リ、大小遺漏ナカランコトヲ欲シ、御改革ノ初メハ泥土ノ中ニ楼閣ヲ建ルカ如ク、終リニハ善ヲ尽シ美ヲ

窮メ、万世ニ御伝ヘアル可キ法ニテ、今日事務ノ繁劇、
譬フルニモノナシ、未明ヨリ夜半ニ及ヒ、広郷初メ命ヲ
承リタルハ文政ノ十一年比ナリシカ、三十五年ノ間寝食
ヲ忘レ、夙ニ興夜ニイネ、一日ノ如ク勉メタルハ古今稀
ナル可シ、其成績右ニ述タル如ク、是亦竟斉興公ノ御高
徳、人ヲ御スルノ威重、始終御変リナク節倹ヲ守ラセ玉
ハスンハ御成功ニハ至ラス、亦御改革ノ初ヨリ何事モ災
障ナク、天保七年ノ大飢モ御領内餓死ニ及フモノナク、
琉球・三島ノ船々モ災難少ク、亦御改革ニ任セラレタル
人員一人モ其職ニ堪サルヲ以テ免職亦ハ罪セラレタルナ
リ、商売・工業或ハ請負ノ類負債ヲ償ハサルナク、江戸・
京・大坂・長崎・御国元余多ノ御蔵々、従前ハ法ヲ犯シ、
官物ヲ恣ニシテ罪ニ落ルモノ多カリシカ、御改革後ハ更
ニ法ヲ犯スコト能ス、是監察ノ因備ナルニヨルト雖モ、
上ノ徳化ノ然ラシムル所カ、実ニ美政ト云可シ、

冊子原寸　縦二六・四糎　横一八・八糎　六枚

一七ノ三

一旧御藩ノ御財政、文政七八年ニ至リ、多年ノ負債五百
万円ノ巨額ニテ、其頃芝高輪・白金ノ御子孫御繁昌、
臨時御吉凶ノ御入費多ク、御産物料モ其年々ノ御用途
サヘ備ハラス、既ニ御参勤御交代モ難被為整、大坂銀
主共ニモ出金セス、屢方法ヲ改メラルト雖モ皆失約ト
ナリ、如何共スルコト能ハス、
栄翁公・宰相公深ク御苦心、御改革ノ方ヲ設ケラレ、
調所広郷ヘ被命シカ共、広郷幼年ヨリ茶道ニテ君側ニ
長シ、全ク財政ヲ知ラス、堅ク辞スレ共免サレス、止
ヲ得スシテ大阪ヘ出テ浜村孫兵衛等ヲ語ラヒ、五名ノ
新組銀主ヲ立テ、都テ産物ヲ以テ支弁スルノ法ニテ、
第一三島砂糖ヲ本ニシ、米・菜種子各種ヲ精良ニシ、
江戸・京・大坂・鹿島共ニ百事改正シ、才ニ任シ能ヲ
使ヒ財路運行、御改革良緒ニツキタル時、
御老公御薨去、重テ
宰相公ヨリ広郷ヘ命セラレタリ、広郷金穀ノ道ニ疎シ

ト雖トモ、性質忠実聡敏ニシテ寛弘ノ量アツテ、人ヲ容レ能ク下ヲ懐ケ、亦壮年ノ時ハ酒ヲ好ミ、角力ヲ喜ヒ、財ヲ軽ンシ、倜儻ノ風アリシガ、大任ヲ受テヨリ酒ハ献酬ニ限リ、角抵ヲ見ス、囲碁・将棋ヲ嫌ヒ、茶花ヲ弄セス、嗜欲ヲ制シテ己ニ克チ、皆力ラヲ公事ニ尽シ、寸陰ヲ惜ムノ志カ、亦貧賤ノ時人ノ恩アリシニ報フハ至ツテ厚ク、終身忘レス、矧ヤ君恩ノ重キヲ荷ヒ、常ニ報国ノ心深カリシカ故ニ、公事ニハ終日端座シ徹夜倦ス、私財ヲ抛ツコト芥ノ如シ、

栄翁公ヲ重ンスルコト鬼神ノ如ク、御在世御側江金ナキ日、御用部屋ヨリ差出セハ必ス堅ク御返シアリ、何レモ御用ナレハ御返シニハ及フマシト申シ上テモ、イヤ〳〵金ト云モノハ猥リニスルモノニ非スト仰セラレシト、広郷旅中金ノ乏キコトモアリタルカト察スレ共、更ニ恣ニスルコトナシ、右性質多年御左右ニ召使ハレ為被知召故ニ、

御両公被仰合御改革ノ大任ヲ命セラレタルカ、二十余年間死ニ至ル迄一日ノ如ク勉メタルハ忠実ト申ス可シ、

一文政十年比ヨリ旧藩ノ御財政日ヲ追テ至困ノ極ニ至ラセラレ、

一高輪御老公深ク被為憂、

宰相公ニモ御同様御苦心、大坂表之儀度々御家老御用人被差出御仕向被相替候得共、累年之御借財外国ヘモ無之金高ニ相及、其上御産物料年年之御用途サヘ難被相弁、既ニ御参勤モ難被為調、江戸御日用之事ヨリ詰人数月給モ五六ヶ月、八九ヶ月相滞、果ハ十三ヶ月迄相滞、御国元茂向向諸御買入物手形物奉行方江山之如ク相屯、御作事方大工、其外職人賃銀並御米迚モ御払無之、諸向書役・小役人御扶持米、人足夫飯米、春末ヨリ御払無之、右次第之為体ニテ御当用無之処ヨリ、何品ニヨラス益銀肩取ト唱ヘ申サハ、重税ニテ実ニ苟且之計、大富・小富・芸妓等ノ税、何品ニヨラス税ヲ被掛、何ゾノ御吉凶之御入費、或ハ御参勤御交代ニ相

臨、御城下ハ申ニ及バス、各郷へ見聞役ヲ被差廻身上ヲ承合、其程ニ応シ御借上ケ金ヲ被命、尤諸士之給地高三升重出米又五升ニモ相及、寺社方納ノ壱分銀三厘重、御扶持米諸職人賃銀三割引、人別壱匁出銀等ノ類、又士族所帯方宜聞得アレバ新番御馬廻中小姓之江戸詰ヲ被命、万事夫ニ類シ、其時分ノ形勢、今七十歳以上ノ人ニ無之候ヘバ能覚得タルモ相少世振ニテ、百事之頽廃難申尽、御産物之直成下落仕候茂御仕登御米・菜種子之内実三斗三四升、御扶持米等ハ夏分ニ至レハ弐斗八九升モ有之、大坂堂島米卸場落散米多、掃キト申浜女之得用ト成、薩摩米取納場大ニ価ヲ増、米之品位格段相劣、俵別洩捨リ、夫故声価ヲ落シ、鹿児島米蔵・出物蔵同様之事ニテ、馬ニ負セシ俵ヨリ道々相洩、自ラ馬率迄モ不正ノ事モ起リ、且ツ江戸御台所蔵・御進物蔵、鹿児島金蔵・米蔵・出物蔵・御台所蔵・新楮蔵、其外御蔵々蔵役共、百年以前ヨリ不正之儀絶申サス、刑罪モ被行、御蔵々御勘定不相遂年数ヲ経候者余多有之、且亦給地高出米総四月限ニ不相遂ハ其高御取揚相成事ニ候処、文政之初頃ヨリ漸次ニ四月限不相遂者多、五月初迄茂白昼ニ御兵具方足軽挑灯ヲ持督促、終ニハ五月五日後ニモ相及、其時分富有之士族兼併之弊有之、面々所有之外ニ数千石ヲ併セ、高帳ノ表皆有名無実ト相成、御三家ヲ初一所持・寄合ニ至リ所帯方困究ノ面々多、皆今日之不取締ヨリ必迫ニ至リ名実相違、兵賦ヲ可被立様モ無之、依テ相当之御奉公不相調衆ハ家格茂可被相下段厳敷被仰渡、且初花岡之所帯方可改正旨被仰出、次ニハ今和泉同様ニテ速ニ其効相見得候故、垂水・重富・種子等迄(島脱カ)御改正ニテ、皆皆年ヲ不経シテ其験相立、是ヲ見習ヒ寄合以上大半立直リ、家格之御奉公相整ヒ候風ニ為相成ハ、全御改正之御趣意ヨリ出タルコトナリ、

御改革後人民ノ為御仁恵ヲ施サレシ事

一壱匁銀ハ人民残ラス一人ニ壱匁宛納メ、御産物ニ次テ

大ニ財政ノ助ケトナリタルコトナリシヲ御免トナリタリ、

一壱分三厘銀モ、壱分銀ハ御国中ノ神社ニ祈願ノ為ニテ古来ヨリ納メシニ、後ニ三厘増シタル故ニ御免トナリタリ、

一竈銀ハ一戸ニ壱匁ツヽ、相納メシヲ御免トナリタリ、

一西目筋御休泊ノ御仮屋・御立場、年々御修繕、諸郷寄物夫役余多アリシモ、御内用計ニテ瓦葺又ハ御造替トナリ、大ニ農民ノ為トナリ、且限之城仏生橋・水之手橋石橋架替ニナリ、水引新田宮其外余多ノ神社・仏宇右ニ同シ、両度ノ御巡見ノ郷々亦同シ、夫役減セシノミナラス、農民・職人雇ニテ其郷々大ニ為トナリタリ、

一菱刈ノ七ケ郷漸次ニ労レタルハ、専ラ御蔵宮之城ニテ天堂ケ尾ノ嶮ヲ越シ、数日ヲ費シ苦ムコトヲ聞シ召レ、川浚ヲ命セラレ、年ヲ経スシテ成功トナリ、其折天保十三年ナリシカ上見部下リノ弊ヲ改ムルコトヲ広郷ヘ命セラレ、帰県ノ時川内ヨリ川登リシ、宮ノ城・鶴田ヨリ天堂ケ尾ヲ越ヘ、羽月・大口・曽木・本城・湯之尾ヨリ栗野・真幸ノ五ケ郷ヲ経テ小林迄巡廻シ、再ヒ真幸・栗野ヘ通リ、其時真幸ノ五ケ郷モ年々加治木ヘ出ルハ、菱刈ニ等シキヲ以テ栗野ヘ御蔵ヲ建テ救ヒ、亦古来御蔵々ニテ用ユル斗枡ト云ハ、一升ニ一斗一升七合三勺三才ヲ容ル升(枡)ニテ、三升ニテ三斗五升二合ナリ、是三斗二升ヲ一俵トシテ世ニ云一ノリノ枡ナルヲ定メタルコトト覚エ、給地ニテモ改升ニテ二斗二升納メタルヲ、世ノ変遷ニヨツテ寛政中カ三斗八升迄ハ御免ナリト唱ヘタルハ、財政ノ困スルニ従ツテ大坂登セ米内実多ケレハ価ヒ貴キヨリ、本ヲ忘レテ収納ノ枡目一変シタルコトトミヘ、給地モ従ツテ二斗四升迄ハ御免ナリト唱エルコトニナリ、夫故郡方ニテ田地ノ物成ヲ賦ルニモ二ノリノ心得ニテ掛リヲ定ルコトニナリ、御蔵々ニテ枡目例(ダメシ)ニ斗枡三ツト小枡弐升四五合以上ナラネハ仕登セニセヌコトニナリタルニ、従前御家老座・御勝手方・異国方・大目附座、其外各局書役、七年毎

ニ御心付蔵方ト云各郷下代蔵役人ヲ命セラルヲ一年間自ラ勤ムルモアリ、又他ニ代価ヲ定メテ譲ルヲ附属ト唱ヘ、価ノ甲乙不同ナリ、初メハ凡価ヒモ定リタルカ、何トナク貴クナルハ、収納ノ升増スニ従ヒ蔵役ノ利益ヲ生ス、御蔵々ニハ締リ方横目・其郷々ノ横目日日監督スト雖モ、自然ノ勢ヒ禁スル能ハス、文化中ヨリ日ニ年ニ増シ蔵々ニヨリ不同アリトイヘ共、後ニハ三斗九升又四斗ヨリ極増シタルハ四斗一二升、給地モ夫ニ倣ヒ弐斗五升余ニモ及ヒタルカ、去ハ農民ノ堪ユヘキコトニアラス、収ノ法ニ超ルニ随ヒ、各郷上見ト云コト年々ニ多ク、初ハ風雨旱出ノ災ニテ止ヲ得ス、検見ト云例ノ法ヲ以テ郡奉行・牧見（蒔）・筆算規則ヲ持テ収ノ米ヲ減シタルカ、後ハ収ノ減スル法ニ従ツテ種々ノ方ヲ農人ヨリ設ケテ、上見ハ一種ノ得益トナリ、見馴レ聞伝ヘ、百余郷凶歳ナラスシテ少シノ災ヲ僥倖トシテ上見トスル流弊ヲ、天保十三年ノ夏、突然上見部下リ共ニ廃セラル、其令ヲ廃セラルハ既ニ八月初、田ノ毛上モ凡中年ノ位ニテ、各郷上見ヲ常トシタル郷々ハ愕然タリシカ、習弊ニ馴レタル郷々ハ収メ難キヲ以テ三斗八升程ノ収ニ復シ、広郷巡回ノ帰途加治木洲ノ崎ノ御蔵ニテ、前年ノ収ノ如ク違ヘス升ヲ取可シト枡取并加治木横目ヘ命シタルカ、四斗壱升余アリシニテ、前年ハ四斗二升ニモ及ヒタルヲ知リ、其年ヨリ其法ニ改メタル故ニ、米壱石ヲ収ル農民ハ凡壱斗余ノ為トナリ、御領内御蔵入・給地共ニ概略二万石余ノ救ニナリ、上見ノ減セシヨリモ増シタルカ、其以来年々規則トナリ、大ニ農民ノ救ヒトナリタルコトナリ、夫ヨリ勧農ノ規則享保ノ旧規ヲ本ニシテ精密ヲ加ヘ、受持郡奉行・地方検者ヲ撰ンテ司ラセ、郷々郷士年寄・与頭・横目・郡見廻・庄屋、其下名主・作見廻ニ至リ厳シク督促、農業少シモ怠ラサルコトニナリ、年々租税全納トナリ、夫迄壮年ノ者ハ身売・日雇、亦近国諸所ヘ離散ノ百姓残ラス帰復スルコトニナリタリ、

一御蔵々ニテ壱俵三斗八升余凡二ノリノ収ハ、古来ヨリ

ノ通法ナラント考フ訳ハ、大坂御仕登米升例斗枡三ツト弐升四合ナレハ三斗七升七合ナリ、亦各郷御蔵ヨリ鹿児島ノ米蔵・出物蔵ヘ廻ス二斗枡三ツト小升壱升六合ノ枡例ナレハ三斗六升八合ナリ、去レハ各郷御蔵々収三斗八升余ハナケレハ洩散モアルコト故、揺込掻切従前ノ習ナリシカハ、深ク試ミタルニ少々ノ差ハアリト雖トモ、凡三斗八升余ナリシカハ揺込掻切ト云コトニ定リタリ、

一諸御払米不渡ノ起リハ不存候得共、粗覚ヘタルハ文化ノ末ヨリ諸士御扶持米并御作事方人足飯米其他、春末・夏ニ至レハ毎々相滞、大ニ苦ムコト折々アリ、梅雨後ニ至レハ壱俵弐斗九升、三斗程ナリシハ親シク覚ヘタリ、長ク御払滞ルトキハ手形ヲ売ルニ壱俵ノ代価銭壱貫六百文程ナリ、夫飯米ハ赤米ナレバ壱貫四五百文ニテ、一日ノ雇銭四十六文又ハ四拾弐三文ニ値シコトナリ、

一書役助ノ多キハ御勘定所、次ニ御代官所・郡方、其他諸局皆助役アリ、平常ノ年一日ニ壱升壱合三勺、又閏月アルトキハ壱升四勺壱撮六ト云割ナリ、尤真赤半々ナリ、

一真米三斗三升九合四勺九撮先

一赤米三斗三升九合四勺九撮先

日数六十弐日、年中四石之割、一日壱升壱合三勺、外ニ弐升壱合弐撮三割引、右ヲ手形ノ代価壱俵壱貫六百文ニシテ一日五拾文余ニ当ル、日俸ノ軽キコト右ノ如シ、

一江戸詰諸士三人賄料一ヶ月米壱斗五升、金壱両弐歩、下人壱人給金壱分宛ヲ引ハ、壱両壱分ノ金ニテ勤シ事ナリ、

一閏月有ル年ハ四石ヲ十三ヶ月ニ割ヲ閏割ト名ツケ、一日壱升四勺壱撮六ツ、ニテ日数六十七七(衍カ)日ニテ、

一真米三斗三升八合四勺六撮　外ニ弐升九升(ママ)

一赤米三斗三升八合四勺六撮　四勺三割引

右壱俵凡三斗二升程ノ俵ニシテ、一日九合四五勺、

又ハ夏向壱俵弐斗九升程ノ俵ナレバ一日八合六勺ニ当ル、

一表方御蔵入帖佐与御蔵入・出物蔵入合諸御払米、凡年々拾二三万石ニ及ヒタルコトニテ、俵ニシテ凡四拾万俵、其頃ハ新米之内ヨリ御払米三斗壱弐升、春末・夏ニ至リ弐斗九升、三斗ニモ成、凡平均三斗壱升ニシテ拾弐万四千石ナリ、御改革後三斗四升ニシテ拾三万六千石ナリ、大略壱万弐千石増給ト成タル訳ナリ、左スレバ四石ノ御扶持ヲ為被下諸士四石三斗五升之増給ニ成、其上少モ無滞御払相成、従前ニ比スレバ難有事ナリ、又江戸詰五六ヶ月ヨリ八九ヶ月、果ハ十三ヶ月迄御払無之、御改革後ハ詰人数少モ無滞御賄被下、跡ニシテ考フレハ能モ為相勤ナリ、

一文化ノ末文政ニ至リ、御作事奉行・下目付・定番夫・定夫等ヘ縁アレハ人足ノ札ヲ受ケ、十七八比ノ者ヨリ老人抔日雇夫ト成事流弊ニテ、其頃ヨリ夫賃米滞テモ人之家内僕ナレハ日用ニ障ナク、夫丈ケハ夫役ニ堪サレ共召使事ナリ、一日赤米壱升六合ノ賃米ナリシ、夫ニ準諸局御買入物、右ニ類シ品ノ劣リ価ヒノ貴事云ニ及ハス、サレ共代価ノ御払ナキ故ニ止ヲ得ス御用ニ成タル、故ニ御損失ハ何程共申難シ、是ハ江戸・京・大坂、皆替ル事ナカリシ事ト思フ事ナリ、

冊子原寸　縦二七糎　横一八・二糎　一二枚

一七ノ四

従三位栄翁、諱重豪、宝暦五年ノ生十一ノ時父重年ノ封ヲ襲キ、明和元年従四位上右近衛中将トナル、重豪幼ニシテ岐嶷姿貌雄偉、長シテ英邁大略厳貌果断、初メ儒学ヲ崇尚シ、後ニ禅学ヲ喜ヒ、政事紀綱ヲ立、号令厳明、本藩西海ノ僻陬ニ位シ、元和鞬櫜ノ後他ノ列国ト交通セス、簡易質朴風俗野様多キヲ以テ風俗ヲ改、時弊ヲ矯メ、従前吉貴ノ時制度ヲ建治規ヲ定メタルヲ、弊者釐メ欠ハ補ヒ、成憲典章ヲ一新シ、学校ヲ立造士館ト云、演武場ヲ設ケ騎・射・鎗・剣ヲ練習シ、医学校ヲ立、入肆術業

スルヲ医学院ト云、暦法ヲ修明シ推歩測候スルヲ明時館ト云、其佗薬園・織署・陶冶・色染、廃事ハ修メ新ナルヲ起シ、神社・仏宇ノ造営修繕、加ルニ其頃芝邸ニ斉興・斉彬、其他ノ男女、高輪邸ニ重豪、白銀邸ニ斉宣、子孫繁殖数十人、男ハ出テ諸侯ノ家ヲ継キ、女ハ嫁シ、就中幕府ニ入輿シテ文恭公ノ夫人トナリ、近衛家ニモ嫁シ、亦官位ノ加階、琉人参府、再度ノ献金、或ハ屠高輪・芝ノ邸延焼ニ罹リ、子孫ノ夭殤、概ネ虚年ナリ、費ニ費ヲ累ネ、文政ノ初ニ至リ漸次ニ国庫空耗、財政困難ノ極ニ至リ、数回大坂ヘ家老・用人ヲ出シテ方法ヲ設クト雖トモ、既ニ負債五百万円ニ及ヒ、七十万石ノ高ニテ堪ヘ応スルコト能ハサルヲ以テ、約ヲ背キ信ヲ失ヒ、銀主中出金ヲ肯ンセス、参勤交代スルコト能ハス国家興廃ノ境トナリ、栄翁深ク憂ヒ斉興ト謀ツテ　栄翁・斉興・斉彬・左近列席ニテ改革ノ主任ヲ調所広郷ヘ命スト雖モ、広郷十五ヨリ茶道坊主トナリ、二十三ノ年栄翁ノ側茶道トナリ、意ニ適ヒ茶道頭・小納戸用取次ト登庸シ、四十三ノ年使番ニ転シ、五十歳ノ時側用人側役トナリタル故、君側ニ成長シテ全ク財政ヲ知ラス、固ク辞スレ共免サス、止ヲ得ス命ヲ奉シテ大坂ヘ出タレ共、暗夜ニ灯ヒナキカ如ク、洋中ノ孤舟如ク、金談ニ力ヲ尽セ共一人モ応スル者ナク、剰ヘ恥ヲ負ヒ侮リヲ受ル迄ニテ幾度モ刀ノ柄ニ手ヲカケシコトノミナレ共、忍ンテ辛フシテ浜村孫兵衛等ヲ語ラヒ方向ヲ定メ、新組ノ五名ヲ設ケテ、平野屋彦兵衛・浜村孫兵衛ト同行ニテ、江戸ヘ帰ツテ復命シ、高輪ノ邸ニテ栄翁ヘ面謁シ、改革ノ方ヲ定メテ携ヘタル金ヲ納メタルハ文政十一年比ナリシカ、夫ヨリ大坂ニ出テ国産ヲ以テ支弁スルノ方ヲ定メ、先三島ノ砂糖ヲ本トシ、米・菜種子・其他ノ品々精良ニスルコトヲ議シ、鹿児島ノ庶務三原藤五郎ニ委任シ、三島ノ改正ハ宮ノ原源之丞、其外各局器ニ応シテ司ラセ、精ニ入リ微ヲ究メ、国産何レモ諸国ニ冠タリ、大坂ノ出納ヨリ売捌ノ方ハ専ラ浜村ニ任シ、江戸ハ新納四郎右衛門、従来趣法方ハ財政ニ通シタル故、高崎金之進ヲ用人トシテ改革中側ニ置、宇都

長兵衛ヲ其書役トシ、重田郷左衛門・猿渡彦左衛門・中村源助等初メ金方トシテ出納ヲ司ラセ、金穀出納ニ長スルヲ挙テ監察ノ官ニヲキ、局々遺漏ナク才ニ任シ能ヲ使ヒ、改革ノ初擢用シタル一人モ黜ケタルナク、従前三都・藩内数百ノ蔵々罪ヲ犯スモノ絶サリシニ、改革ノ後ハ一人モ罰シタルナク監獄空虚、所謂刑措ト云可ク、去レ共五百万円ノ負債消却セサル間ハ百事ニ施スコト能ハサリシナル可シ、栄翁天保四年正月薨ス、大借ヲ消却スルハ三ケ条ノ大事件ナルヲ以、猶精ヲ励マス、天保六年ノ冬其方ヲ施シ、遺志ヲ遂ケタルナル可シ、

財政ノ改革屢家老・用人ニ命シテ出坂サセ、銀主共ト議スレ共、意ノ如クナラス、広郷ハ二十年間左右ニ有テ栄翁ノ意ヲ得、殊ニ特別ノ恩ヲ蒙リ君臣ノ情義厚ク、財政ヲ知ラサレ共手足ヲ使フカ如クナラントノ考ニテ命シタルナル可シ、亦栄翁ノ意志銀主ヘ通セサリシハ平野屋彦兵衛カ高輪ニテ嗟歎セシニテ明ラカナリ、亦百事側ニアル日ニハ残ラス命ヲ受テ施行シ、旅中ノ日ハ飛脚ノ度毎ニ細大具上セシハ、今家ニ残ル往復ノ呈書ニテ知ラレタリ、亦高輪ノ神殿ニテ親シク見タルコトニテ、今日瑣少ノ事件モ残ラス御聞ニ入ルヽトハ承リナカラ、イカヽ有可キヤト疑ヒタルモ、少シモ偽リナキハ残簡ニテ窺ニ慚愧スルコトナリ、改革ノ命ヲ受ケタル以来二十余年間一日ノ如勉メタルハ、誠実ノ精神貫クニアラサレハ能ハサルコトナリ、天保七年以来ノ事業、僕カ親シク見聞シタル十ノ七八ナラン、猶追テ申ス可シ、

冊子原寸　縦二六糎　横一八・二糎　四枚

一七ノ五

旧御藩文政ノ初ニ至リ御勝手日ニ月ニ立兼、御子孫御方々御繁殖被遊、御養子御縁組、殊ニ幕府・近衛家御入輿、度々ノ御献金、高輪・芝ノ御邸延焼、吉凶ノ御大礼、御領内風旱ノ災、琉人参府、其他ノ御費用専大坂ノ銀主ヨリ御借入、毎度御家老又ハ御用人ヲ被差出サレ、時々消

却ノ方ヲ設クト雖トモ皆失約トナリ、文政ノ末ハ至困ノ極トナリ、銀主共一金モ出スコトヲ肯セス、既ニ御国家ノ危急ニ迫セラレ、

栄翁公・宰相公深ク御苦心遊サレ、密ニ菊池東原ノ言ヲ御聞遊サレ、調所広郷ト共ニ姓名ヲ変シテ木曽路ヲ経テ大阪ヘ差出サレ、銀主亦ハ富商ノ情実ヲ認メ、復命ノ上御改革ノ任ヲ広郷ヘ命セラレタレトモ、広郷十五ノ時ヨリ茶道坊主トナリ、二十余ニ及ヒ初テ江戸詰ニテ出府、間モナク

高輪ノ奥御茶道トナリ頻ニ御登庸、御小納戸ヨリ四十三ノ時御使番ニ転シ、全ク財務ノ事ヲ知ラサルヲ以テ堅ク辞スレ共免サレス、止ヲ得ス上坂シテ浜村孫兵衛等ニ依テ辛フシテ新組銀主ヲ組織シ出銀スルコトトナリ、当座ノ用ヲ弁セラレ、三島砂糖ヲ根本トシ、産物ヲ精良ニシ、大阪ノ出納ヨリ百事ヲ改ムルニ才ニ任シ能ヲ使ヒ、己レ金穀ノ道ヲ知ラサルヲ以テ、鹿児島ノ事務ハ専ラ三原藤五郎ニ委任シ諸局ニ関セシメ、三島方ハ宮ノ原源之丞・肥後八右ェ門等、唐物方ハ坂元権之丞、御殿ハ江田正蔵、且ツ山奉行ハ別ニ御内用方ノ一部ヲ立テ、諸御蔵々出納ヨリ米・菜種子諸産ノ良否ヲ新ニ擢テ監察ヲ命シ、高崎金之進ヲ御趣法方書役ヨリ抜テ御用人トシ、左右ニ置キ、御趣法方ハ財政ニ通スルヲ以テ重田郷左ェ門・猿渡彦左ェ門・中村源助、皆金方トシ、宇都長兵衛ヲ高崎ノ書役シテ常ニ左右ニヲキ、江戸ハ新納四郎右ェ門ニ司ラセ、大坂ハ産物出納皆浜村孫兵衛ニ任シ、留主居ハ初メ小森新蔵、後ニ田中善左ェ門、金方ハ有川勘助・宮里八兵衛・蒲生郷右ェ門、京都ハ小森新蔵付役赤井直之進、伏見田尻次兵衛、長崎ハ奥四郎、其外各局其器ニ応シテ用ヒ、百二十余郷ノ郡奉行受持ヲ立テ、地方検者ヲ配リ、上下西田町ノ事情等ヲ聞クニハ薬師甚兵衛・岩城孫七・加藤平八・桑原尚左ェ門・桑原次郎左ェ門ナリシ由、後ニハ森永蔵左ェ門・山下助左ェ門・酒匂孫右ェ門、下町ハ芝田次郎左ェ門・長崎武八郎・長崎喜兵衛・浜田新左ェ門等ナリ、右ハ御改革初ハ天保元年寅ノ御朱印御書ニモ五

十万円御積金ト非常ノ御備古借消却トノ三ケ条ヲ命セラレ、其他ニ及フニ遑アラス、然ルニ天保四年正月大信公御薨去、御改革今一等厚命セラレサレハ遂ラレ難キ思召ニテ、再ヒ宰相公ヨリ御朱印ニテ命セラレ、五百万円弐百五十ケ年ノ年賦ハ甚難キコトニテ、時機ヲ失セラルレハ行ハレ難キ大事件ナレハ御遺意ヲ奉セラレ、天保六年未ノ初冬御施行アリシ事ト思ハル、清熙其十二月二十三日大坂ヘ初テ着タルニ、其事ノ始末ヲ聞タリ、広郷ハ十日以前ニ大坂ヲ立江戸ヘ出タリ、新組銀主近江屋半左ヱ門・炭屋彦五郎・浜村孫兵衛、御金方蒲生郷右ヱ門モ江戸ヘ行、翌天保七年ノ春皆帰坂ス、其後浜村孫兵衛入牢トナル、

冊子原寸　縦二五・六糎　横一八糎　三枚

二五　文武精励風俗矯正ノ子弟教育ニ付斉興公ノ諭書及家老ノ副書令達　二通

（御手許五番十一号）

二五ノ一

（包紙ウワ書）「御筆　仰出写　弘化四年未四月十三日」

家老中江

不依大身・小身幼年より我侭ニ生立候得は、盛長之後国家之用ニ難相立、別而気之毒之至ニ候条、貴賤共得と其旨を相考、無油断出精尤之儀ニ候、

一一門并名代を茂相勤候家格之向は、屹と立候身分ニ而専国中之見当ニ相成事候条、第一身持を慎、家法を厳にし、惰弱之風儀無之様相心得、文武之芸は勿論万端礼義正敷、威儀を不失様心懸候儀専要ニ候、

一大身分之儀は、家柄に応し古来より世録（禄）を茂為取置候ニ付而は、夫々役職を相勤国恩を不報候而不叶事候処、若年之砌より何之教茂無之、無学不才ニ生立、盛長ニ随ひ、或麁暴或軽薄之為躰成行、家格之勤難申付者茂過半有之、国家之費残念之至候条、其旨を致得心夙夜

可相励候、

一小番以下士分之者は身分ニ応し夫々之役場江可召仕之処、是又至而不才ニ有之、書キ読等不自由ニ而は相当之役儀茂難申付事候間、分限ニ随ひ諸芸を相嗜、往々用立候様相心得、何篇律儀を相守、夜行・辻立等之類相止、風俗宜敷士風茂相立候様可心懸候、

一無益之集会等堅停止之段は追々申聞候通、猶又緩せ之儀無之様稠敷可申渡候、

一衣服并祝事等之儀、分限ニ応し夫々相極置候通可相心得候、

右条々、大小身共若輩之生立柄等、第一従御先代様分而為被仰出置事候得共、何分親兄弟共汲受薄所より兎角風俗立直兼、別而残多事候条、其旨を深汲受、家訓正敷朝夕之示教不怠様相心得可令教諭、勿論依生質才不才は可有之事候得共、折角導候者身分相応ニは可生立事候、尤世上之交礼譲を本とし、怠惰之風儀無之、往々用立候様無油断致教訓、屹と士風立直候様申渡、且無益之集会・祝事・衣服等之儀、是又屹と相守候様可申渡候、

四月

文書原寸　縦　一九・三糎　横三八二・五糎

包紙原寸　縦二八・二糎　横三八・八糎

二五ノ二

（包紙ウワ書）「仰渡写」

弘化四未四月十三日」

不依大身・小身幼年より我侭ニ生立、御国家之御用ニ難相立、且御一門方并御名代を茂被相勤候家格之向は、専御国中之見当ニ相成事候条、第一身持を慎惰弱之風儀無之、文武之芸は勿論、礼儀正敷威儀を不取失様、大身分之儀は夫々御役職相勤御国恩を不奉報候而不相叶事候処、或麁暴或軽薄之為躰ニ成行、家格之勤難被仰付者茂有之、尤士分之者茂至而不才ニ有之、書き読等不自由ニ而は相

当之役儀難被仰付事候間、諸芸を相嗜、屹と士風相立、
往々御用立候様可心掛、尤無益之集会、又は衣服并祝事
等之儀、夫々被相極候通、猶亦緩せ之儀無之様可相守、
左候而若輩之生立柄等、何分親兄弟共被
仰出之趣汲受薄、兎角風俗立直兼、右旁之儀共別而御残
多被
思召上候条、其旨を深汲請、家訓正敷朝夕之示教不怠様、
第一世上之交礼譲を本とし、怠惰之風儀無之、屹と士風
立直候様ニと之趣共、
御別紙之通
御筆を以被
仰出、誠ニ以奉恐入難有
御趣意之御事候条、一統謹而可奉承知候、右付而は仰出
之通大小身ニ不限、幼少より之生立柄不宜、自然と怠惰
之風儀押移、夫々相当之御役職茂難被仰付と之御事共、
太切成御国家之御用等閑ニ相心得、
御厚恩忘却之筋ニ相当、近比歎息之至リ無申訳次第ニ候、

此節之
御趣意是迄度々被
仰出候得共、一切其詮無之、猶亦被
仰出之趣誠奉恐入事候条、人々実意ニ深奉汲受、昼夜懸
精心往々一廉之御奉公相勤候儀肝要ニ候、就中年若之者
とも生立柄ニ付而は、親兄弟共教諭行届候は随分御用立
候者茂可有之処、我侭ニ召置候儀甚以不可然事ニ候条、
向後家訓正敷朝夕教諭有之、数代蒙
御厚恩居候儀は勿論之事ニ而、一度被
仰出候儀は誠実相守
御恩を可奉報之処、万端等閑ニ而別而如何至極之事ニ候、
此節
仰出之儀は、大小身共生立柄不宜処より前文之通御用立
兼、別而
御気之毒被
思召上、無御拠被
仰出候

御趣意と奉恐察、実々難有事候条、人々深奉汲受、屹と忘却有之間敷候、勿論質素節倹・衣服沙汰・祝事等之儀は、去辰年分而細々被
仰出趣茂有之候処、今ニ驕奢之風俗不相止間ニハ不勘弁之向茂有之哉ニ相聞得、別而不埒之至候間、向後前条被
仰出之趣屹と可相守候、且又諸稽古事等業合而已ニ拘候而は、不時
御覧等被
仰出候節及混雑事候間、益々式向等迄茂心掛行儀正敷、且師家定之刻限通相揃、万事心掛出精可有之候、
右之通可被成御承知候、此段御達申候、
四月　　壱岐
石見
久馬
笑左衛門

文書原寸　縦一九・五糎　横四三六・五糎　包紙原寸　縦二八・二糎　横三九・三糎

二七　仏英船琉球来着届書　二通

二七ノ一

（表紙）
「仏朗西国船　琉球江来着御届書抜
唎咭唎国船」

口演　手扣

極御内話申上度一儀到来成行左ニ申上候、
琉球国江例年差下置候運送船、彼地出帆時節ニ而外船一同沖合江滞船順風相待居候処、当五月十日海上時化立、追々風烈敷浪高ニ相成、中々致出帆候順風ニ而は無之候処、不計碇綱摺切船払出候処、右通荒時化故、掛留候儀茂難成、無拠其侭走せ出し、既ニ破船ニ茂可及之処、乍漸凌立風ニ任せ走行候処、風并宜候故、右船無異儀御領内江乗付為申事ニ御座候、然処右船頭申出候ニは、琉球国江は三月十一日比ニ而も候哉、仏朗西国之大船壱艘漂来候処、乗組人数は弐百三拾人余異風と欤申、大筒六拾挺余、其外ニ茂鉄砲六百挺余、或鑓刀類乗せ付居、言語

（朱、以下同ジ）「本文、辰七月六日水野越前守様御年寄、佐藤新兵衛迄差越、御内使は笑左衛門相勤候事」

茂不通之由候得共、右之内ニ唐人壱人罷在、同人を以申聞候は、仏朗西国之儀は唐国江茂致通融事候付、琉球とも致交易度と之趣為申聞由候得共、琉球之儀は穀物は勿論、金銀銅鉄茂全無之国柄ニ而、唐国江随従并度佳喇島江致通融候而已を以、立行来候国柄ニ候得は、外国江交易は不相調段申断候得共、一円承知不致、尤此儀不相調候は和を通し好を結、或天主教を可致伝授旨申聞候付、是以不相成趣、種々理解相断候処、如何取受候哉、段々不都合成立色々難渋申掛候付、琉役々は勿論在番詰御役々共ニ茂一同別而致心配、何分ニも右三ヶ条之趣は所詮相叶かたき趣、頻ニ相断候得共、更ニ承知之体無之、何れニ茂承引無之事候は一往可引取、左候而大総兵船可差越候付、其節否相決返答申聞候様申置、右船は同十九日出帆為致由候処、跡江右唐人と仏朗西国人弐人残居候付、何故残居候哉と承候処、右大総兵船入津候は右江通事不罷居候付、其為残居候段申出候得共、当所江は他之国之人留置候儀不相成国法之趣申聞、小船江乗せ付本船を追せ候得共、順風ニ而走せ行候故不追付列帰候付、海辺寺江召置、幾合ニ茂虎落を結、昼夜番付ニ而召置候由、尤右成行は早速飛船差立、委細御国許江申越為相成由候得共、其時分海上不順ニ而飛船とても渡海相調丈ニ而は無之段、右船頭より申出たる由ニ御座候、船頭共申口ニは御座候得共、現在見届為参事候間、聊相違は無之事ニ御座候、右通大変之儀付人数等御繰出之御用意茂有之趣申来候、且又去冬琉球より三百里余茂相隔候八重山島・宮古島江唎咭唎国之船漂来、暫く滞在、致測量候儀為有之由承候旨をも申出、何れ琉球国より之飛船入津候は、委細之成行長崎は勿論御当地江茂御届被仰上ニ而可有御座候得共、いか様船中不順等之故ニ茂候哉、未注進は不相達候得共、右両島江茂致漂来候儀は無別条相聞得、旁以不一方混雑ニ而、中山王始摂政・三司官は勿論在番被仰付置候御役々共一同大心配之趣ニ相聞得申候、依之大隅守様ニ茂別而被成御心配候付、爰許より茂極々急飛脚被差立、御差図茂被成遣、御側役等茂被差下、左候而其末

私ニ茂被差下御賦ニ御座候、右通船頭之申口ニ而未表向之御届は申上兼候得共、異国船両度渡来之儀は相違茂無之候付、御役場之処は御別段ニ而御両敬(殿)又は兼而御懇意之御事ニも候間、極御内々右之趣被仰上置被下候様、御内話可申上旨被仰付候付、何分茂御取繕宜被仰上被下度御頼申進候事、

「天保十五」
「辰」七月「六日」

調所笑左衛門

私領琉球国之内那覇沖江当三月十一日異国船壱艘漂来卸碇候付、漂来之次第相尋候処、異国人は言語文字不通候得共、唐人壱人乗組居、仏朗西国之船人数弐百三拾人乗ニ而広東江罷渡、帰船之折洋中逢難船、船具相損、右修補并粮食為求方致来着候段申出、尤本船江石火矢・鉄砲・鑓・刀等段々乗せ付有之候得共、兵船之様子ニ而は無之候、且又船具修補用之木并粮食用牛・豚・野菜等相求度申出候付相与候処、船具修補は異国人共自分ニ相調候、左候而右船乗頭より仏朗西国之儀弐百年来中国致通融、近来尚相親ミ、依之仏朗西皇帝之命を受中国隣近之諸国可致交通候間、琉球江茂其通問合致交易度旨申出候付、琉球国之儀全体産物相少、勿論金銀銅鉄類は全無之国柄ニ候得は、迚茂交易は不相調段、分而申断候処、一円承知不致、此儀不相調候は和を通し好を可結申聞候付、是又相断候得共落着無之、猶追々彼国大総兵船可致来着候付、交易向等速ニ吟味難相遂候は、右大総兵船来着之上何分返答可致、且右船は通事乗合無之候付異国人壱人・唐人壱人残置、本船は可致出帆旨申出候間、其節茂同様何分交易は不相調訳合、且琉球は清国之屏藩ニ而、彼国并度佳喇島迄致通融、勝手次第外国江交易は不相叶、勿論異国人留置候儀茂不相成趣、再往無余儀相断置候処、同十九日本船は可致出帆旨申出候、然処同日酉刻時分橋船壱艘漕来、異国人壱人・唐人壱人浜江卸置、橋船は疾漕帰候付、唐人江子細相尋候処、大総兵船来着之節為通事残居候様乗頭より申付候段申出候付、前以茂達置候通、迚茂留置候儀は不相調段申聞、早速如本船漕送らせ候得

共、其内夜入本船茂不相見得漕帰り候付、無是非近辺寺中明除召置、柵を結、番所等数軒相構、夜白勤番申付、三司官初相詰堅取締申付置候、然処同廿八日、通事唐人を以暎咭唎国多年琉球を望之心深ク、追々兵船差渡ニ而可有之、仏朗西国と致和好得保護候は、自ら暎国より被奪候難茂無之と申聞、其上天主教を強而伝授可致との趣も申聞候得共、琉球は中国之教化を受、孔孟之道を学候付、天主教と申は難成と之趣ニ而相断置、夫迚取扱致疎意置候而は、憤を挟ミ大総兵船来着之節、猶更難渋可申掛勢故、折角叮嚀を尽し無異儀令帰帆候様取計可仕候、右付而は異国人・唐人共夫々被仰渡置候通致取計度事候得共、琉球之儀遠海相隔候端島ニ候得は、万一大総兵船来着、右次第露顕之時は端島之儀難及手は顕然付、先は平穏之取計いたし置候趣共、委曲飛船取仕立琉球より申越候、就而は此末大総兵船来着、何様難渋申掛候而茂何分ニ茂及理解、無異儀為致帰帆候様可取計事ニは候得とも、自然及乱妨候而は端島之儀以之外之事候付、平日差渡置候家来共茂有之候得共、尚兼而非常之手当申付置候一組之人数、早速琉球江差渡候段、長崎奉行江委曲申達候由、国許家来共申越候、此段御届申達候、以上、

「天保十五」
「辰」

八月十六日　　御名

「本文、辰八月十六日水野越前守様江被差出候事」

私領琉球国之内八重山島江去年十月十日異国船壱艘漂来、役々差越相尋候処、異国人は言語文字不通候得共、唐人乗組居、暎咭唎国之船ニ而人数弐百六拾人乗組致到着候段申出、左候而橋船より浜辺江上陸、布屋取掠両三人ッ、罷在、遠目鏡を以山野海辺等測量、近辺離島迄茂致測量候付、右様上陸は勿論測量等いたし候儀は不相成国法之趣を以只管相断候得共、一円不致承引、右付而は島役共別而当惑難渋いたし、此上強而差留候而は不意之仕形茂可致到来体、端島之小島無是非、夫形堅固ニ番人等付置候処、同十一月廿九日致出帆、且又同十二月朔日宮古島江も異国船壱艘漂来、是又致測量候付、前条同断差留候得共不致承引、同十六日致出帆候段琉球より届来候付、

委曲長崎奉行江申達候由国許家来共申越候、此段御届申達候、以上、

「天保十五辰」
八月十六日　　御名

口演

琉球国江当三月十一日異国船壱艘漂来付而は、先達而委曲御届申上置候通御座候、然処例年差下候運送船、毎茂五六月ニは致着船事候処、当年は稀成不順ニ而九月迄ニは着船不致、如何様琉球国江越年を茂可致と存罷在候処、九月下旬琉球出帆之船海路汐繋等いたし、十月廿日致着船、右出帆迄は大総兵船茂来着不致、残置候異国人両人儀何茂異儀無之、大総兵船之来着を折角相待候様子ニ有之趣琉球より申越候段、此節国許より申越候、一組之人数差渡候付、右面々着之上は成行可申越賦御座候付、至其節候は長崎は勿論爰許ニ而茂御届可申上心得ニ罷在、当分之成行ニ而は何茂御届可仕廉は無御座候得共、此節之儀何分も非常之事御座候付、先其内御手前様迄御内話

「本文、水野様御年寄佐藤新兵衛迄仙波市左衛門を以内話為致、口演書相渡候事」

申上候間、被仰上被下候儀は何分茂宜御取計被下度事、

「天保十五辰」
十一月「十八日」

先達而及御届候私領琉球国之内那覇沖江去年三月十一日異国船壱艘漂来、異国人壱人・唐人壱人残置、種々難渋筋申立候付、差渡候一組之人数、同九月廿二日彼地江致着船候処、両人之者共大総兵船来着を相待候様子ニ相見得、何茂異変之儀は無之候得共、猶又無油断警固申付置候、此上大総兵船来着何様申立候而も及理解、右両人は引渡、猶平穏致帰帆候様可取計旨、彼地江差渡候役々より以飛船申遣候段、国許家来共申越候、此段御届申達候、以上、

「本文、已正月九日御用番牧野備前守様江被差出候事」

「弘化二巳」
正月九日　　御名

琉球国江異国人壱人・唐人壱人残居候者共、其後何そ様子相分候儀は無之哉、帰国茂被致候事ニ付、当時之模様御承知被成度御達之趣奉畏候、則重役共江申聞取調候処、

「本文、阿部伊勢守様より御尋付御届被成候事」

今以大総兵船之様子は不相知、異国人・唐人之両人は矢張平穏ニ滞在いたし候付、猶又無油断警固厳重ニ取計置候旨、彼地江差渡候役人共より申越候段は御当地江茂相達候得共、何茂相替候廉は無御座故御届不申上候、猶御達之趣国元江申越候様可仕候、此段御届申上候、以上、

「弘化二巳」
五月二日　　御名内　半田嘉藤次

先達而及御届候私領琉球国江去年三月異国船壱艘漂来、「本文、巳五月九日御用書戸田山城守様江被差出候事」異国人壱人・唐人壱人残置本船出帆候段は、追々申達候通ニ而、此節帰国之上琉球国政筋之儀は勿論、猶又厳重致警固候様厚致沙汰、其外手当向等之儀共当地詰合之琉球人江急度致直達帰国申付候、且大総兵船今以渡来無之、右両人共平穏罷在候段、彼地江差渡置候役々共よりも申越、何茂相替候儀は無之候得共、此段申達候、以上、

「弘化二巳」
四月四日　　御名

口演　手扣

琉球国江残置候異国人より何欵書面差出、於御国許和解有之哉ニ御聞通有之、風評とは被成御察候得共、御役場「本文、阿部伊勢守様より御尋付、弘化二巳六月廿三日別冊相添、大迫源七より差出候事」被成御離候而、御心得迄ニ御承知度旨承知仕候得共、爰許江は右和解之儀、更ニ不相知候付、其段は先達而申上置候、乍去御国許江申越御尋之廉々少々ニ而も相分候儀御座候ハ、申上候様、猶又承知仕、則御国元江申越、在番之琉球人方糺方相成候処、異国船来着、両人を残置以来琉球と可致交易、其儀不相調候は和を通し好を可結抔書面を以申出候付、琉球之儀は金銀銅鉄茂無之、産物も至而薄キ国柄、何分ニ茂難応、其意再往相断置候、就而は別冊之趣意は最初都而書取を以逐一届申出置、尤交易向等否之儀は、追而大総兵船来着茂候ハ、、其節何分可致返答申置候訳茂有之候付、右船無程来着之上は、又候何欵申出之書面茂可有之候付、一所ニ取円届申出積ニ候得共、其後為在番御国元江罷登候琉球人心得ニも可相成と写取持越居候由ニ而、別冊差出申候付、此段申上候様御国許より被仰越候間、何分茂宜御取繕被仰上被下度御

頼申述候事、

私領琉球国那覇川口江去月十五日異国船壱艘渡来、卸碇「本文、已六月廿九日御用番阿部伊勢守様江被差出候事」候付役々差越相尋候処、言語文字不相通、唐人壱人乗組居、暎咭唎国之船ニ而弐百人乗組、当四月広東より呂宋江差越、八重山島江渡り、夫より琉球江致来着候段申出候、本船石火矢等載付有之候得共兵船之様子ニ而は無之候、然処去年三月仏朗西国之船渡来之儀共相尋候付、仏朗西人壱人・唐人壱人残置本船致出帆候段及返答候処、当七月比暎国之船今壱艘可致来着、其節野菜等所望候ハ、相達呉候様申候付、何様之訳ニ而来候哉と相尋候得は、諸方渡海之中途汐掛ニ而何茂子細は無之段申出候、且又食料等任望相与候処、是より日本江渡海地方致見分候段申候付、日本は何方江乗渡候哉相尋候処、此儀は不取究由申置、同十七日亥子之方江向致出帆、八重山島江致来着候儀は遠海故何分未申来候、尤滞船中取締厳重申付置候旨、琉球より飛船を以申越候、日本江可乗渡段申出候付而は、領内浦々猶又取締向申付置、委曲長崎奉行江申達候、此段及御届候、以上、

「弘化二巳」
六月九日　　御名

今度琉球国江異国船漂来仕候儀、飛船を以国元江申越、「本文、御用番阿部伊勢守様江差出候事」其段は別紙御届仕候通ニ而、去年彼地江残置候異国人壱人・唐人壱人之儀は追々申上置候通、別而平穏罷在、大総兵船も于今来着不仕段、差渡置候役々より尚又申越候、何分茂相替儀無御座候得共、此段申上候様国元より申越候、以上、

「弘化二巳」
六月廿九日　　御名内
早川五郎兵衛

私領琉球国之内那覇沖江当四月五日異国船壱艘渡来、卸「本行、弘化三年午閏五月廿日御用番阿部伊勢守様江被差出候事」碇候付役々差越相尋候処、異国人は言語文字不相通、唐人乗組居、暎咭唎国之船ニ而乗頭医師壱人・右妻壱人・男子壱人・女子壱人・唐人弐人、外ニ拾四人、都合弐拾人乗組、広東より渡来之由、左候而宿借請致滞留度段申

出候付、不相成国法之趣相達候処、皇帝之命を受差越候間、地方買取致住居度段願出、是又不相成旨相答候得共、更不聴入、右医師夫婦・子共両人・唐人壱人、都合五人上陸、荷物等卸置、本船は同八日未刻西之方江致出帆候故、無是非近辺寺中明除召置、柵を結、番所数軒相構、三司官初役々相詰、昼夜勤番堅取締申付置、任望食料等相与候、右医師病人有之候は致療治度旨申出候付、医術は中国より伝授致用弁来候由申断置候、然処去々年三月より彼地江滞留之仏朗西人、右唤咭唎人江致面会度旨申出、強而差留候得共不致承引候付、役々附添互ニ往来為致面会候、同六日同国之内読谷山間切沖江異国船壱艘相見得、同国那覇川口沖江乗来候折、滞留之仏朗西人・唐人、右船江可差越、小船貸呉候様申出差留候得共、不致承引候付、小船相渡候処直乗越、小船は即差返、其夜は右船ニ滞留、翌七日那覇湊江碇を卸候付、役々差越相尋候処、言語文字不相通候得共、滞留之唐人より仏朗西船之由申出、三百人乗組、広東粤門より出帆渡来、且大総兵船弐艘追々可来着候付、其節迄は可致滞船段茂申出候、滞留之両人は右船卸碇候節帰来候付、如元警固申付置候、尤本船石火矢等載付有之候得共、兵船之様子ニは不相見得候、是以昼夜勤番、右同様厳重警固申付置候、然処右船中江唤国之者茂相招候付、強而差留候得共不致承引、医師夫婦并男子壱人橋船より差越候付、役々附添為致面会候、将又仏朗西人共浜辺江上陸、測量之様子見受候付、差留候得共不致承引候、大総兵船来着、何様難渋申掛候而茂及理解無異儀為致帰帆、唤咭唎人之儀も被仰渡置候通取計度候得共、端島之儀其通難取扱、是又本船来着之上為致帰帆候様可取計旨、琉球より飛船を以申越候、然は平日差越置候家来共并兼而非常之手当申付置候一組之人数、去々年七月差渡置候得共、若異儀之時宜茂候は即別段人数差渡候致手当置候段、長崎奉行江委曲申達候由、国元家来共申越候、然共前文通不容易訳柄ニ付而は、右一組之人数は則琉球江差渡候様国許家来共江申付越候、此段御届申達候、以上、

「弘化三年」
閏五月廿日　　御名

領内琉球国江唎咭唎国船壱艘并仏朗西国船壱艘致渡来候付、非常手当之人数一組琉球江差渡候様国元江申付越候趣は、以別紙及御届通候得共、右仏朗西船乗頭之者大総兵船跡より弐艘可致渡来旨申立候趣茂有之候付而は、何分不容易次第御座候、依之前文一手之人数差渡候様申付越候得共、猶又私為名代詰合家老之者江手配等之儀委細申含、早速国元江差下、追々琉球表注進次第手当向等無手抜厳重可取計旨厚申付候、此段御聞置可被下候、以上、

「本行、弘化三年閏五月廿日御用番阿部伊勢守様江前文御届書一所（被差出候事）」

「弘化三年」
閏五月廿日　　御名

口上　　手扣

琉球国江当四月五日唎咭唎国之船壱艘渡来、医師壱人・右之妻壱人・男女子共弐人・唐人壱人上陸滞留いたし度申出、本船は帰帆、同七日仏朗西国之船三百人乗壱艘是又渡来、左候而右之者共申口ニは、不遠内大総兵船五百人乗壱艘・同三百人乗壱艘渡来之筈候間、夫迄は相待候と之趣茂申出候由、其儀は別段御届申上候儀ニ御座候、左候而飛船琉球差立候時分は、海上不順逆風勝故、同国之内諸所江致汐掛居、五月十三日乍漸出帆、十里計洋中江乗出候処、白帆大中異国船都合弐艘、琉球運天湊之方江向乗行候を見掛候処、仏朗西船之様相見得候得共、遠方ニ而碇と難見留由、就而は前条仏朗西人共申出候大総兵之弐艘共ニ而は無之哉と、右飛船之船頭申出たる由ニ御座候、弥其通候は追々御届茂申上筈候得共、其比より海上殊之外不順ニ而、則此度琉球より差立候飛船茂弐艘、同案をもたせ出帆為致由候処、壱艘は於洋中時化ニ逢、破船ニおよひ中乗之内致流失候程之事ニ御座候得共、跡より之飛船何分可有御座哉、急ニ上着茂無覚束、殊船頭申口迄ニ而不突留事御座候得共、不容易異国船之事候付、右成行各様迄極内御内話申上置候事、

「弘化三年」
閏五月廿日　　御名内　半田嘉藤次

今般琉球国江異国船渡来付、先日御届申上候後、何分不申越候得共、彼地之事情委細申上度儀御座候付、右取扱掛申付置候家老調所笑左衛門御退出後差出可申候間、御都合次第御逢被成下候様仕度、此段御内慮相伺申候、以上、

「本行、弘化三年閏五月廿三日御用番阿部伊勢守様江被差出候処、同廿五日御退出後御逢可被成旨御達有之候事」

「弘化三年」
閏五月廿三日　　御名

一午閏五月廿五日　　調所笑左衛門

右は今日阿部伊勢守様御退出後罷出候様、去ル廿三日被仰達置候付、半田嘉藤次同伴御勝手江罷出相扣居候処、奥於御書院御逢被成候付、

太守様より之御口上ニ而、琉球国兼而之事情、且一昨年より仏朗西船渡来三ヶ条之難題申掛候趣、又当四月より五月ニ至り大総兵之船々都合三艘渡来旁之成行、細々申上候処、誠ニ不容易御難渋御到来、右は琉球而已ニ限り候事ニ而茂無之、別而不軽訳柄細々御聞届、一々御尤ニ思召候、猶篤と御勘考御勘弁被成候而、追而私御呼出御返答可被仰進との御事ニ候、左候而右は品々入組たる事候付、手扣書は無之哉と御尋ニ付、全私心覚之為御口上之大意断迄認置候趣申上候処、左候は夫を差上候様ニと之御事故、別紙通差上、且極々御内意御役場を御離御聞被下候様ニと之儀茂被仰上候処、夫茂手扣有之候は差上候様被仰聞候付、極々御内意御別紙共弐通御直ニ伊勢守様江差上置候段、罷帰

太守様

少将様江御直ニ申上候事、

但　伊勢守様初而御逢被下候付、笑左衛門儀立帰り、又々御勝手江罷出、公用人山岡衛士江面会御礼申上候事、

一大守様より笑左衛門江御逢被下候、御挨拶大迫源七御使者を以被仰進候事、

口上　　手控

一昨年琉球国江仏朗西国之船来着、和好交易天主教之儀申掛候付、琉人共より程能為申断候得共、乗組之内両人

「本行、阿部伊勢守様江調所笑左衛門殿被差出候節被差出候事」

残置、追而大総兵船可渡来旨申置、本船は致出帆、其後両人之者共より追々通商等之儀申掛候得共、一途ニ相断、未両人は致逗留居候、然は西土之儀、近来段々船乗之道開立、諸方未審之地迄茂渡海いたし、交易又は商館等取建候向ニ御座候由、然処琉球は東洋江之海路ニ而通船之湊ニいたし候得は至極弁利之所と申事之由御座候付、近年は暎咭唎国并亜墨利加等之船々沖合江致汐掛候儀多々有之由ニ相聞得申候、則天保十五卯十月十日琉球之属島八重山島江暎咭唎国之船壱艘来着、日々致測量等、土地之者共江至極叮嚀を尽し、同十一月廿九日出帆、同十二月朔日宮古島江茂渡来、右同様致測量、土地之者江茂是又丁寧を尽し、同十六日致出帆候趣は追々御届申上置通ニ候、然処当四月五日琉球国那覇川口江暎咭唎国船弐拾人乗壱艘来着、医師壱人・右之妻壱人・男女子共弐人・唐人壱人致逗留度申出候付、当国は右様之儀不相成国法ニ付断之段申聞候処、左候は地面買取度趣、是又申出候得共、右同様相断候得は、本国皇帝之命を受差越候付、是非逗留いたし候段申聞、無体ニ諸道具等持卸、本船は同八日致出帆、無拠時宜合付近辺之寺明ヶ渡、右江差置候由、同七日ニは又仏朗西国之船三百人乗壱艘来着ニ而、跡より大総兵船五百人乗壱艘・三百人乗壱艘渡来之筈候間、夫迄致滞船候趣も申出候由ニ付、右之趣飛船を以早々注進申越候処、不順ニ而出帆難成、琉球之内諸所江致汐掛、五月十三日乍漸致出帆、十里計も乗出候処、異国船弐艘琉球運天之方江向ヶ乗来、右は仏朗西船と見掛候趣、飛船之船頭申出、其段茂粗申上置候、未琉球よりは何分之儀不申越候付、今ニ茂注進可有之と相待居候事ニ御座候、右船々来着之上は、定而一昨年申置候三ヶ条之返答可承と申出候儀は相違茂有之間敷哉ニ被察申候、然は琉球之儀は南海之孤島、誠之小国ニ而、金銀銅鉄之類は毛頭無之、水少之土地、五穀は天水ニ而致生熟候国柄、産物迚は黒砂糖之外格別之品無之、殊文国ニ而武器之備は全無之、往古より和漢通商を以立行来候国柄、抑嘉吉年鑑より領分ニ被下置、難有今以領地之事ニ御座候、然共

中山王代替ニは清国より封王使差渡、封爵を請致朝貢来候国ニ御座候得は、三年代ニ而国許より差渡置候在番奉行、其外役々清国之者共江面を合候事は致遠慮候往古より之仕来ニ御座候、乍然内実は清国は素より暎咭唎国・仏朗西、其外外国之者共、琉球は日本江致通商候儀、飽まて案内之事と相聞得候付、仏朗西より三ヶ条之難題申掛候儀欤と被察申候、仍而右三ヶ条之儀、国禁之趣を以強而相断候は、若清国等江引合、彼国より琉球と交易之儀免許之儀共取企自侭之儀共取計候時は、其侭ニは難捨置何れ事を破候外は無御座、然時は勝敗之有無ニ不拘、琉球国より事起り日本之御邪魔とも致到来候而は、誠ニ無申訳次第、何れ無事平穏之取計不仕候而は不相叶儀ニ御座候、就而は此余之儀は書面ニ而難申上御座候間、乍御面働差出候家来より委曲御聞届被下候様仕度事、

「弘化三年」
閏五月

極御内々申上候、抑琉球之儀は嘉吉年鑑より領分ニ被下置、是迄薩州手限ニ而何事茂取治メ為申事候得は、此度「本行、前条一所ニ被差出候事」

迚茂奉訴候様之儀は不仕所存ニ御座候得共、一昨年仏朗西船来着、和好・交易・天主教之三ヶ条難題申掛候儀は、御届申上置候通ニ御座候、其節残置候仏朗西人共より折節右三ヶ条之儀申出候得共、其時之摂政・三司官共より断申置候趣ニ御座候、左候而此度渡来之仏朗西人共之様子を承候処、来着早々上陸、馬上ニ而琉球内諸所恣ニ致横行候趣ニ御座候得は、定而一昨年同様難題申出候半と推察仕候、就而は唐・阿蘭陀外、外国通商之儀堅御禁制之段は深承知仕罷在候得共、右様難題申掛候付而は、是迄之通理解而已ニ而申断候而茂、迚茂承引仕儀ニ而は有之間鋪、依而交易之道ニ而茂少々究候様御座候ハヽ、琉球は外藩之儀ニも御座候間、琉球限之取組ニいたし、地方江は右船々渡来不致様為仕度、乍然未応対も不仕事候得は、何分之儀ニ可有之哉難計候得共、精々中山王初摂政・三司官共無事平穏之取計仕候様、早々申越候様仕度、右は書面等ニ而表向奉伺兼候付、極御内々御内慮別段相

伺候事、
「弘化三午」
閏五月

口上

手控

一昨年琉球国江仏朗西国之船来着、和好・交易・天主教之難題申掛、剩乗組之内両人残置、右之者共より追々交易等之儀申掛候得共、一途ニ相断、未両人は致逗留居候、然ニ西土之儀、近来段々航海之道開ケ立、諸方未審之地迄茂致渡海、交易又は商館等取建候向ニ相聞得、然処琉球は東海江之海路ニ而、通船之湊ニ致し候得は至極弁利之所と申事之由御座候付、近年は暎咭唎国并亜墨利加等之船々沖合江致汐掛候儀多々有之由、則天保十五年卯十月十日琉球之属島八重山江暎咭唎国之船壱艘来着、日々測量等致し、土地之者共江至極丁寧を尽し、同廿九日出帆、同十二月朔日宮古島江渡来、右同様致測量、土地之者共江同様丁寧を尽し、同十六日致出帆候趣は、追々御「本行、筒井紀伊守殿江被差出候事」届申上置通ニ候、然処当四月五日暎咭唎国船琉球江来着、医師夫婦弐人・男女子共弐人・唐人壱人致逗留度申出候付、国禁之段申聞候処、左候ハヽ地面買取度趣候得共、是又相断候得は本国皇帝之命を請差越候付、是非致逗留候と無体ニ諸道具等持卸、本船は同八日致帰帆、無拠時宜合付、近辺之寺江差置候由、同七日ニは又仏朗西国之船三百人乗壱艘来着ニ而、跡より大総兵五百人乗壱艘・三百人乗壱艘渡来ニ付、夫迄致滞船候趣茂申出候由、右之注進飛船を以早々申越候処、不順ニ而琉球之内諸所江汐掛、乍漸五月十三日出帆、十里計茂乗出候処、異国船弐艘琉球運天之方江向ケ乗来、仏朗西船と見掛候趣、飛船之船頭申出、其段茂粗申上置候、然とも琉球よりは未何分不申越、今ニ茂注進可有之と相待居候事ニ御座候、右船々来着之上は、定而一昨年申置候三ケ条之返答可承と申候儀は相違茂有之間敷哉と被察申候、然ニ琉球国之儀は南海之孤島、誠之小国ニ而金銀銅鉄之類は毛頭無之、薪水乏敷土地、五穀は天水ニ而致生熟候国柄、産物迚は

黒砂糖之外格別之品無之、殊文国ニ而武器之備は全無之、往古より和漢通商を以立行来候国柄、抑嘉吉年鑑より拝領ニ而難有今以領地之事ニ御座候、然共中山王代替ニは清国より封王使差渡、封爵を請致朝貢来候琉球ニ候得は、国許より差渡置候在番奉行、其外役々清国之者共江面を合候事は致遠慮候往古より之仕来ニ御座候、乍然内実は清国は素より暎咭唎国・仏朗西、其外外国之者共、琉球は日本江致通信候儀、飽まて案内之事と相聞得候付、仏朗西より三ヶ条之難題申掛候儀欤と被察申候、仍而右三ヶ条国禁之趣を以強而相断候は、若清国等江引合、琉球と交易之儀、彼国より免許を請自侭之取計いたし候時は、其侭ニは難捨置、何れ事を破候外は無御座、然時は勝敗之有無ニ不拘琉球国より事起り、日本之御邪魔とも致到来候而は誠ニ無申訳次第、何れ無事平穏之取計不仕候而は不相叶儀ニ御座候、就而は此余書面ニ而難申上儀ニ御座候事、

「弘化三年」
閏五月

極御内々申上候、抑琉球之儀は従往古拝領、是迄薩州手限ニ而何事茂取治メ為申事候得は、「本行、前条御用人江一所被差出候事」此度迚茂何茂奉訴候様之儀は無御座候得共、一昨年より残置候仏朗西人共より、折節和好・交易・天主教之儀申出候得共、其時々摂政・三司官共より一途ニ断申置候趣ニ御座候、左候而此度渡来之仏朗西人共之様子を承候処、来着早々上陸、馬上ニ而琉球内諸所恣ニ致横行候趣御座候得は、外船来着之上は定而一昨年同様難題申出候半と推察仕候、就而は唐・阿蘭陀外、外国通商之儀堅御禁制之段は深承知仕罷在候得共、右様難題申掛候付而は、是迄通理解而已ニ而申断候而茂迚も承引仕間敷、依而交易之一筋ニ而茂少々究候様御座候は、琉球は外藩之儀ニ茂御座候付、只今茂清国と琉球と通商同様之振ニ密々之取計ニ候ハヽ、琉球限ニ而事相済候半と存申候、乍然未応対茂不仕事候得共、是非其通ニ入魂、精々中山王初摂政・三司官共無事平穏之取計仕候様、早々申越候様仕度、右は書面等ニ而表向難奉伺事候付、極内御直話申上候事、

「弘化三午」
閏五月

口上

手控

此度領内琉球国江嘆咭唎国船壱艘并仏朗西船壱艘渡来之段は、別段御届申上候通ニ御座候、左候ハ、右仏朗西船乗頭之者共より、不遠大総兵船五百人乗壱艘・三百人乗壱艘致渡来候間、右之者共夫迄相待候趣茂相噺候由、就而は私儀御暇ニ而茂可申上儀当然之事御座候得共、一昨年渡来之仏朗西人共同様、此度茂定而難題申出候儀は案中と相察申候、左候得は私在府ニ而品々不奉伺候而は不叶儀茂可有之候付、先此節は御暇申上候儀は差扣申候、尤領内之儀は、太概外場海岸引受候儀ニ候得は、兼而地方防禦之備厳重申付置候儀ニ御座候得共、猶又手当手厚取計候様、且又琉球表時宜次第ニは直ニ致渡海候儀共、当所詰合之家老早々私為名代差下指揮為仕可申候、又追而直ニ差図等不仕候而不叶儀茂御座候ハ、、其節御暇奉願候様ニ茂可仕候間、右等之趣御含被置、何分ニ茂宜御取成被下度、極内御頼申上候事、

閏五月廿七日阿部伊勢守様より御留守居御呼出ニ而、

御封書被成御渡候付、

御前江差上、御開封被遊候処、御別紙之通被仰進候、

一琉球国江異国船渡来之儀付、不取敢家老共之内国許江差下、重而之模様ニ寄其方ニも御暇可被相願との趣被申聞候得共、今般之儀は不容易次第ニ而、事柄ニ寄候而は

御国体ニ茂拘リ可申程之儀付、其方儀早速御暇可被相願筈ニ候得共、彼地之模様次第、於当地伺其外等取計之品茂可有之候間、嫡子修理大夫御暇被相願、早速国許江相越、諸事之取計并取締向等応機変不失

御国威様、寛猛之場程合能熟慮指麾有之候方ニ存候事、

一別紙之通相達候付而は、明廿八日御暇願之儀可被申聞候事、

一大隅守儀は倅御暇之御礼願書被差出候儀と存候事、

閏五月廿七日

私領琉球国江異国船渡来付、家老之内為名代早速国許江差下、重而之模様次第御暇可相願含候得共、不容易訳合付、私儀は於当地伺等之品茂有之候間、嫡子修理大夫江御暇被下候は、諸事取締向応機変不失御国威様、寛猛之場程合能為致指麾候様仕度、此段相願候、以上

「本文、阿部伊勢守様江被差出候事」

閏五月廿八日　　御名

右之通御暇御願被遊候処、則日

上使御老中戸田山城守様・西丸右同松平和泉守様を以、御暇御給、

御懇之被為蒙

上意、御拝領物等御先格之通無御滞被為済候事、

六月朔日

御両殿様御登　城被遊、

少将様御暇之御礼被仰上、御馬御拝領、

太守様ニ茂右御礼被仰上無御滞被為済候処、御居残ニ而

公方様又々御座之間御中段江御褥

御刀掛等茂不被為　在、其侭

出御、夫江と

上意、御側近ク御進ミ被遊候処、左之通

一琉球国江異国船渡来之処、彼地之儀は素より其方一手之進退ニ委任之事故、尤度之儀茂存寄一杯ニ取計、尤之進退ニ委任之事故、此度之儀茂存寄一杯ニ取計、尤国体を不失寛猛之所置勘弁之上、何れも後患無之様及熟慮取計向等機変ニ応し取計可申と被為蒙

「琉球国江異国船渡来之処、彼地之儀は素より其方一手之進退ニ委任之事故、此国体を不失寛猛之所置勘弁之上、何れ茂後患無之様、及熟慮取計向等機変ニ応し取計可申候事、」

右朱書は、上意之趣、万一御聞得難被遊儀茂可有之候付、阿部伊勢守様御直筆ニ而御認被置候趣ニ而、御内々被成御渡候事」

上意、御請御礼被仰上御退去被遊、猶又阿部伊勢守様を以御請御礼被仰上候事、

但

右様御叮嚀成御取扱は、御老中方其外重ヲ御役方江被仰渡振ニ而、外々様抔江被仰渡儀ニ而無之由、是

は全御由緒柄・御席柄・御家格等茂格別之御事候付、
別段之以
思召、右通被
仰出候御事と阿部伊勢守様より調所笑左衛門御直ニ
承知仕候事、

「午」
一六月五日
少将様江御達被成候御用之儀被為　在候間、朝六半時
迄被成御出候様、阿部伊勢守様より前日被仰進候付、
五日右御刻限ニ
少将様彼御方江被為　入候処、御逢之上、去ル朔日
上意之趣、其外御国許江御下向之上御下知相成候儀共、
鎖細被仰達候事、

「午」
一六月八日阿部伊勢守様より笑左衛門御呼出ニ付、朝六
半時参上仕候処、無程於御小書院御逢、御別紙御渡、
御口達を以品々鎖細ニ被仰聞候付、罷帰
太守様江御直ニ申上候事、

琉球国江仏朗西人共罷越候節、難題申懸候儀付取扱方
「本文、御書取外品々御懸篇之儀共被仰進、右之趣」
心配被致候段、尤之儀ニ候得共、交易等之儀は
「太守様江一々御直ニ奉申上候事」
公辺より難被及御沙汰筋ニ候、併琉球国之儀、其方領
分とは乍申国地同様ニ難取扱段は無余儀相聞、既ニ此
度之一条は其方存寄一杯ニ可取計旨被
仰出茂有之儀付、寛猛之所置其時宜ニ応し、後患無之
様思慮之上取計可被申候事、

先達而申達置候私領琉球之内那覇湊江、当四月七日卸
「本行、弘化三午六月三日御用番青山下野守様江被差出候事」
碇居候仏朗西船江一昨年より滞留之唐人差越候付、小
船貸呉候様五月六日申出候付、任其意役々附添為乗移
候処、其形右仏朗西船出帆、翌七日同国之内運天湊江
卸碇候付、三司官初役々差越警固之儀厳重申付置候、
同十一日那覇沖江異国船壱艘相見得、運天之様乗来、
同十三日同所湊江卸碇候付、役々差越相尋候処、言語
文字不相通、仏朗西国之船三百人乗組広東より出帆致
来着候旨、手様等を以漸相通、石火矢等載付有之、前
条同断昼夜勤番堅取締申付置候、同十二日那覇沖江異

国船壱艘渡来、一昨年より滞留之仏朗西人、右船江可差越候付、小船貸呉候様手様を以相通、任其意役々附添乗越相尋候処、仏朗西国之船五百人大総兵乗組広東より渡来之旨、手様等を以漸相通、右滞留仏朗西人は本船江乗移、其形無程出帆、翌十三日是又運天湊江卸碇候付、同断厳重取締申付置候、然処右唐人を以大総兵より琉球総理官江致面会度候付、運天之様差越候様、右は仇敵之事ニ而無之、和好申談度趣申出候得共、一昨年渡来之節申掛置候難題筋返答可承と之事は相違有之間敷、卒爾ニ致面会候而は不容易訳柄ニ御座候間、先不致面会内、右滞留之両人を以為致熟懇、可成丈和好程能及理解、平穏之取計を以無異儀為致帰帆候様仕度、猶委細之儀は追而可申越旨、琉球より飛船を以届来候付、長崎奉行江申達候由国許家来共申越候、此段及御届候、以上、

「弘化三年」
六月三日　　御名

薩州御領内之儀、海岸引請之場所付防禦筋往古より厳重之儀ニ可有之と被思召候得共、此節柄別段御備場所等為被相重ニ而茂可有之哉、右御備場所何方江何ヶ所究り之諸所、御弁前御逢之砌、御国許御着之上は海岸諸所御見廻茂有之、尚御備向厳重有之度趣共御噺合茂被成置候、定而大隅守様より委細為被仰含筈なから、右等猶又被仰進度被思召候、右は御続柄殊ニ別而御親敷御事ニ而、此御方御同様御配意被在候付、極御内々被仰進候趣共、大隅守様被成御承知不一通御懇切之御事共、別而忝御大慶思召候、仍而御領国中海岸防禦旁之儀、形行左ニ申上候様被仰付候、一御領内之儀、西南之端ニ而北一方地方江相続、東南西は皆共数拾里之間大洋海を請候国柄、其上島々を抱へ、長崎最寄第一之異国口、折々異国船等致漂来候故、往

「一本行付、寅年御届相成候別紙之儀は、異国船渡来之節以来取計向従公義被仰渡候一巻帳ニ有之、尤異国船御手当帳入箱江入付有之候、為見合記置候」

一本行、弘化三年午七月六日御老中阿部伊勢守様御宅江笑左衛門罷出候節同伴半田嘉藤次より御勝手江差出候事」

古より薩隅口(日カ)共数多之郷々相分置、其郷毎ニ城郭ニ備り候場所を城山と号、其麓ニ士共数多居住罷在、地頭仮屋と唱、平日年寄并組頭等之役目申付置、右仮屋江役所を建致日勤、尤御用人等以上之者江地頭被仰付、一郷中之仕置被任置候付、兼而何篇致差図、士共ニは組頭支配ニ而学文武芸等致修練候事ニ御座候、勿論異国船等漂着、依時宜は地頭茂出張致下知候儀ニ而御座候、且又他国境は堀切等申付、通路口ニは士勤番所建置、海岸之場所は猶以右同様ニ而、仮屋江大筒は勿論防禦之武器委く格護有之、右通大洋海を請候場所、平日油断難相成候間、遠見番所数十ヶ所建置、昼夜共士勤番申付、白帆之異国船等帆影相見得候得は致相図候付、年寄・組頭其外士共、兼而御手当之人数、則其場江駈付、勿論近郷方限を以組合を定置候付、早速漂着場江駈付候儀共、兼而厳重申付置候事ニ御座候、尤御城下江は異国向之儀一篇ニ承候役所被建置、御家老之内壱人・御用人弐人、其外数多之役目差分置、注進次第直ニ出張、様子次第ニは御手当之人数幾組茂追々被差出候御手当ニ御座候、尤掛役目之者毎度郷々差廻、武器之改方又は手配等之儀、厳重申付候儀ニ御座候、一数拾里大洋海を引受候得は、湊之外海岸江人家建置候場所数多御座候付、風并次第ニは異国船何方江渡来茂難計、兼而台場と究置候様ニは難致候付、前条通仮屋江砲器等致格護置、異国船漂着之節は直ニ其場江繰出、近郷より茂同様繰出、其外駈付候人数茂身分ニ応し所持之大筒小筒等持越候儀ニ御座候、

一修理太夫様御国許御着之上は、諸所御巡見被成候而、尚御備向厳重御下知御座候様、大隅守様より被仰含候、第一山川と申所、去ル酉年茂異国船漂来之場所、勿論琉球等江渡海之湊口故、往古より番所被建置、大筒等被備置候得共、猶又近年は大筒等被相重、御城下より掛役目之者多人数兼而出張居、其外郷々江茂目付役之者被差出、漂着船等之節、手配は勿論、御城下江注進等之儀、無手抜致下知候様申付差出置候儀ニ御座候、

右は異国船御手当向鎖細ニ申出候様、去ル寅年被仰渡候付、其砌御届申上候ニ何茂相替儀は無御座候得共、度々被仰渡之趣茂御座候付、前条申上候通、異国船方掛御役々繁々郷々被差廻、御手当向等尚厳重申付、聊無手抜様取計仕候儀ニ御座候、去ル寅年異国船御手当向御届申上候別紙写三通相添、此段御内々申上候様被仰付候事、

七月六日　　半田嘉藤次

琉球国之内那覇湊江当四月七日より卸碇居、同五月七日「本行、弘化三年午七月廿日阿部伊勢守様御宅江御留守居持参差出候事」同国之内運天湊江乗廻候仏朗西船壱艘、同十三日右同湊江卸碇候仏朗西大総兵乗船等弐艘、都合三艘共三司官初役々差越、昼夜勤番、左候而大総兵より琉球総理官江致面会、和平之事申談度申出趣有之、追而可及返答旨申達置候趣は、追々御届申達候通御座候、然処総理官之名目ニ而国頭按司役々召列、大総兵乗船江差越致面会候処、外両艘之乗頭ニ茂列席、滞留唐人を以、本国皇帝之命を請差越候旨、殊ニ欧羅巴数国之様子強太申立、琉球ニ茂必仏国ニ親ミ候様、且仏国・清国和好交易免許之文書見せ、其外商道之儀共委細申聞、終ニは和好交易いたし度趣、国頭按司江申聞候付、此儀は国家之大事故国王江申聞何分可返答旨申達置、猶又篤と遂評議、琉球之儀は小国属島偏小、全体産物相少、金銀銅鉄類は全無之、清国屏藩ニ而度(ママ)喇島迄致通融候、清国江代々貢職を供ふ故、入貢之便ニ日用品物買取、又薬種を求療用相達候、右貢物并清国江持渡候諸用物皆琉球之産ニ而無之、専度佳喇島より買求、国用之米穀・材木・鉄鍋、其外器具等茂彼島之商人持来、漸致用弁候得共、且風旱之逢災難候節は、都而米穀之代り蘇鉄を食用に致し、専度佳喇島之商船持来候米穀而已を以日用相弁、実以窮国之事情、右次第広く他邦と交易和好いたし候儀は迚茂不及国力候、再往遠国より渡来芳志之情合、誠ニ以感激之至候得共、旧来度佳喇島より通商恩恵之好茂有之、何分難応其意候間、深く仁慈之仰許容候、帰帆之後宜預奏達旨、折角叮嚀相断

候処、大総兵不致信用、琉球は属島偏小、米穀茂無之窮苦之孤島と申事候得共、此国は唐・日本江茂通商、万弁利能国柄と兼而及承、此度暫致逗留見聞候処、弥其通之事と被察、其方より申聞候通ニは難心得候、就而は仏国通商之事、於許容は以来琉球国益ニ茂相成候様可取計、再往種々申掛候情合難黙止候得共、猶無余儀及理解、再三相断候処、此度は致帰帆、申立之趣皇帝江具ニ奏達ニは可及候得共、大総兵心底不致落着候間、国体之様子見届候形行致奏聞候は、皇帝何分議定可有之、然は皇帝之旨為可申諭、今一ヶ年程ニは可致来着、去々年以来滞留之仏朗西人并唐人は此節列帰、三四ヶ月後、右仏人重而皇命到来之節為通事残置候間、琉球言語可相教旨申聞候付、国禁之旨訳而相断、一同列帰候様申達候得共、更不聴入、仏人壱人御置、一昨年来逗留之仏人并唐人共大総兵船江召乗、都合三艘閏五月廿四日一同出帆、子之方江乗行候、滞船中任望食料等相与、残置候仏人壱人は如最前寺中明除召置、柵を結、番所数軒相構、三司官初役々昼夜勤番堅取締申付置候、且又同十四日同国之内豊見城間切沖江異国船壱艘、干瀬江走揚難儀之体見受候付、早速役々差越、小船差遣挽卸相助候処、乗組異国人之内壱人致溺死、死骸は不相見得、翌十五日那覇湊江挽入、本国并漂着之次第相尋候処、言語文字聢と不相通候得共、仏朗西国之船乗組十六人来着、挽檣相損居候間、右調用之木致所望度様子、手様等を以漸相通候付、昼夜取締申付置、所望之木相与候処、乗頭より運天江差越、大総兵江致面会度旨、手様等を以相達、強而難差留、役々附添差越為致面会、直列帰候処、未致滞船居候付、猶又取締申付置候、将又当四月五日那覇江渡来致滞留候暎咭唎国之医師并妻子・唐人共、今以無異事罷在候旨、琉球より飛船を以届来候段、長崎奉行江委曲申達候由、国元家来共申越候、此段及御届候、以上、

「弘化三年午」
七月廿日　　御名

私領琉球国之内久米島沖江当三月十七日異国船壱艘渡来、

「本行、弘化三年午七月廿日阿部伊勢守様御宅江御留守居持参差出候事」
橋船三艘より異国人拾七人浜辺江漕来候付、役々差越相尋候処、言語文字聢と不相通候得共、食物等払底之体致手様相通候付為取之候処、本船江漕帰、無程夜入、翌朝帆影不相見得候、同四月五日同所沖江異国船壱艘渡来、橋船より異国人六人浜辺江漕来、是又食物払底之体手様いたし候付為取之候処、本船江漕帰、子之方江致出帆候、同八日同所沖江異国船壱艘渡来、橋船三艘より異国人拾八文(人カ)浜辺江漕来、食物払底之体致手様為取之候処、本船江漕帰、無程夜入、翌朝帆影不相見得候、取締向厳重申付置候段、琉球より届来候付、委曲長崎奉行江申達候由、国元家来共申越候、此段及御届候、以上、

「弘化三年」
七月廿日　　御名

私領琉球国江従一昨年仏朗西国并唎咭唎国之船渡来、当年茂大総兵船等来着之段は、「本行、弘化三年八月十四日阿部伊勢守様御宅江御留守居持参差出候事」追々御届申上置候通ニ御座候、右付仲修理大夫事奉願趣御座候処、難有御暇被下候付、則罷下海岸見廻防禦等之儀、至極手厚取計方致指揮候様申付遣候事ニ御座候、然は近来琉球は勿論、其辺江折々異国船相見得、其節之御届申上置候通ニ而、甚心遣之事候付、近比ニは中山王江申遣、王子并摂政・三司官等例外ニ多々国許江召呼、琉球は自往古和漢通商を以立行来候国柄、右は全
公義之御恩沢如何計と
御威光を耀シ、又従来致指揮候故、今日之生計茂無事ニ相整候訳旁私手元江引付直々申諭シ、梢致感服居候事ニ御座候、然処一昨年より当年ニ至り、右之船々渡来難題而已申掛、剰着岸涯より馬上等ニ而琉球内恣ニ致横行、或は軍船之容子旁を以威シ懸、又奸智を廻シ懐候形勢、左様欤と存候得は、琉球人共頻ニ致歎願候趣、大総兵ニは致落着兼候得共、一往帰国之上皇帝江致奏達、来年渡来之上否可申聞と申置、閏五月廿四日引払候、然共一昨年より致渡来居候仏人は四ヶ月之後可差渡と申置、左候而此度茂神父仏人壱人相残候付、列帰候趣申聞候得共不致承知、押々残置候次第、戎情何様之訳共更ニ弁兼候、

就而は来年茂亦来着候半、抑琉球は清国之屏藩故、万々一異国人共彼国江至り馴合置、渡来之上琉球江商館ニ而茂取建候時は其侭ニは難捨置、無是非手を砕候外無之、左候得は琉球一国之難題而已ニ無之、一大事到来、誠ニ不容易、何れ平穏之取計仕外無之、然処今般難有御内命之御主意厚奉敬承、彼是熟慮仕候処、来年は私儀自定例早目御暇奉願、於国元修理大夫江致対面、彼地是迄之成行、彼国事情等直ニ承、猶此後之計策を茂評議仕、依時宜修理大夫参府之上可奉伺品茂有之候ハ、、得と申含候而国許発足為仕度奉存候、其上国許江相詰罷在候琉球人在番親方之者、定例三月交代仕事御座候付、右旬季取後レ不申内私罷下、直ニ取締向等親方江厚申付帰国為仕度候、「御附札」左候得は琉球国中ニ茂格別厳重ニ相響候儀ニ御座候、依而私儀は来正月中旬御暇被成下度奉願候、修理大夫儀は私帰国之上致参府候様、是又奉願候、右旁無余儀訳御取用被下度、此段○御内慮相伺候、以上、「上参府候様可被致候」「願之通、来正月中旬御暇被下ニ而可有之候、且又同氏修理大夫儀は、其方帰国之」「相願申候、以上」

「弘化三年」
八月十四日　　御名

「表立被差出候節は朱書之通」

先達而及御届候領内琉球国之内那覇湊江当閏五月十五日漂来仏朗西国船壱艘、乗組拾六人、挽檣修補相調、同六月二日無異儀致出帆候、且致滞留居候暎咭唎国医師・妻子・唐人并仏朗西人于今滞留罷在候段、琉球より飛船到来、長崎奉行江同氏修理大夫申達候由申越候、此段御届申達候、以上、「本行、弘化三年九月十二日阿部伊勢守様御宅江御留守居持参差出候事」

「弘化三年」
九月十二日　　御名

私事、父大隅守より奉願趣有之御暇被下、当六月其御地発足、七月末国元江致下着、早速一昨年より仏朗西国并暎咭唎国船琉球国江渡来、当年茂大総兵来着付、当夏彼表より上国之家来并琉球人共江成行承候処、一昨年渡来之仏人共、品々難題申掛候儀は追々大隅守より御届申上候通ニ候、然ニ此節来着之大総兵共は一昨年渡来之者共より猶又強情ニ申募、着岸早々上陸、馬上ニ而琉地之様子広狭抔相しらへ、琉球国自侭ニ横行、付添之者共江数々難題申掛、若哉琉人共越度ニ而茂有之候ハ、、夫を廉々「本行、弘化三年九月十二日阿部伊勢守様御宅江御留守居持参差出候事」「弘化三年九月廿八日阿部伊勢守様江御留守居持参差出候事」

相手ニ取候半と之気色面ニ顕し、又外ニ而は品を替相懐候様之手便、或残居候神父仏人噺ニは、是より二十ヶ年其余茂逗留可致なと申聞、左候而大総兵出帆前乗頭等より琉人共江申聞候は、残置候仏人江琉球言葉并和語等教、仏朗西言葉茂習請、以来不弁利無之様、今通不通ニ而は往々不自由之事候付、互ニ教習書籍等茂可相渡と、品々為先掛事迄茂申諭候付而は、何分輙は断可聞済様子ニ茂不相聞得趣付、琉人より仏人共江申入候は、此国は海中之孤島、殊水は乏敷、天水之恵を以、乍漸五穀茂致成熟事候得は、不熟勝年分国用全不引足故、中国を親とし度佳喇島を母と頼ミ往古より今日を営ミ月日を送候得は、此両国之大恩高キ事太山之如し、深き事は千尋之海ニ茂増れり、此人情可察、右様海外独立之小島如何して大国と交易迚茂不及事可憐なと、殆迷惑之趣頻ニ断申入候得共、耳ニ茂不触、剰怒罵り、今ニ茂琉球は灰燼と可成勢抔見せ掛候得共、元来柔弱之琉人共言葉を返ス事茂難成、却而恐怖、乍然兼而被仰渡御禁制之趣を以、幾度茂只管相断候得共何分不聞入、左候而其儀は何様承候而茂、此大総兵ニは落着不致候付断之品、且又大総兵見聞之成行は一往帰国之上可致奏達、左候は皇帝何分議定可有之候間、今壱ヶ年程ニは又々渡来否可申聞と申置致出帆候段申出候、扨又今ニ逗留暎国之医師并神父仏人は同穴之者ニ而は無之哉、深相探候得共不分明由、右等不審之廉々何分弁兼候付、何れ大隅守来年帰国之上品々深申度儀茂多々有之事ニ候、左候得は又同人思慮茂可有之、其上ニ而来年琉球江差渡候家来并帰国之琉人等江、何れニ茂三ヶ条之難題は庶而相断候様申談厚申聞差下候様可仕、抑三四ヶ年以前より及両三度、数万里を隔たる荒波遠海を茂不厭渡来、加之暎人・仏人居住迄茂為致置候次第、一朝一夕之事共不相見得、底意根深訳と被察候、就而は来年渡来之上其時宜如何可有之哉、気長き者共候付来年渡来可致哉、一昨年茂来年渡来と申置、昨年は来着無之、当年為参事候付、来年渡来之処何共難計候、将又追々申上置候通定式差渡置候人数外、軍役之者共多人数差渡置、

殊一昨年より追々異国船渡来始終之入費、又暎人・仏人長々逗留付而は、警固旁厄害多、是迄之入価夥敷、和漢通商而已を以乍漸生計之琉球、折悪敷一昨年は旬季不宜、穀物を初砂糖、其外作職大不出来故、猶又難立行次第付、大隅守蔵方より追々兵粮外救米迄茂差渡候、然ニ地方と違荒波遠海を隔候而之掛引ニ候得は、諸事倍増之及入費、大隅守蔵方茂至而不如意改革中不時之異変到来、甚致迷惑候得共、右は軍役之事候付無異儀相勤候事ニ候、且又近来日本地方諸所江異国船漂来付、猶又海岸防禦之儀、度々

御沙汰茂被為　在候間、此度領内山川辺より諸所海岸致巡見、台場等見分、大筒其外武器取しらへ、猶厳重ニ相備候様下知仕可申候、又追々琉国より注進茂候ハ、早々成行可申上候、私此度致下国候付、此段先御届申達候、

以上、

「弘化三午」
八月廿八日　　御名

私領琉球国江従一昨年仏朗西国并暎咭唎国之船々渡来、「本行、弘化三年九月廿八日阿部伊勢守様江御留守居持参差出候事」当年茂大総兵船等来着、品々難題而已申掛不容易訳柄付奉願趣有之、同氏修理大夫儀御暇被下候付、国元江到着之上琉球表之成行、当夏彼地より罷登候家来、又は琉球人共江承糾候趣は、別段同人より御届申上候通ニ候、然は私儀来早春御暇被下候は、帰着之上修理大夫江猶琉球表并国元事実之成行茂承候は御届ニ而も申上候品茂可有之、又大総兵共ニは来年茂渡海と申置候付、其通ニ茂可有之、然ル上は何様之時宜可相及哉、誠一方ならさる心配此事ニ御座候、旁付爰元より茂番頭并使番等江渡海申渡、細事茂申含遣置候得共、猶又致上国居候琉人在番親方来春交代前御座候付、出帆前以私致帰国、右親方江直ニ細々申含、中山王初摂政・三司官等万端無手抜様可取計旨委曲申付可遣候、其外海岸防禦之儀、度々

御沙汰被為

在候付、此度修理大夫事、領内山川辺より海岸諸所見廻り台場等見分、大筒・武器等取しらへ、厳重相備置候様

可取計旨、分而申付遣置候処、猶厚可申付段申越候、左候而私ニ茂来春帰国之上、大隅郡等之海岸諸所見廻、往古より之備組、猶不動様申付置候様可致候、此段先御届申達候、以上、

「弘化三年」
九月廿八日　　御名

口演

此度悴修理大夫儀、私奉願趣有之御暇被下、当六月爰元「本行、弘化三年九月廿八日阿部伊勢守樣江御留守居持参差出候事」発足、国元江罷下、直ニ琉球表之儀共承届、又爰元より側用人并使番之者江細々彼表取計向申付差下、此度琉球渡海之番頭・使番江猶又修理大夫より茂委申付差渡、其余は同人より別段御届申上候通ニ候、然は中山王より品々断為申由候得共、大総兵ニは一向不承知之趣、誠ニ困り入たる事ニ候、仍倩及勘考候処、従来外国より琉球を目掛候事は、毎年渡唐之琉人共福州辺ニ而風説承居候趣候処、既一昨年より終ニは万里之荒波遠海を茂不厭、琉球江渡来、悪敷事品々取企難題而已申掛、剰仏朗西人等を残置候次第、甚鬱陶敷、縦令琉球計ニ而茂異儀有之候而は不相済事候処、若地方等江大総兵船数艘漂来之時宜共成立候而は、猶更奉恐入次第付、責而は琉球限ニ而是非繰留一廉之御奉公を茂相勤度所存ニ御座候間、先達而差渡候番頭并使番共江工夫之種々為申遣事候得共、異国人共江直対は不相調故、是非琉人共江申諭、又々申伝事候得は、右之者共能々差はまり不致理解候而は不詮立事候付、兼而差渡置候在番等之者より茂追々右之趣申聞、琉人共より歎訴は勿論致理解たる由候得共、耳ニ茂不触理不尽ニ怒り罵り、或は懐候様之事茂有之、始終欺候次第言語道断付、差渡置候若年之者共不堪憤怒、是非事を破り候半なと為申由候得共、何分洋中之孤島故海戦之外無之、然時は不容易取合、仮令は此度は謀計を以得勝利、当座は潔ク茂可有之候得共、後患目前成事無疑と申宥免置候由、就而は中山王手許ニ而是非無事平穏ニ彼国限りニ而繰留候様稠敷申聞候事ニ候、無左時は乍恐御面働到来候半と、敢而心配此事ニ御座候、扨又今一ッ之難渋は

兼而柔弱之琉人共素より剣戟闘争之業合は毛頭不存者共ニ付、異国人共例之威光を震ひ怒り罵り、若和好・交易・天主教不致承知候は、琉球は瞬目之間ニ灰燼と可成なと威シ掛欺候は、終ニは難儀ニ迫り、彼方江琉球人共懐候様之事共候而は、御国威ニ茂相拘候事、頓と無申訳、左候得は無是非事を破候外無之、然時は琉球より事起り日本之一大事及到来候而は誠不容易儀候間、猶来春帰国之上、細々成行承計策を廻し、孰ニ茂無事平穏ニ取扱候様可致、此旨極内御手前様迄申上置候事、

「弘化三年」
九月「廿八日」

私領琉球国之内那覇沖江当七月廿五日異国船壱艘卸碇候付、役々差越相尋候処、乗頭之者唐話太概相通、仏朗西国之船、当五月運天湊江致来着候三艘之内ニ而、出帆後三艘共長崎并朝鮮国江相渡、夫より清国寧波府江差越居、乗組弐百人彼地出帆致来着候、外弐艘は寧波府江致滞船居候段相達候付、三司官初役々昼夜勤番取締申付置候、

「本行、弘化三年十月廿三日御老中阿部伊勢守様江被差出候事」

然処滞留神父仏人右船江差越度申出候付、役々警固為致面会候、其後乗頭より総理官江致対面度申出、国頭按司役々召連致面会候処、先般運天滞船之節、和好交易等断筋之趣意は彼国皇帝江奏文遣置候間、重而否可相達候、一昨年来逗留之仏人列帰候砌、三四ヶ月後可差渡旨申置候得共、此涯難差渡訳有之、右之者来春差渡迄之間外仏人壱人可残置旨申出候付、他邦人滞留不相成国法之事は追々相断置候通ニ候得共、是迄押々滞留之事、甚迷惑之次第ニ候、此度は神父仏人迄茂一同列帰候様相達候処、以之外怒立、領命を以残置候儀不致許容候は可及難題抔様々申掛、押而卸置候、殊滞船中日々八九人又其余も上陸、中山王居城近辺迄茂馬上等ニ而致横行、強而差留候は及大事候勢ひ故、穏便ニ取計置候、且又是迄仏人召置候寺中敷地料及何程候哉、大総兵より承届候様と之趣を以相尋候付、右は往古国王造建之寺ニ而、敷地料等不相知候段相断置候、滞船中任望食料等相与候処、八月十一日又々清国江可差越由ニ而出帆、戌亥之方江乗行候付、

残置候仏人は神父滞留之寺中一所ニ召置、昼夜勤番等堅固ニ申付置候、将又当四月渡来之暎国医師并妻子・唐人共于今致滞留居候段、自琉球以飛船届来候付、長崎奉行江相達候由、同氏修理大夫申越候、就而は又候仏人残置敷地料等相尋候得共、重畳根深き訳と被察、誠不容易次第ニ候間、猶又及熟慮、中山王初琉役々共江篤と取計向申渡候様可仕候、此段及御届候、以上、

「弘化三年」十月廿二日　　御名

私事、父大隅守より奉願趣有之御暇被下、国元江下着、早速琉球表之成行承届、其段は先達而御届申上候通御座候、此度領内山川辺より諸所海岸見廻、防禦備向之儀は往古より致治定来候付、大筒其外武器等取しらへ、勿論山川辺は先年茂異国船漂来之場所付、大砲等試打を茂為致、尚防禦備向之儀、聊怠慢無之様厳重申付置候儀ニ御座候、且又数十里之大洋海を請候国柄ニ御座候得は、兼而台場と究置候儀は無之候得共、応其時宜台場之賦ニいたし置候場所は諸所江有之候、然ニ追々台場之儀御沙汰之趣茂被為在候付、此度大隅守方江申越趣御座候付、同人より猶又御届申上候様可仕候、此段御届申達候、以上、

「弘化三年」十一月朔日　　少将様御名

「本行、弘化三年十一月晦日御老中阿部伊勢守様江被差出候事」

同氏修理大夫儀奉願趣有之、御暇被下国許江下着、山川辺より諸所海岸見廻、防禦備向之儀は往古より致治定来候付、猶此度取しらへ厳重申付置候段は、別段同人より御届申上候通御座候、追々及御届候通、領内之儀東南西は皆共数十里之大洋海を請候国柄御座候得共、風并次第ニは異国船何方江漂来茂難計、兼而台場と究置候儀は無之候得共、応其時宜台場之賦ニいたし置候場所は諸所江御座候、領内之儀数多之郷々相分、郷毎ニ士共召置、近郷(ママ)組合を定、異国船漂来之節は其場江駈付、防禦之備向兼而致治定置候付、聊無手抜様ニ申付置候事御座候、乍然台場等之儀、度々

「本行、弘化三年十一月晦日御老中阿部伊勢守様江被差出候事」

御沙汰之趣茂被為
在、此度修理大夫海岸見廻、台場等之儀申越候趣茂御座
候間、私儀来春帰国之上厚致評議、此度は可然場所江台
場相築、猶其上御届申上候様可仕候、此段御届申達候、
以上、
「弘化三午」
十一月晦日　　御名

私領琉球国之内那覇沖江当八月廿三日異国船大中小三艘
「本行、弘化三午十二月十一日阿部伊勢守様江差出候事」
渡来卸碇候付、役々差越相尋候処、言語文字不相通、唐
人壱人乗組居、暎咭唎国之船ニ而、大船・中船弐艘は共
ニ弐百四拾人宛、小船は百三拾人乗組、清国寧波府出帆
来着之由、大船乗頭皇命を請差越候間、国王江致対面度
申出、直対不相成国法之旨相断候得共不致許容種々難渋
申立候付、乍漸国王病気之趣を以、布政官致面会度旨相
達候処、其通聞済、翌廿四日布政官之名目ニ而座喜味親
方役々召列、右船江差越候処、外弐艘之乗頭ニ茂列席、
国王安否尋、且近年暎船漂着又は渡来之節会釈等丁寧之
為謝礼致来着候間、宜預洩達旨承候付、翌日国王承知之
挨拶、右座喜味を以厚申述置、左候而当四月以来其国医
師・妻子并唐人長々滞在候而は万端費用不少、且為諸用
弁役々其外昼夜相詰、小国甚及迷惑候付、此節列帰候様
強而申達候得共、種々申凌一円不致頓着候、同日右医師
暎船江差越度申出、任其意役々差添為致面会、漕帰候節
暎人七人・医師一同上陸差留候得共不聴入、地方測量絵
図等相調、其上馬上等ニ而致横行、強而差留候は及騒動
候勢ひ故、役々附添程能致警衛居候、然処同廿六日小船
は出帆、申酉之方江乗行、外弐艘は同廿八日出帆、同方
江乗行候、滞船中警固厳重申付、任望食料等相与候、逗
留仏人ニ茂暎船江差越度申出候得共、此程出帆付其儀不
相整候、尤右医師・妻子・唐人并仏人両人共、于今致逗
留居候段、従琉球以飛船届来候旨、委曲長崎奉行江申達
候由、同氏修理大夫申越候、此段及御届候、以上、
「弘化三午」
十二月十一日　　御名

琉球国江一昨年異国船渡来、其節人数被差渡、又追々
「本行、弘化三午十二月十六日阿部伊勢守様江被差出候事」
来着付増人数被差渡候、人数等之儀は大意御承知之御
事候得共、当時ニ至リ上下何人、又は以前より定例何
人差渡相成候哉、且大砲并小筒何挺と申所御承知被為
在度承知仕、左之通御座候、

備二組

一番頭弐人、其外鑓弓鉄砲奉行以下六百九拾六人
但
一組三百四拾八人ッヽ、

右之通、両度ニ差渡置候人数ニ御座候、

一物頭壱人、其外代官役以下上下百人余

右定例差渡置候人数ニ御座候、其外足軽格之者等弐
百人余罷渡居、右外ニ運送大船年々二十艘余居船御
座候付、小者以下入用之場江は、右水主等召仕申候、

一五百目より壱貫目内外大砲二十挺
内
拾挺兼而差渡有之候、

一小筒五百挺
内
弐百挺兼而差渡有之候、

右外小筒之儀は自分鉄砲銘々持越、壱人ニ而弐三挺、
其上ニ茂持越候者茂有之、究而之員数難申上御座候、

一鉄楯之板三拾枚
右
一昨年差渡申候、

右之通御座候間、御内々申上候様被仰付、此段申上候
事、

琉球国江異国船渡来之儀付、昨年中追々届被申聞候書面
「本行、弘化四未正月十六日阿部伊勢守様江
之内、中ニは不容易廉茂相見得候間、此度帰国之上は弥
大守様御見舞之節御達御直ニ被遊
兼而被
御承知候旨、二階堂志摩馬を以承知仕候事」
仰出候趣相含事情を察し、其時宜ニ応シ寛猛之取扱は此
表江之顧念ニ不及、尤兼而申懸候三ケ条之儀は勿論、
都而御国法ニ不相障様厚く勘弁之上、幾重ニ茂一家之力
を尽シ、万事手抜無之様存意一杯ニ可被取計候、此段猶
又分而申達置候事、

「弘化四未」
五月廿五日

少将様御事、阿部伊勢守様江被遊
御出候処、御直達之趣左之通、
琉球国江異国船渡来之儀付心得方之儀、去夏中修理大夫御暇被
仰出候節、父子一同
御直ニ被　仰含候趣茂有之、其後度々申達候次第も有之候付、大隅守存意一杯ニ可取計は勿論之事ニ而、追々寛猛之所置を茂被相示、滞留異人共横行之振舞無之様取締茂付可申儀と
御安心に御委任被成置候儀之処、追々無屹と承込候は、彼国江差渡し被置候守衛人数之儀、兼而届被申聞候書面之趣とは存外相違之趣ニ茂相聞、其上右人数之内守衛一筋ニ被差渡候者之儀は至而少く、都而右ニ不携軽輩之者多分ニ有之哉之趣、左候而は向後若又々異賊渡来理不尽ニ闘争之儀茂有之節は、如何様可被取計見込ニ候哉、且兼而被申聞候通、琉球は弱国ニ候得は後立一際厳重ニ無之而は、殊ニ寄離心を生し可申哉茂難計、
万端御委任之儀とは乍申、右様之事共ニ而は兼而被
仰含候御趣意ニ齟齬致し候事ニ候間、無急度申達候、猶勘弁茂可有之候事、
口引返しニ
松平大隅守
松平修理太夫江内達覚
琉球国江度々異国船渡来付、守衛向等之儀は追々御届申達置候処、今般守衛人数等之儀ニ付御書取を以御内達之趣承知仕奉恐入候、依而早速右成行は国許大隅守江申越候付、御受之儀は追而申達候様可致候、右一条取計向ニ付而は品々所作有之儀ニ而、たとへハ赤キハ赤キニ似寄候儀可有御座、しかし夫ハ真実之ものニは無之と申類之事茂候半哉と、彼是勘考之訳茂候得とも、右事情には何れ大隅守承知之上申上候様可致候、尤猶此上共決而御趣意相違之儀無之様勘弁可致取扱趣茂分而申越候事ニ候、此段御内々申達候事、
一少将様御事、六月十一日暑中付御機嫌御伺として青山下野守様江被為

入、右御済之上、先達而阿部伊勢守様より御書取を以御承知被遊候御一条、則御国許江茂被仰越候、扨御請答之御事如何様御心得被遊御宜敷哉と御打掛御尋被遊候処、何茂急度御請等ニは被為及間敷、折角御厳重ニ御手当向被仰付可然、尤御穏便之方御宜敷御内々御達之御事候付、決而表通り之御受答ニ不被為及、此以後精々御行届有之候様と之段、下野守様御内話之由奉伺候事、

一同十三日阿部伊勢守様江被為入、先達而御書取を以御内達

御承知之御一条、則御国許江被仰上越候段被仰述候、尤御別紙之御意味合、大意迄を得と御演説被遊候処、伊勢守様御尤ニ思召候、如何様右様少々御行違之御事も為有之筈候半、

太守様より急度御請答ニ茂被為及間敷候、御書取之趣得と御承知被遊、猶又御厳重ニ御手当等御行届御肝要と思召候、勿論琉球国は小国之由候付、多人数渡海六か敷候ハ、近島迄被差渡、後ロ立相成候様御取計、且又日本之御威光強き所を第一ニ被成、且琉人共異心を不差起様御取計御肝要之事ニ候、当時は諸所江異国船渡来付、

公辺御手当向御厳重ニ御吟味被仰付事御座候付、琉球茂折角御手当御厳重ニ御取計有之度事ニ候、少々ハ御行違之事茂為有之筈候得共、当時は猶更鎖細之事まても能相知申候付、呉々も御行届有之候様有御座度事御肝要ニ候、且滞留人共自侭ニ横行いたし候段御申出茂有之候付、先達而笑左衛門江衛士を以段々為致内話、少シハ手強キ方ニ取計、可然些強威を見せ付度との趣を申入させ候得共、相談出来兼候段茂御内話有之候由奉伺候事、

一唐物五種之御再願は、不容易品柄故御免許難被成事候得共、琉球及困窮、若哉変心いたし候様ニ成立候而は、第一御国体ニ茂相拘事御座候ニ付、右等之所深く御取調無御拠御免許ニ茂相成候付、御威光を不失折角御趣

意立行候様御指揮肝要と之御事共、細々伊勢守様御沙汰之由、依而従
少将様委細御内話之趣被遊
御承知候、猶又御国許江可被仰上儀と之段、御相応ニ
被仰答候由奉承知候事、
右三ヶ条之通、青山様・阿部様江
御出御内話之上被遊
御承知候趣共　御直ニ承知仕候、
将曹
去月廿五日同氏修理大夫被召呼、御書取を以御内達、種々
御内諭之趣委細申越、殊
一位様御由縁茂有之、格別御親ヰ所ニ而何事茂無御遠慮
所より御内達之段、分而致承知、別而忝次第奉存候、如
御内諭去夏中修理大夫御暇被下候節、父子一同厚
上意之趣承知仕、其後度々御達之趣茂有之、追々差渡候
者共江寛猛之取計厚申含越、滞留異国人共横行之振舞無
之様、取締向等追々御届ニ茂相及、
御安心之御事候処、彼国江差渡置候人数御届之表とは致
齟齬居候趣、誠ニ恐入儀ニ御座候得共、已ニ昨年渡海為
仕候番頭村橋左膳以下一組之人数、順季差急為致出帆候
処、其砌順風不宜由御座候間、如何様洋中逆風ニも逢候
哉、今以不致琉着段此節相達、遠海殊荒波之事ニ而右躰
之風災茂有之、繰違ニ茂罷成候訳御座候間、御聞通之趣
は恐入候得共、何分手当前後之次第は宜御勘弁被下度、
就而はおのつから当秋渡海之時候相成候得は、右代之者
差渡候賦ニ而、一手之人数手当仕置、左候而追々御届申
上置候人数より茂相増差渡筈御座候得共、毎度申上置候
通琉球之儀は誠ニ海中一孤島ニ而十分用武之地ニ無御座、
殊更日本江致服従居候儀、清国は勿論外国江茂堅秘居候
国柄御座候へは、異国人共目掛江は難差出、右等之処は
深勘考之上後患無之様所作有之儀ニ御座候、且中山王よ
り清国江使者差渡、異国人共長滞琉罷在候而は難立行趣
を以及歎訴候様可申付越旨相達、去秋池城親方委細申含
為致渡唐置候処、去月廿三日右乗船致琉着、同日琉球出

帆之上国船上着ニ而帰帆之届申出、委細は池城親方無程上国仕届可申出段申来候得共、未致上着、追而清国取計振旁之儀、何れ書面迄ニ而は申解兼候、仍而去ル辰年仏朗西船渡来之節差渡候家来近々差出、是迄寛猛之勘弁を加へ処置仕置候訳、巨細御届申上候様可仕、此末御存寄之儀茂有之候ハヽ、無御隔意御内諭被下候様奉頼候事、

二階堂志津馬

右は、去ル辰年仏朗西国船琉球江渡来之節、番頭ニ付一組之人数召列為被差渡置者御座候処、右付不致上国候而不叶用向有之、致帰郷候上、勤功旁之訳を以役儀御引揚、当時御側向江相勤候者御座候間、昨年清国江中山王より申越趣有之、使者池城親方差向置候処、此度致帰帆、無程上国候筈候付、清国之成行又琉球江滞留仏暎之者振合等委敷承届候上、右志津馬極々急而致出府、初発より人数等被差渡候一件、其外成行申上候様被仰付置候付、前広公用人前迄御留守居より致演説置候様被仰付候事、

右弐通之御書附、折田八郎兵衛便被仰遣候事、

私領琉球国之内久米島江去年十一月十一日・当二月十六日・同三月十一日、及三度異国船壱艘ツヽ、漂来、何れ茂「本行、弘化四未九月十六日御老中阿部伊勢守様・牧野備前守様江被差出候事」橋船より異国人拾人、又は七八人宛浜辺江漕来候付、役々差越、本国并漂来之次第相尋候得共、言語文字不相通、食料払底所望之様子ニ付相与候処、本船江乗帰直致出帆候、当二月十二日同国之内宮古島江異国船壱艘、同十六日同国之内徳之島江同壱艘、同三月九日同国之内大島江同壱艘致漂来、橋船より異国人拾弐三人、或五六人浜辺江漕来候付、銘々本国又は何様之訳ニ而致漂来候哉と相尋候得共、言語文字不相通、食料乏敷趣致手様候付相与候処、厚礼拝、本船江乗帰致出帆候、同四月十六日同国之内鬼界島江同弐艘漂来、橋船より異国人拾七人又ハ八人浜辺江漕来候付同断相尋候処、いんきりす・あめりか鯨漁船ニ而、風波強無拠漂来之段、手様等を以漸相分、是又食料望之体故相与候処、喜悦之体ニ而致礼拝、本船江乗帰致出帆候、右八艘共本船は海上弐三里、又は四五里程茂沖江繋居、委敷不相分候得共、都而鯨漁船之様子

相見得候、尤去午十一月より当未四月迄、右之通琉球属島之内江追々致漂着候段、此度申越、且取締向等厳重申付置、何茂異変之儀無御座候、且又琉球江残置候仏朗西人并暎咭唎国医師・妻子・唐人共于今致滞留居、去年仏朗西船帰帆後未来着無之、渡来候ハヽ、及理解為列帰候様可仕旨、此節琉球より申越候、此段御届申達候、

「弘化四未」
八月十五日　　御名

先達而同氏修理大夫江御内達之趣、具ニ致承知、右御返答、且昨年清国江中山王より使者として池城親方差渡置、「本行、弘化四未九月廿一日御老中阿部伊勢守様江被差出候事」当夏致琉着、此度同人上着、仏朗西人・暎咭唎人共成行茂承届、且例年致上国候在番親方ニ茂此程上着、去ル辰年以来、追々残置候仏暎両国之者共于今滞留罷在候模様、并前書清国江池城親方罷越対談之成行等、去辰年琉球江為守衛差渡候二階堂志津馬儀、委曲相心得罷在事候付、近々同人差出委細御直ニ可申上候間、御都合次第、何卒御逢被成下候様仕度存候、以上、

「弘化四未」
八月十八日　　御名

私領内海岸手広ニ有之、異国船防禦手当之儀は自往古厳重申付、津々浦々江大砲・小筒等用意茂いたし置候事ニ御座候、然共右様手広之事候付、台場と申是迄築立置候場所は無之候得共、異国船渡来之節は其場所時宜ニ応シ大砲等相備候場所は多々御座候、且又台場等茂築立候様致承知候付、昨年修理大夫下向之砌、海岸見廻台場見合茂有之、猶又家老共差遣、右見合置候場所江台場を築、其外右より向之地潟江茂同様築立申候、右ニ申上候場所は城下前浜迄外場より海浜ニ御座候間、其用意専ニ此度築立申候、猶私ニ茂不遠致巡見、手厚防禦筋取計候心得ニ御座候、尤大砲茂連々相増候様致度候付、鑄製方いたし候場所別段取拵、最早相応鑄調為申事ニ御座候、此段御届申達候、以上、「本行、弘化四未九月廿一日御老中阿部伊勢守様江被差出候事」

「弘化四未」
八月十八日　　御名

別紙御届申上候海岸防禦手当筋之儀付而は、近日出府仕候二階堂志津馬儀、絵図面持参、猶委細申上筈御座候事、

先達而修理大夫江御書取を以御内達、殊品々御内諭之趣「本行、弘化四未八月二階堂志津馬、阿部様江致持参候事」等、早速側廻り之者江委曲申含越具ニ承知仕、別而御懇篤之御沙汰厚忝次第奉存候、且唐物再願之一条茂厚御評議被成下、願通御免被仰付重畳忝次第、第一琉球表気請ニ相拘り申事ニ而憂慮罷在候処、事情旁御汲取被下、出格之御沙汰厚差含猶又指揮可仕、深々御礼申上候、且琉球表江差渡置候人数御届之書面とは齟齬仕居候段、委細御聞通相成、万一向後異賊共渡来理不尽ニ闘争之儀茂有之節、如何様取計心得ニ罷在候哉之旨承知仕、誠以恐入次第奉存候、右之成行は先度内御届申上越候通、去春番頭村橋左膳江交代人数等召付差越候処、海上不順、別而荒立為申由候付、如何様及破船候哉、当春迄不致琉着段申来候付、右為代島津登江又々交代人数相付、未順季茂不宜候得共、早々出帆申付、去ル十三日山川津致出帆候段届申越候、乍此上又候申上候儀申披之場ニ相当奉恐入候得共、防禦筋之儀、疎ニ心得候儀ニは曽而無御座候得共、右通風災難施前後繰違而已、甚心痛仕候事ニ御座候、尤兼而差渡置候守衛人数之外、地方物産類之用向ニ而彼地江相詰候者共茂数多有之候付、万一之節は右之者共一同力を尽し候儀、勿論之事ニ付、更ニ人少と申ニハ無之候得共、御届向齟齬仕候趣御聞通之段、御尤之御儀恐入候事ニ御座候、既ニ去夏修理大夫江不時御暇被下候節、私俱々

御前江被召出、厚蒙

上意、其外品々御達之趣茂承知仕、万端御委任之儀、殊ニ不及顧念存意一杯取計候様承知仕候付而は、猶又寛猛之処置仕、

御威光を不失、後患無之様速取計奉安

尊慮度、精々指揮仕申事ニ御座候処、今以逗留罷在、何共奉恐入儀ニは御座候得共、後患之怖レを専一ニ思慮仕候間、何分潔き取計茂出来兼旁心配仕申候、尤去ル辰三月仏朗西船初而琉国江渡来、三ヶ条之難題申掛、仏国人壱人・通事唐人壱人押々残置、三四ヶ月之後可致渡来申置、本船は致出帆候旨、兼而為警固差渡置候在番之者よ

り委細申越、中山王よりは態々飛船差登、使者を以届申出、其節之勢ニ而は再渡来いたし候は直ニ闘争ニ茂及候半、何分琉球国興廃之境危急存亡之旨申越、其段は御届申上置候通ニ御座候、尤自往古為在番番頭格之者江一組之人数差添、隔年為致交代、其刻は交代順年ニ而同春差渡候処、未交代不致出帆、以前ニ而折能二組相重居候付、諸手当向厳重取計、爰元より別段手当人数等不差渡内彼国之船渡来、万一及戦争候時宜茂候ハ、以謀計何れ共取鎮置可申段届申越候付、篤と及評議候処、何共不容易境ニ御座候間、早々守衛人数差渡、若不致着船内仏船渡来及戦争居候ハ、、其可課(ママ)時宜事候得共、成丈以謀計取押、後患無之様取計、未来着茂無之、残置候弐人之者計ニ候ハ、格別ニ丁寧を尽し置、本船渡来之節、義ニ折レ無異儀連帰候様取計仕候ハ、後患茂有之間敷、忽卒之会釈向共有之為致立腹置候ハ、、再渡来之節品々苦情筋等申立、終ニは闘争之時宜ニ茂可成立、然時は琉球より事起、御国体ニ茂相拘り候基相成、奉騒

尊慮而已ならす、当家之瑕瑾此時と深及配慮、種々評議申付候処、後患を避寛宥之処置尤と申出茂有之、又残置候者共恣之儀申出候欤、或は横行等之次第ニ依刑罰を加へ置、仏船渡来有之候節、潔及対争追退候方可然と申出茂有之、何分評議両端ニ相成一決難致、雖然後患を慎寛宥之所置有之、彼方義ニ折レ手を引候得は十分之儀、其儀難整場ニ至候ハ、戦争猛威を示し候儀勿論之筋と評決仕、二階堂志津馬江委曲申含、一組之人数三百五十人程召附差渡候間、琉球之事情異国人行状等追々承届、委細申越候様申付、順季茂不宜候得共、辰八月初旬為致出帆、遠海之儀ニ茂有之琉地都合茂相分兼、且異国船於洋中如何様妨等いたし候茂難計、甚掛念ニ茂存、尤琉着之上専入用之品ニ御座候間、大砲拾挺百目筒以下小筒ニ至り候而は人別其致用意、其外之兵器循板類茂余計ニ差渡、勿論大砲拾挺は兼而琉球江差渡置、小筒之儀は右外ニ茂過分ニ差渡備不意置候儀ニ御座候、左候而海上不順ニ而、漸九月下旬琉着仕、直ニ様子細々相糾候処、仏船未致来

着、残置候者共平穏罷在候段承届、経日弐人之者共行状、或申出之趣、折節三ヶ条之難題申掛、又自侭之儀共申募、或失礼之筋申掛、琉人共怒立候ハ、夫を手蔓ニいたし事を起ス之巧現然之儀多々有之候付、其邪智ニ乗シ逆ヒ申候得は奸計ニ陥申外無御座候間、何様之儀申掛候而茂一向ニ相断、専丁寧を為尽置、折を見合国禁之儀共不差障様相断候処、許容仕候儀茂有之、又申募候儀も有之、何分琉球より事を起させ申候謀計ニは相違無御座候得共、是迄は取合不申、始終丁寧を尽し召置候付、追々本国船渡来仕候而茂格別差咎候廉迚茂無御座、一礼厚申述、無異儀致出帆候次第御座候旨申越、尤前段之通、自侭之振舞等仕候節は差渡置候人数之内、中ニは別而残念之事ニ存、はやり切候者茂可有之候得共、決而忽卒之振舞不仕様堅相制為置、志津馬儀は前段之次第直ニ為承届、去ル巳秋上国為仕、其後追々異国船致渡来候得共、先平穏相治居申事御座候、其上去午四月暎咭唎国医師之由ニ而夫婦・男女子共弐人・唐人壱人召列渡来、是以押々上陸本船出帆仕、其段は御届申上置候通ニ御座候、何分重畳国難相重、兎角今形逗留罷在候而は、終ニ陥奸計御国体相拘リ候儀共到来は必定ニ御座候間、中山王江相達、清国江使者為差渡、琉球国困難之趣遂一申述、異国人無異儀連帰候様及歎願候ハ、戎情茂詳ニ相分可申事候間、去秋池城親方清国江差渡為及歎訴候処、別而汲受宜広東逗留仏暎官人方江達相成候処、仏朗西官人ニは追而迎船差渡可連帰旨返答有之、暎国官人よりは未何分為決返答無之候得共、仏人無異儀連帰候ハ、暎人茂定而同様引払可申候付、池城ニは順季不取後内早々致帰帆、其後届申出候ハ、中山王可致安心と之事ニ而、清国より之返章等相渡候付、当五月福州表致出帆、同月下旬琉着仕、直ニ七月初旬琉球表致出帆候得共、順風不宜諸所江汐掛相応之難船等ニ而、乍漸八月八日上着仕、清国より之返章差出、彼地取扱之成行、且琉地江相残居候者共之次第等申出候間、其儀は先日御届申上候通ニ御座候、右返章等写八通、則入御内覧申候、就而は追々迎船茂渡来可仕

哉、究而は難申上候得共、決而違言有之間敷奉存候付、猶又残居候者共江尽丁寧、迎船渡来候ハヽ、一涯礼譲厚会釈、義ニ折レ再渡来無之様堅致約定置候様ニ茂可取計旨、池城親方其外帰帆之琉人共江委細申付、猶差渡置候役々之者共江申付越候心得ニ御座候、委細は先達而調所笑左衛門を以御届申上置候通相違之儀無御座候得共、前書之如く一向厳猛之取計可然と申出候者ハ、当節之所置寛ニ過候趣ニも存し可罷在候得共、事を破候上ハ最早如何様之良策茂施し難く候間、彼是勘弁を加へ取計候筋多々有之、夫等之意味合ニ依而は異説区々之儀も有之由付、自然疎之取計振抔申唱候事共御聞ニ入候而、御疑惑之廉ニ茂可有之哉、右等之事柄、且清国懸合向之成行并異国人自侭之振舞、難題等之内情事実茂悉く二階堂志津馬相心得罷在候付、今般同人を以申上候間、宜御聞通被為在候様仕度、委細申含置候儀ニ御座候事、

「弘化四未」
八月

海岸防禦手当筋之儀付、追々御届被申上候通、兼而厳重被申付置事候得共、今般領内諸所被致巡見、築立置候台場ニ而大砲遠丁等試打を茂為致候而、格段手厚被致指揮候、猶委細は追而可被申上候得共、右之成行可応御届可仕旨、大隅守申付越候間、此段申上候、以上、

「本行、嘉永元申三月廿九日阿部伊勢守様江被差出候事」

「嘉永元申」
三月廿九日

御名内
半田嘉藤次

琉球国江残居候仏朗西人并暎咭唎人之儀付、清国江掛合越候趣は委細御聞届相成居候得共、其後如何之模様ニ而候哉、又琉球国之一条何と欤聞届候儀茂有之候哉、無急度御承知被成度、先達而御達之趣承知仕、則国許江申越置候処、此節外用向ニ而琉球国より飛船致来着取調候処、逗留仏暎両国之者共今以平穏罷在、折角迎船着岸相待居候趣御座候、追々運送通船順季ニ茂罷成候間、到着之上、猶成行御届可申上旨大隅守申付越候間、此段申上候、以上、

「本行、嘉永元申七月四日阿部伊勢守様江被差出候事」

「嘉永元申」
七月四日

御名内
半田嘉藤次

私領内海岸手広有之、異国船防禦手当之儀は、自往古厳重申付、津々浦々江大砲・小筒用意致置、台場茂追々築立候段は御届申上置通ニ候、先達而私ニ茂海岸致巡見、諸所ニ而大砲等遠町試打は勿論、調練等茂為致、防禦手当向格段厳重申付置候、且又一昨年修理大夫下向之砌、海岸見廻候場所は、兼而私巡見致置候場所付、此節家老共差遣大砲試打調練等茂為致手当向、猶又手厚申付置候、此段御届申達候、

「嘉永元申」
七月六日　　御名

「本行、嘉永元申八月四日阿部伊勢守様江被差出候事」

私領琉球国江仏朗西人并暎咭唎人、唐人召列致逗留候段は、追々御届申上置候通ニ候、去々午七月致渡来候神父仏人事、当正月中旬比より病気有之為致養生由候得共、労咳症之病根ニ而、当六月朔日夜致死去、葬方之儀残居候仏人申出候付致土葬候、且去秋琉球より清国江差渡候接貢船当六月帰帆便より清国滞留之仏暎人江書状差遣候付、即相渡、左候而仏人江迎船渡来之儀不差障様相尋候処、大総兵等乗船弐艘昨年琉球江渡来之筈候処、高麗国ニ而致破船、右乗組人数は清国江罷渡候付、当四月比ニ茂別船より琉球江可致渡来旨、三月付書状を以申来候得共、未致来着候付而は近々来着可有之段承得、暎人方相探候得共為何儀茂不申聞、然処此程より為船中用肉物等江塩抔あて、或琉球器物類土産用として過分ニ相求、毎々海辺ニ茂罷越、若属島之内江暎船渡来茂候は、早々為知呉候様付置候琉人共江申聞候由、尤暎人事は去午五月広東より小舟ニ而渡来付、暎国より迎船迚別段差渡候儀は何分可有之哉、夫故漂着船等相待候儀共ニ而は無之哉と、於琉球茂致評議候段申越候、且又於広東仏人方江致出入候通事唐人より、仏国船は当八九月十月比迄ニは琉球江罷渡筈候旨唐人江相咄候趣、於福州琉人共承届候段申越候、尤相残居候仏人并暎人妻子・唐人平穏罷在、折角迎船を相待居候様子ニ相見得候、迎船渡来之上は及理解、一同穏ニ列帰候様可取計旨、此度琉球より申越候、右ニ付而は当秋迄若迎船渡来茂無之候ハ、列帰候儀、当秋進

貢船より猶又清国江手厚願越候様可致旨堅申付越候趣、
長崎奉行江委曲相達候、此段御届申達候、以上、
「嘉永元申」
八月「七日」　　御名

私領琉球国江去辰年仏朗西船来着ニ而、彼国江和好交易
「本行、嘉永元申十月十一日阿部伊勢守様江被差出候事」
等之三ヶ条許容可有之、無左候得は琉球国迷惑ニも可及
抔品々難題申掛候得共、琉球は誠小国ニ而交易難相調、
殊清国之屏藩、往古より孔孟之道を相学候文国ニ候故、
右三ヶ条之儀は何分難応、其意旁致歎願候得共、中々聞
入候訳ニ無之、若許容不致候得は琉球は瞬目之間ニ灰燼
と可相成抔と品々威掛候得共、大国と小国交易等取組候
儀は、実ニ以難相調は眼前故、幾度茂相断、其後大総兵
船渡来、同様難題申掛候得共、只管致愁訴候処、大総兵
ニは不承知ニ候得共、一往帰国之上達国聴、来年茂渡来
何分可相達、仍而通事之為仏人残置引取候、然共翌年渡
来無之、其段は追々御届申上置候通御座候、右様品々及
手数何分可引取期相見得不申、琉球年々迷惑ニ茂相及、
且私父子被　召出、難有
御内命之御主意厚奉敬承品々手段茂仕候得共、右次第ニ
而急ニ引取候訳ニ無御座候付、此上は孰清国江使者差渡
致歎願候外有之間敷候間、其通取計候様、中山王并摂政・
三司官江委曲申聞候処、一昨午年池城親方清国江差渡、
皇帝江致歎願候処、深切ニ引受、早速広東滞留之仏朗西
官人江引取候様無余儀為申越由候処、是以至極能汲受右
之者申聞候は、同人茂琉球江罷渡致見聞候処、いか様小
国ニ而交易等相調候国柄無之、琉球難渋茂候ハ、迎船差
渡滞留仏人引取候様可取計慥成返答承、其段茂御届申上
置候通ニ御座候、然処当七月廿八日異国船壱艘帆影相見
得候付、則役々差越相守居候処、漸々近寄地方より四五
里程沖江卸碇候付、小船より役々差越候折柄、逗留之仏
朗西人望遠鏡を以旗印を見分ケ、本国迎船相違無之差越
度申出候付、乗せ付漕出、右異国船より茂橋船壱艘漕来
行逢候処、弥仏国船ニ而、逗留仏人は彼方橋船江乗移候
間、琉球役々共ニ茂右仏国本船江乗付候得共、通事乗合

無之候付、逗留仏人江来着之次第且乗組人数等相尋候処、本船は欧羅巴之属島より乗組五百人程ニ而出帆、日数十日ニ致来着候由、自是広東粤門江差越筈候趣申出候、然処翌廿九日仏国船乗頭、其外水主迄四拾人余橋船より逗留仏人倶致上陸、直ニ仏人召置候寺江差越候付、布政官乗頭江面会、互ニ安否相尋候而、乗頭より残置候仏人長々預世話居候得共、此度列帰候と厚及挨拶、其内逗留仏人は早々身廻り道具は勿論敷付類迄も不残橋船江相運、一同相応之及挨拶、別而差急逗留仏人召列本船江乗組、同日暮時分午未之方江向致出帆候、就而は去ル辰年より五ケ年之間交代迄茂いたし、三ケ条之難題、其外苦情而已為申掛仏人無事平穏ニ引取、国中一統致安心候、将又逗留唄人儀、仏国船来着之節為見廻差越度申出、小船より本船江差越、出帆之節は浜辺ニ而相別れ、素より唄人儀は一昨年渡来、医道指南方と申、借船二十人位乗之小船ニ而広東より渡来逗留之者候付、仏人引払候得はおのつから可引取と之趣茂於清国福州総督より池城親方承候由、尤右医師茂昨未年より迎船渡来可致と琉球器物其外土産品相求、或は船中用迚肉物等塩抔あて、日々迎船相待候趣付、是以不遠引取候半と琉球役々并国許より差渡置候役々共より茂申越、尤取締向猶以堅固申付置候旨、此節以飛船申越候付、長崎奉行江委曲相達候由、国許家来共申越候、此段御届申達候、以上、

「嘉永元申」十月十一日　　御名

冊子原寸　縦二八・六糎　横二一糎　一四四枚

二七ノ二

私領琉球国之内那覇沖江当四月五日異国船壱艘渡来卸碇候付、役々差越相尋候処、異国人は言語文字不相通、唐人乗組居唄咭唎国之船ニ而、乗頭医師壱人・右妻壱人・男子壱人・女子壱人・唐人弐人、外ニ拾四人、都合弐拾人乗組、広東より渡来之由、左候而宿借請致滞留度段申出候付、不相成国法之趣相達候処、皇帝之命を受差越候間地方買取致住居度段願出、是又不相成旨相答候得共、

更不聞入、右医師夫婦・子共両人・唐人壱人、都合五人上陸、荷物等卸置、本船は同八日未刻酉之方江致出帆候故、無是非近辺寺中明除召置、柵を結、番所数軒相構、三司官初役々相詰、昼夜勤番堅取締申付置、任望食料等相与候、右医師病人有之候は致療治度旨申出候付、医術は中国より伝授致用弁来候由申断置候、然処去々年三月より彼地江滞留之仏朗西人、右唎咭唎人江致面会度旨申出、強而差留候得共不致承引候付、役々付添、互ニ往来為致面会候、同六日同国之内読谷山間切沖江異国船壱艘相見得、同国那覇川口沖江乗来候折、滞留之仏朗西人・唐人右船江可差越小船貸呉候様申出、差留候得共不致承引候付小船相渡候処、直乗越小船は即差返、其夜は右船江滞留、翌七日那覇湊江碇を卸候付、役々差越相尋候処、言語文字不相通候得共、滞留之唐人より仏朗西船之由申出、三百人乗組広東粤門より出帆渡来、且大総兵船弐艘追々可来着候付、其節迄は可致滞船段茂申出候、滞留之両人は右船卸碇候節帰来候付、如元警固申付置候、尤本船石火矢等載付有之候得共、兵船之様子ニは不相見得候、是以昼夜勤番右同様厳重警固申付置候、然処右船中江唎国之者茂相招候付、強而差留候得共不致承引、医師夫婦并男子壱人橋船より差越候付、役々付添為致面会候、将又仏朗西人共浜辺江上陸測量之様子見受候付、差留候得共不致承引候、大総兵船来着何様難渋申掛候而も及理解無異儀為致帰帆、唎咭唎人之儀茂被仰渡置候通取計度候得共、端島之儀其通難取扱、是又本船来着之上為致帰帆候様可取計旨、琉球より飛船を以申越候、然は平日差渡置候家来共并兼而非常之手当申付置候一組之人数、去々年差渡置候得共、若異儀之時宜茂候ハ、、即別段人数差渡候致手当置候段、長崎奉行江委曲申達候由、国許家来共申越候、然共前文通不容易訳柄付而は、右一組之人数は則琉球江差渡候様、国元家来共被申付越候、此段御届申達候、以上、

「弘化三午」
閏五月廿日　　御名

領内琉球国江喫咭唎国船壱艘并仏朗西国船壱艘致渡来候付、非常手当之人数一組琉球江差渡候様国元江申付越候趣は、別紙を以及御届通候得共、右仏朗西船乗頭之者大総兵船跡より弐艘可致渡来旨申立候趣茂有之候付而は、何分不容易次第御座候、依之前文一手之人数差渡候様申付越候得共、猶又私為名代詰合家老之者江手配等之儀、委細申含早速国元江差下、追々琉球表注進次第手当向等無手抜厳重可取計旨厚申付候、此段御聞置可被下候、以上、

「弘化三年」
閏五月廿日　　御名

口上　　手扣

琉球国江当四月五日喫咭唎国之船壱艘渡来、医師壱人・右之妻壱人・男女子共弐人・唐人壱人上陸致滞留度申出、本船は帰帆、同七日仏朗西国之船三百人乗壱艘、是又渡来、左候而右之者共申口ニは不遠内大総兵船五百人乗壱艘・同三百人乗壱艘渡来之筈候間、夫迄は相待候と之趣茂申出候由、其儀は別段御届申上候儀ニ御座候、左候而飛船琉球差立候時分は海上不順逆風勝故、同国之内諸所江致汐掛居、五月十三日乍漸出帆、十里計洋中江乗出候処、白帆大中異国船都合弐艘琉球運天湊之方江向乗行候を見掛候処、仏朗西船之様相見得候得共、遠方ニ而聢と難見留由、就而は前条仏朗西人共申出候大総兵之弐艘共ニ而は無之哉と、右飛船之船頭為申出由ニ御座候、弥其通候ハ、追々御届茂申上筈候得共、其比より海上殊之外不順ニ而、則此度琉球より差立候飛船茂弐艘同案を為持出帆為致由候処、壱艘は於洋中時化ニ逢破船ニおよひ、中乗之内致流失候程之事ニ御座候得は、跡より飛船何分可有御座哉、急ニ上着茂無覚束、殊船頭申口迄ニ而不突留事御座候得共、不容易異国船之事候付、右成行各様迄極内御内話申上置候事、

「弘化三年」
閏五月廿日　　御名内
半田嘉藤次

今般琉球国江異国船渡来付、先日御届申上候後何分不申越候得共、彼地之事情委細申上度儀御座候付、右取扱掛申付置候家老調所笑左衛門御退出後差出可申候間、御都合次第御逢被成下候様仕度、此段御内慮相伺申候、以上、

「弘化三午」
閏五月廿三日　　御名

御書附一通

但　今般琉球江異国船渡来付、彼地之事情委細被仰上度儀有之候付、笑左衛門殿可被差出候間御逢被下候様と之儀、

御用番
阿部伊勢守様
御用人
山岡衛士

右御勝手江持参仕演説之上差出候処、伊勢守様委細被成御承知、明後廿五日御退出後笑左衛門殿被差出候様右衛士を以被仰聞候、

右之通今夕私相勤、此段申上候、以上、

午閏五月廿三日　　半田嘉藤次

石見様

「午閏五月廿五日」
一　　調所笑左衛門

右は今日阿部伊勢守様御退出後差出候様、去ル廿三日被仰達置候付、半田嘉藤次同伴御勝手江罷出相扣居候処、奥於御小書院へ御逢被遊候付、

太守様より之御口上ニ而琉球国兼而之事情、且一昨年より仏朗西船渡来三ヶ条之難題申掛候趣、又当四月より五月ニ至り大総兵之船々都合三艘渡来旁之成行細々申上候処、誠ニ不容易御難渋御到来、右は琉球而已ニ限り候事ニ而も無之、別而不軽訳柄細々御聞届一々御尤ニ思召候、猶篤と御勘考御勘弁被成候而、追而私御呼出御返答可被仰進と之御事ニ候、左候而右は品々入組たる事候付手扣書は無之哉と御尋ニ付、全私心覚之為御口上之大意断迄認置候趣申上候処、左候ハ、夫を差上候様ニと之御事故、別紙通差上、且極々御内意御役場を御離御聞被下候様ニと之儀茂被仰上候処、夫茂

手扣有之候ハ、差上候様被仰聞候付、極々御内意御別紙茂其弐通御直ニ伊勢守様江差上置候段、罷帰

太守様　少将様江御直ニ申上候事、

但伊勢守様初而御逢被下候付、笑左衛門立帰り、又々御勝手江罷出、公用人山岡衛士江面会、右御礼申上候事、

一太守様より前条通笑左衛門江御逢被下候御挨拶、大迫源七御使者を以被仰進候事、

口上　　手控

一昨年琉球国江仏朗西国之船来着、和好・交易・天主教之儀申掛候付、琉人共より程能為申断候得共、乗組之内両人残置、追而大総兵船可渡来旨申置、本船は致出帆、其後両人之者共より追々通商等之儀申掛候得共一途ニ相断、未両人は致逗留居候、然は西土之儀、近来段々船乗之道開立、諸方未審之地迄茂致渡海、交易又は商館等取建候向ニ御座候由、然処琉球は東洋江之海路ニ而、通船之湊ニ致し候得は至極弁利之所と申事之由御座候付、近年は暎咭唎国并亜墨利加等之船々沖合江致汐掛候儀、多々有之由ニ相聞得申候、則天保十五卯十月十日琉球之属島八重山島江暎咭唎国之船壱艘来着、日々測量等いたし、土地之者共江至極丁寧を尽し、同廿九日出帆、同十二月朔日宮古島江茂渡来、右同様致測量、土地之者共江も是又丁寧を尽し、同十六日出帆いたし候趣は追々御届申上置通ニ候、然処当四月五日琉球国那覇川口江暎咭唎国船弐拾人乗壱艘来着、医師壱人・右之妻壱人・男女子共弐人・唐人壱人致逗留度申出候付、当国は右様之儀不相成国法付断之段申聞候処、左候は地面買取度趣是又申出候得共、右同様相断候得は、本国皇帝之命を請差越候付、是非致逗留候段申聞、無躰ニ諸道具等持卸、本船は同八日致出帆、無拠時宜合ニ付近辺之寺明ヶ渡右江差置候由、同七日ニは仏朗西之船三百人乗壱艘来着ニ而、跡より大総兵船五百人乗壱艘・三百人乗壱艘渡来之筈候間、夫迄致滞船候趣も申出候由ニ候、右之趣飛船を以早々注進申

越候処、不順ニ而出帆難成、琉球之内諸所江致汐掛、五月十三日乍漸致出帆、十里計茂乗出候処、異国船弐艘琉球運天之方江向ヶ乗来、右は仏朗西船と見掛候趣飛船之船頭申出、其段茂粗申上置候、未琉球よりは何分之儀不申越候付、今ニ茂注進可有之と相待居候事ニ御座候、右三艘船来着之上は、定而一昨年申置候三ヶ条之返答可承と申出候儀は相違茂有之間敷哉と被察申候、然は琉球之儀は南海之孤島、誠之小国ニ而金銀銅鉄之類は毛頭無之、水少之土地、五穀は天水ニ而致生熟候国柄、産物迚は黒砂糖之外格別之品無之、殊文国ニ而武器之備は全無之、往古より和漢通商を以立行来候国柄、抑嘉吉年鑑より領分へ被下置、難有今以領地之事ニ御座候、然共中山王代替ニは清国より封王使差渡、封爵を請致朝貢候国ニ御座候得は、三年代ニ而国許より差渡置候在番奉行其外役々、清国之者共江面を合候事は致遠慮候往古より之仕来ニ御座候、乍然内実は清国は素より暎咭唎国・仏朗西、其外外国之者共琉球は日本江致通商候儀、飽迄案内之事と相聞得候付、仏朗西より三ヶ条之難題も申掛候儀欤と被察申候、仍而右三ヶ条之儀国禁之趣を以強而相断候は、若清国等江引合、彼国より琉球と交易之儀免許之儀共取企、自然之儀共取計候時は其侭ニは難捨置、何れ事を破候外は無御座、然時は勝敗之有無ニ不拘琉球国より事起り、日本之御邪魔とも致到来候而は誠ニ無申訳次第、何れ無事平穏之取計不仕候而は不相叶儀ニ御座候、就而は此余之儀は書面ニ而難申上御座候而、乍御面働差出候家来より委曲御聞届被下候様仕度事、

閏五月

極御内意書

一極御内々申上候、抑琉球之儀は嘉吉年鑑より領分ニ被下置、是迄薩州手限ニ而何事茂取治メ為申事候得は、此度迚茂奉訴候様之儀は不仕所存ニ御座候得共、一昨年仏朗西船来着、和好・交易・天主教之三ヶ条難題申掛候儀は御届申上置通ニ御座候、其節残置候仏朗西人共より折節右三ヶ条之儀申出候得共、其時々摂政・三

司官共より断申置候趣ニ御座候、左候而此度渡来之仏朗西人共之様子を承候処、来着早々上陸、馬上ニ而琉球之内諸所恣ニ致横行候趣ニ御座候得は、定而一昨年同様難題申出候半と推察仕候、就而は唐・阿蘭陀外、外国通商之儀堅御禁制之段は深承知仕罷在候得共、右様難題申掛ケ候而は是迄之通理解而已ニ而申断候而茂迚茂承引仕儀ニ而は有之間敷、依而交易之道ニ而も外ニ究候様御座候ハヽ、琉球は外藩之儀ニ茂御座候而琉球銀之取組ニいたし、地方江は右船々渡来不致様被為仕度、乍然未応対茂不仕事候得は何分之儀ニ可有之哉難計候得共、精々中山王初摂政・三司官共無事平穏之取計仕候様早々申越候様仕度、右は書面等ニ而表向奉伺兼候付、極御内々御内慮別段相窺候事、

閏五月

一筒井紀伊守殿江茂閏五月廿六日笑左衛門差越、前文同様之手扣持参、琉球之事情細々申述候処、一々尤之御事と承候間相含罷在、伊勢守殿定而御尋茂可有之候間、細々申上候様可致との返答ニ而候事、

閏五月廿七日阿部伊勢守様より御留守居御呼出ニ而御封書被成御渡候付、

御前江差上御開封被遊候処、御別紙之通被仰進候、

一別紙之通相達候付而は、明廿八日御暇願之儀可被申聞候事、

一大隅守儀は伜御暇之御礼願書被差出候儀と存候事、

閏五月廿七日

一琉球国江異国船渡来之儀付、不取敢家老共之内国許江差下、重而之模様ニ寄其方ニ茂御暇可被相願と之趣被申聞候得共、今般之儀は不容易次第ニ而、事柄ニ寄候而は

御国体ニ茂拘り可申程之儀ニ付、其方儀早速御暇可被相願筈ニ候得共、彼地之模様次第、於当地伺其外等取計之品茂可有之候間、嫡子修理大夫御暇被相願、早速国元江相越、諸事之取計并取締向等、応機変不失

御国威様寛猛之場程合能熟慮指麾有之候方ニ存候事、

私領琉球国江異国船渡来付、家老之内為名代早速国元江差下、重而之模様次第御暇可相願含候得共、不容易訳合付、私儀は於当地伺等之品茂有之候間、嫡子修理大夫江御暇被下候は、諸事取締向応機変不失

御国威様寛猛之場程合能為致指麾候様仕度、此段相願候、以上、

閏五月廿八日　　御名

閏五月廿八日

少将様御事、御別紙之通御国許江御暇御願被遊候処、則日　上使

御本丸御老中戸田山城守様・西丸右同松平和泉守様を以御暇御給、

御懇之被為蒙

上意、御拝領物等御先格通無御滞被為済候御事ニ候、

六月朔日

御両殿様　御登　城被遊、

少将様御暇之御礼被仰上、御馬御拝領、

太守様ニ茂右之御礼被仰上無御滞被為済候処、御居残ニ而

公方様又々　御座之間御中段ニ御褥・御刀掛等茂不為被　在、其侭

出御、夫江と

上意、御側御近ク御進ミ被遊候処、左之通、

一琉球国江異国船渡来之処、彼地之儀は素より其方一手之進退ニ委任之事故、此度之儀茂存寄一杯ニ取計、尤国体を不失寛猛之所置勘弁之上、何れニ茂後患無之様及熟慮取計向等機変ニ応シ取計可申と被為蒙

上意、御請御礼被仰上、　御退去被遊、猶又阿部伊勢守様を以御請御礼茂被仰上候事、

但

右様御叮嚀成御取扱は御老中方、其外重キ御役方江

被仰渡振ニ而、外々様抔江被仰渡候儀ニ而は無之由、是は全御由緒柄・御席柄・御家格等茂格別之御事候付、別段之以

思召右通被仰出候御事と、阿部伊勢守様より調所笑左衛門御直ニ承知仕候事、

先達而申達置候私領琉球国之内那覇湊江当四月七日卸碇居候仏朗西江、一昨年より滞留之唐人差越候付小船貸呉候様五月六日申出候付、任其意役々附添為乗移候処、夫形右仏朗西船出帆、翌七日同国之内運天湊江卸碇候付、三司官初役々差越警固之儀厳重ニ申付置候、同十一日那覇沖江異国船壱艘相見得、運天之様乗来、同十三日同所湊江卸碇候付、役々差越相尋候処言語文字不相通、仏朗西国之船三百人乗組広東より出帆致来着候旨、手様等を以漸相通、石火矢等載付有之、前条同断昼夜勤番堅取締申付置候、同十二日那覇沖江異国船壱艘渡来、一昨年より滞留仏朗西人右船江可差越候付小船貸呉候様手様を以相通、任其意役々附添乗越相尋候処、仏朗西国之船五百人大総兵乗組広東より渡来之旨、手様等を以漸相通、右滞留仏朗西人は本船江乗移、夫形無程出帆、翌十三日是又運天湊江卸碇候付、同断厳重取締申付置候、然処右唐人を以大総兵より琉球総理官江致面会度候付運天之様差越候様、右は仇敵之事ニ而無之、和好申談度趣申出候得共、一昨年渡来之節申掛置候難題筋返答可承と之事は相違有之間敷、卒爾ニ致面会候而は不容易訳柄ニ御座候間、先面会不致内右滞留之両人を以為致熟懇、可成丈和好程能及理解平穏之取計を以無異儀為致帰帆候様仕度、猶委細之儀は追而可申越旨琉球より飛船を以届来候付、長崎奉行江申達候由、国元家来共申越候、此段及御届候、以上、

「弘化三年」
六月三日　　御名

六月五日

少将様江御達被成候御用之儀被為在候間朝六ッ半時

迄ニ被成御出候様、阿部伊勢守様より前日被仰進候付、五日右御刻限ニ
少将様彼御方江被為　入候所、御逢之上、去ル朔日上意之趣、其外御国元江御下向之上御下知相成候儀共、鎖細被仰達候事、

六月八日、阿部伊勢守様より拙者御呼出ニ付、朝六ツ半時参上仕候処、無程於御小書院御逢、御別紙御渡御口達を以品々鎖細ニ被仰聞候付、罷帰
太守様江御直ニ申上候事、

一琉球国江仏朗西人共罷越候節難題申懸候儀付、取扱方心配被致候段尤之儀ニ候得共、交易等之儀は公義より難被及御沙汰筋ニ候、併琉球国之儀、其方領分とは乍申国地同様ニ難取扱段は無余儀相聞、既ニ此度之一条は其方存寄一杯ニ可取計旨被仰出茂有之候儀ニ付寛猛之所置、其時宜ニ応し後患無之様思慮之上取計可被申候事、右御書取外品々御懇篤之儀共被仰進候付、右之趣一々
太守様奉申上候事、

冊子原寸　縦二八・六糎　横二一糎　二九枚

二八　斉興公御心願一巻書抜

（表紙）「御心願一巻書抜」

御内縁之訳を以、先年来奉蒙
「御封書一通ツヽ」御厚恩、追々昇進被仰付冥加至極、国家之美目、先祖江之孝道、子々孫々迄茂耀
御老中格　堀大和守様
御老中　土井大炊頭様
御余光、外聞旁難有仕合奉存候、然処当年迄四拾壱ヶ年相勤、私年輩程相勤候者先祖ニ茂無之候付、
右之通五月七日被差出置候処、得と被成御覧候旨ニ而御書付被成御返候事、
但、御側衆本郷丹後守様并去方等江茂同様被差出候、尤去方等江は写を以御内意等被申込候事、
御由緒柄別段之御取訳を以、当年中従三位昇進被　仰付被下候様奉願候、尤　大奥江茂同様申上置候、
「天保十五辰」五月「七日」　御名

当時柄御内意等申上候儀、御沙汰茂御座候付、深勘弁仕

「一御封書一通宛
候得共無余儀奉内願候、御老中私家之儀は従水野越前守様
東照宮様先祖三位法印義久并宰相阿部伊勢守様義弘・中納言牧野備前守様家久儀は
不軽奉蒙御老中格
御懇命、城州伏見之宿所江は度々被為堀大和守様
成候儀茂有之、右之通、辰十二月十三日被差出候事、殊慶長四年家久於同所国体ニ相拘り候災
難致到来候処、但、御側衆本郷丹後守様御儒者林大学頭殿、其外去方等江も被差出候、尤去方右様
権現様兼々江は写を以御内意被申込候事」
御懇意被仰下候故、右災難之儀窃ニ御別間江被召呼極密
御洩被下候付、則及手当危キ災難を免レ、又元和二年辰
初夏家久事駿河江参上仕候処、
権現様御煩御火急ニ被為
成候付、四月八日之晩細川三斎・家久奥之御座江被為
召、御暇乞と
上意御座候而、三斎江御脇差被成下、家久江はいや正宗
之御脇差拝領被仰付、左候而江戸之儀茂被成御頼候間、
来年は致参府候様被仰付候儀茂有之、其外ニ茂種々
御懇篤、言語ニ難申謝御事共余多有之、国家于今安全之
儀は全ク
権現様深御取持被下候一筋より代々連綿難有蒙
御厚恩来候儀、中々忘却不仕儀ニ御座候、然処何様之御
因縁ニ御座候哉、
広大院様御由緒之御訳罷成、冥加之程何と申上様茂無之
難有次第奉存候、左様御座候得は、
御続柄之御取訳を以故栄翁・渓山、私ニ至迄結構昇進等
被仰付、厚
御仁恵之程重畳難有仕合奉存候、右様
御当家様ニ付而は莫大之蒙
御恩沢候御訳柄ニ御座候間、子々孫々ニ至り候而茂
御厚恩忘却不仕抽誠忠精勤仕候所存ニ御座候、私事最早
相応之年齢罷成、当年迄四十一ヶ年相勤、以前ニは品々
吉凶打続
公務茂難相勤程令逼迫候折柄家督仕候付、則より国中一
統改革之趣法相立、一廉之御奉公を茂相勤度指揮仕候処、
領内一統窮民共ニ茂か也ニ扶助茂相整候付、猶此末国政

専心掛候様可仕、尤先祖代ニ茂私年数程相勤候者茂無御座、琉球人茂両度召連、其時ニ難有蒙
御沙汰、乍此上品々申立候儀恐多奉存候得共、
広大院様御事付而は他家ニ余例茂無御座
御由緒柄、殊
御長寿御繁昌之御末ニは御座候得共、右之
御余光を以出格之御評議被成下、何卒私ニ茂故栄翁同様
従三位昇進被仰付被下度奉願候、左候得は
広大院様御高運之
御余光、私家江茂相残、対先祖至後代国家之規模無此上、
分而故栄翁存生中ニ茂乍恐私迄は
御由縁之端ニ茂相加候半と奉存候間、是非奉歎願候様頻
ニ為申置事ニ候、殊外藩を茂相抱罷在事候得は、守護之
名目茂出候付、位階等厳重相聞得候は命令之威勢茂重々、
承伏之一助ニ茂相成難有儀と奉存候間、何卒従三位昇進
被仰付被下度奉歎願候間、此涯心願成就仕候様幾重ニ茂
御推挙之程、伏而奉願候事、

「天保十五辰」
十二月「十三日」　　御名

私心願之儀、先達而奉願置、又々申上候儀奉恐入候得共、
「御封書一通宛」
来年御暇順年ニ御座候処、国政向無拠筋合ニ而申上趣有
之、当暮御暇可被下段承知仕難有仕合奉存候、然処既ニ
水野越前守様
当年茂無余日罷成候付、重畳奉恐入候得共、先般申上候
阿部伊勢守様　牧野備前守様
通、乍恐
東照宮様を奉始、其後追々不軽奉蒙
堀大和守様
御懇命、
右之通、辰十二月十七日被差出候事、
別而故栄翁并溪山、私迄茂結構昇進等被仰付、
御厚恩之程中々忘却は不仕儀ニ御座候、依而は猶又国政
但、本郷丹後守様江茂被差出候事
専ニ心掛、一廉之御奉公茂相勤度、折角精勤仕候所存ニ
御座候、殊外藩を茂相拘指麾仕候得は、先年茂領内宝
島江異国船渡来及乱妨候節、為警固差渡置候家来、右異
国人頭立候者壱人討留長崎江差出候儀茂有之、其外領内
諸島江折々異国船漂来、其時之御届申上置候通無事ニ取
治メ、無懈怠四十一ヶ年相勤、年齢茂相応罷成候付、乍
恐旧家旁之訳御取用被下、出格之御評議を以奉願候通、

此涯従三位昇進被仰付被下度奉願候、左候得は私は素より旧臣共并国中一統難有奉感服、以前
広大院様御高運之
御余光私家江茂相耀キ、重畳難有仕合奉存候、対先祖至
後代国家之美目無此上、外藩江相聞得候而茂
御余光を奉仰、猶亦威令茂行届、国政之一助ニ茂相成候
間、不顧恐再往奉歎願候付、厚御汲取此涯従三位昇進被
仰付被下候様又候奉願候間、偏ニ御推挙之程宜奉願候事、
「弘化元辰」十二月「十七日」　御名

私心願之儀、一昨年参府之節委細奉歎願置、亦々申上候
儀重畳奉恐入候得共、兼而申上候通、乍恐
「一御封書一通宛」
権現様御代より追々不軽奉蒙
御老中　阿部伊勢守様
御懇命、別而故栄翁并溪山、私迄茂
牧野備前守様　青山下野守様
結構昇進等被仰付、
御厚恩之程は難尽申上次第御座候、依而国政尚又専心掛
戸田山城守様
精勤仕所存御座候、然は領分之儀百里程之海岸相拘候上、
右之通二月朔日御国元御仕出之筋は十二月廿五日被差出候事、

琉球其外余多之島々有之、異国之防第一之要務御座候処、
但、本郷丹後守様・林大学頭殿・筒井紀伊守殿并去方等江も被差出候事
既ニ先年も領内宝島江異国人致上陸及乱妨候を、右之内
頭立候者壱人を為警固差渡置候家来討留、長崎江差出候
儀茂有之、其外島々江は折々相見得、時々御届申上置候
通御座候、且又一昨年仏朗西国船琉球江来着、和好・交
易・教法之儀申掛候付、琉球人共より程能為申断候得共、
乗組之内両人于今残置有之、何様之存慮を以右通致置候
哉内情難計、勿論彼辺は同国より東洋江之通船海路之由
御座候得は折節諸所江致汐掛、近来は猶以毎々相見得、
此儀甚懸念仕儀ニ御座候、就而は琉球諸島人気之固肝要
之事御座候間、段々恩沢を施シ於何方茂致安堵候様撫育
仕候儀ニ御座候、然は前ニ茂申上候通、連々昇進等被仰
付厚
御寵遇之程一統承服仕、最早四十余年之間国中無異取鎮
罷在候儀茂、全
御高恩之訳と深感戴仕居候、左候而年齢茂相応罷成、且
は旧来之家筋旁出格之訳を以御評議之上従三位昇進被

仰付被下候ハヽ、領内属国諸島迄茂猶以威令行届、自然と異国江茂響合候時は乍恐西海之押ニ茂罷成可申、左候得は弥
広大院様御高運之
御余光私家江茂相輝、対先祖至子孫無此上国家之美目御座候間、不顧恐此等之段又々奉歎願候付、厚御汲取被成下、参勤御礼茂申上候は速ニ従三位昇進被仰付被下候様奉願候間、偏御推挙之程宜奉願候事、

「弘化三年」
二月　　御名

口演

一昨辰年、琉球江仏朗西国之船来着、和好・交易・教法之儀申掛候付、琉人共より程能為申断候得共、乗組之内両人残置、追而大総兵船可渡来旨申置致出帆、其後右両人より茂通商等之儀申掛候得共一途ニ申断、未両人は致滞留居候、然は西土之儀近来航海之道開ヶ立、諸方未審之地迄茂致渡海、交易又は商館等取建候向ニ御座候由、然処琉球は東洋江之海路ニ而、通船之湊ニいたし候得は至極便利之処と申事之由御座候付、近年は暎咭唎并亜墨唎加等之船々沖合江致汐掛候儀有之、右旁を以深ク思慮仕候得は、琉球之儀、全体清国之封爵を受致朝貢来候国ニ御座候得は、彼方江対シ為致遠慮訳ニ茂為有之筈候得共、阿片之一条より暎人と及戦争、終ニは清国より納金を以和好之約定相成候哉ニ承及事候得は、其以来国威茂相折ヶ候処より右通致来着候哉、左様之砌柄西洋人共利害を説示し、琉人共之人気致一変候儀共有之候而は一大事之訳ニ候間、近年旧規等ニ不拘何事茂叮嚀ニ取計、偏ニ恩義を以異心を不差起方ニ懐ヶ置申候、乍然国役年貢之寛恵、或は窮民扶助之計ヒニ而は慈愛而已ニ流れ、却而は威令薄方ニ成立候間、今般遮而昇進之儀奉願候趣意は封書を以茂申上置候通、大隅守事旧来之家筋、其上広大院様御内縁茂有之、且数十年国政行届、殊属国迄茂無異儀取鎮罷在、毎度琉人召列致参府候儀共、旁厚以思召、今般従三位昇進被仰付候旨承知仕候は、其段琉球

江申越候得は、如先規為祝儀可致上国候付、其節可申渡趣は、今度格外之奉蒙
御殊遇候付而は、推恩之訳を以中山王会釈之格式一等相進、摂政・三司官共ニ茂右ニ準加級申渡候ハヽ、琉球之儀海外之事ニは御座候得共、年々清国江使者差渡、於彼国官位之次第、衣冠之壮麗等見馴罷在候付、別而感服可仕、左候得は
公義奉仰
御盛恩、次ニは大隅守江難有被仰付候余光、別而美目罷成、中山王初摂政・三司官、其外末々ニ至り弥恩威ニ服し、譬西洋人共より何様申論候共決而相靡申儀有之間敷、左茂無之候而は琉球之儀、誠之孤島ニ而天性柔弱ニ有之、要害之固・兵器之備全無之、其上五穀薪水共乏敷、加之七島灘より琉球迄之間、至而荒波御座候得は、国元より差渡候船々茂一節限り致往来事ニ御座候得は、船中之働調兼候付、西土之戦艦江対シ防禦之術無之候付、是迄始終叮嚀ニ致応答候儀を肝要ニ申付置候儀御座候、若過而戦争ニ及儀共致出来候時は、那覇より王城之間比屋之場所ニ御座候得は、瞬目之間ニ灰燼と可罷成は必定ニ御座候、然上は商館ニ而茂相建、諸国互市之湊ニ致し、日本之隙を窺候様ニ共有之候而は、乍恐天下之御安危ニ相掛候儀と大隅守は勿論、家来共ニ茂寝食を忘心痛仕防禦之手当仕儀ニは御座候得共、前文通之国柄御座候間、此上は御寵遇之以
御威光琉球之人心を鎮、且は領内旧族之家来共ニ茂余多罷在、島方并海岸領地為致来候者共茂御座候付、一統猶以
御高恩之程難有為奉存、只管武備相励、乍不肖西海之押罷成候様尽忠勤度念望奉存候付、件之訳被聞召届、大隅守願之通従三位昇進被仰付被下度、私より茂分而奉願候事、

三月　　少将様　御名

此間封書を以申上候大隅守心願之儀、何卒成就仕候様

偏ニ相願度、私は勿論、家老共ニ茂一向心願仕候事ニ
御座候間、第一外国之響合ニも相成、封書ニ委細申述
候通、後来中山之人気茂猶更心服可仕、且
広大院様御由緒を以栄翁・溪山・大隅守并私ニ至迄、
格別昇進茂被仰付候上之儀ニ而、此上心願仕候儀恐入
候得共、非参議ニ而は全公卿之列と申ニ茂無之、栄翁
ニは全公卿之列ニ茂加り候事ニ而、先例無之と申ニ茂
無之、且別段之
御由緒ニは御座候得共、栄翁ニは隠居之身分、大隅守
ニは在職中、其上御手伝上ヶ金等、先代ニ無之御奉
公茂仕、在職茂四十年余ニ相成候間、此度何卒従三位
ニ昇進被仰付候様、左候得は全く公卿之列ニ茂加り、
在職中右様被仰付候得は、別而
御由緒之訳茂厚ク、後来
御恩沢之程茂顕レ、国民迄茂難有永々御奉公之為ニ茂
宜奉存候、既ニ一昨年
広大院様御在世中内々相願候処
御承知茂被為　在、表向願書差出候様被仰付、差出候
間茂なく
御大変ニ被為及候付、恐入強而歎願茂不仕差扣罷在候、
就而は此度心願之儀、何卒成就仕候様、尤ヶ様之儀申
上恐入候得共、是迄
御由緒を以官位昇進、又は御礼席等茂相変り候事ニは
御座候得共、申さハ一旦之儀、後年家格之規模ニ相成
候儀は無御座候間、何そ一事は永年家格ニ相残り候儀
奉願度相含罷在候得共、不容易儀ニ御座候間、其儀は
不奉願候間、何卒在職中公卿之列ニ加り候は御座候得
は、夫ニ而規模茂相立候事ニ御座候間、偏ニ此度之儀
奉相願度、尤此度昇進被仰付候得は、最早以来一切心
願等申上間敷、且又私ニは追々
御由縁茂遠ク相成候付而は、此度心願通三代迄厚
御恩沢を蒙り候上は、外ニ相願候所存茂無御座候間、
前文申上候永々家格ニ相残り候規模之代りニ、此度限
之御取訳を以従三位昇進被仰付候様、左候得は万代之

後迄茂
御威光は勿論、
広大院様御由緒猶更厚相成、領国之人民は不申及、中
山之人民、其外外国迄茂可奉仰
御仁恵、且当家之規模此上之儀無之候間、呉々茂此段
厚御含被下御評議奉願度奉存候、
一今日御内々御咄申上候儀、
公義を計り候様之儀茂可有御座候得共、貴家とは古来
より格別厚キ御由緒茂御座候事故、私所存打明ケ申上
候条、御役場を御放レ御聞被下候而、如何之儀は御取
捨可被下候事、

当春私従三位昇進之儀奉願、猶又申上候儀重畳奉恐入候
得共、手広之領内外藩迄茂相拘罷在候得は、品々難被黙
止時宜有之、無余儀又候奉歎訴候、就而は旧来之儀、事々
敷申立候茂如何と奉存候得共、抑私家之儀は
権現様伏見

「御封書一通ッ、」御老中 阿部伊勢守様 青山下野守様 牧野備前守様

御在城時分より三位法印義久・兵庫頭義弘・薩摩守従三位中納言家久儀は、別而深御訳合有之、誠ニ不軽奉蒙御懇命、不一通危難を免、引続国家安寧罷在候儀は全権現様御厚恩故之儀と、至今家中一統国民迄茂奉感服、更忘却不仕儀ニ御座候、左候而
御同所様、元和二丙辰年
御不予ニ被為在候御央ニ茂、右家久駿府江被為
召、同四月朔日
御目見被仰付、御脇差・御馬・御時服拝領被仰付、同八
日為御暇乞致登　城候処、御病牀江被為
召、家久之手を御取被遊候而、別儀ニ無之、天下泰平を
只管御頼
思召と之蒙
上意、弥ヤ正宗之御脇指
御手自賜之、且又元和三丁巳七月十八日、於伏見　御城
台徳院様、家久江
御目見被仰付、

（戸田山城守様）
（右之通午十一月四日被差出事、）
（但、御側衆本郷丹後守様・岡野伊予守様、其外去方等江も被差出候事）

御直ニ被任宰相旨
上意、御腰物拝領仕、是則
御当家様依
御執奏昇進被仰付候初ニ御座候、夫より寛永三年丙寅六
月廿五日
御参　内ニ付家久ニ茂供奉被　仰付、同八月十九日、於
二条
御城、従三位中納言叙任仕難有次第御座候、然は彼是弐
百年以来至当時
御当家様之奉蒙
御鴻恩候儀不可勝計、殊ニ近比ニ至り候而は、
広大院様御由縁之御訳を以、故栄翁・溪山并私迄茂不軽
奉蒙
御特恩難有次第、筆紙難申尽仕合奉存候、仍而此上奉歎
願候茂誠恐多奉存候得共、先度茂申上候通、近年私領并
琉球国属島迄茂異国船折々渡来候段は時々御届申上置候
通ニ而、就中一昨年以来、仏朗西船・暎咭唎船数艘琉球
国江来着、和好・交易等種々難題申掛、剰右両国之者残
居候者茂有之、加之当年は度々渡来、此度茂亦蕃人残置
候茂有之、不一方心配仕、不意之手当は勿論戎狄之奸情
難計、何分不及激怒様無事平穏之取計為仕候得共、右通
度々渡来夷人残置候は、畢竟琉球国を相懐候手段之萌ニ
相見得、未安堵之時宜ニ至り不申、海外洋中之孤島、人
気至而柔弱之国柄ニ候得は、終ニは狄人之猛威に致畏服
候様成立候而は、琉球より薩州迄之海上ニは属島余多有
之候付、段々と手を入日本地方江茂相逼り候而は、何様
之御邪魔致到来候茂難計候付、海岸之防禦第一ニ武備を
耀シ不申候而は不相成、左候得は何れ命令之威厳ニ無之
而は承伏茂出来兼、命令之威厳と申候得は、冕角官位高
貴之光輝ニ無之而は不相成候間、一己之栄耀のミならす、
心願通被仰付候上は、国王并摂政・三司官等江是迄通よ
りは階級茂引挙致会釈候ハヽ、難有昇進被仰付候廉琉球
国江茂相響キ、且又一体柔弱偏固之性質、重ニ礼容ニ泥
ミ官位之高下貴賤之差別有之事は、清国ニ而茂能見馴罷

在候付、中山王は勿論、国中一統
御盛徳之御余光ニ致感服候而、異国人共何様申掛候共不
致随順様一統之人心を固メ置候ハヽ、自然と外国之押へ
ニ茂相成候付、無拠位階昇進奉心願候事ニ御座候、左
候而琉球国江は右通防禦之為手当番頭之者、其外追々多
人数交代為致渡海、未攻撃拒闘之時宜ニは至り不申候得
共、平常之渡海とは違ひ、万一戎夷共侵掠劫奪ニ及候得
は、夫相応ニ炮火之矢先ニ身命を抛、日本之武威を示シ
不申候而は不相成事候付、
公用旅行忘身之趣は乍同然、差渡候者共も家郷を離候折
は、再帰家之念慮を絶、
公務一篇ニ忠誠を心掛候事茂実々国事之為計ニ無之、畢
竟は日本之
御国体ニ相拘候事ニ而、夫故忰修理大夫事も当夏私国元
江願之上御暇被下、防禦之為指揮罷下り、私ニは来早春
御暇之上致帰国、修理大夫江旁申承、琉球表は勿論沿海
之諸所防禦之手当無油断様猶可申付候、尤右心願之儀は
乍恐
広大院様御在世中より奉内願候処、追々御願可被下段
御内慮相伺居候折柄
御違例、終ニは奉恐入候御儀ニ被為
成、誠残念至極罷在候事ニ御座候、何卒
御由縁之
御余光は勿論、右等之勤功、且は私年齢茂相応罷成、最
早四十余年無懈怠精勤いたし、国政之儀茂心掛、追々非
常之御用途茂度々相勤、此度琉球江異国船渡来付而は、
領内おのつから之儀ニは候得共、余多之人数茂差渡置候
次第ニ御座候、且又私昇進之儀、旧臣共ニ茂頻ニ奉歎願
居候間、ヶ様之時節旧家之訳等旁御取用被下、出格之御
評議を以今般従三位昇進被仰付被下候様、御推挙之程幾
重ニ茂伏而奉願候事、
「弘化三年」
十一月「四日」　　御名
此度私心願之儀、追々奉歎願候処、今以何等之

「一御封書壱通ッ、
御沙汰無之候付而は厚心配仕候、若内願之事情は全私一身之希光栄候筋ニは毛頭無御座候、去々年以来領内琉球国江暎咭唎国并仏朗西国船之数艘度々渡来、両国之者残置、品々難題申掛候儀は時々御届申上置候通ニ御座候、然処亦々琉球国江暎国船三艘致渡来候段、此節飛船を以申越、昨日御届申上候、右様異国船追々渡来候一条は、此末琉球国浮沈之儀は勿論、御国威ニ相響候事柄付、彼是無此上太切之場合、日夜心痛仕候事ニ御座候、就夫今般内願通蒙御沙汰候得は、私儀格別重御取扱被成下候段、中山王は素より自然と異国迄茂相響畏服可仕儀付、帰国之上万事仕置筋、十分ニ御威光を輝シ、国民一統之励を茂相増、一同心力を尽し異国を押へ、琉球をも可全基、無此上儀と存込候儀ニ御座候、此儀幾重ニ茂御憐察被成下、御出格之思召を以格段之蒙御沙汰候様、只管奉歎願候事ニ御座候間、何分茂宜御推

（御老中、阿部伊勢守様、青山下野守様、牧野備前守様、戸田山城守様、右之通午十二月被差出候事、御側衆本郷様・岡野様并去方江茂被差出候事、但）

挙之程、又候遮而奉願候事、

十二月　　御名

私心願之儀、度々奉歎願候儀奉恐入候得共、私家之儀は東照宮様以来先祖共より至私、莫太之奉蒙御厚恩候儀は先達而茂申上候通、更ニ忘却不仕、其上広大院様御高運之御余光茂私家ニ相耀し度奉存、又々無余儀奉追願候、且又五ヶ年以前琉球国江仏朗西船渡来、三ヶ条之難題申掛候付、品々申断候得共何分聞入不申、剰仏人等残置本船致出帆、又候一昨午年同国大総兵来着、矢張難題申聞候得共、琉球は南海孤島之事候得は和好・交易等相調候国柄ニ無之段、頻ニ中山王より致愁訴候処、何れ帰国之上達国聴、又々渡来之上可致返答と右大総兵ニは致帰帆、右様墓々敷返答茂無之、殊ニ仏人茂残居候付而は琉球之失費不少、其上多人数国元より差渡置、年数ニ茂及候而は甚迷惑罷成儀ニは御座候得共、万々一異変之儀到来、

（戸田山城守様、阿部伊勢守様、牧野備前守様、右之通申十月十七日被差出候事、但、本郷丹後守様・筒井紀伊守殿、其外去方等も被差出候事、「一御封書一通ッ、）

乍恐

御国体ニ茂相拘り候時は無申訳次第ニ候間、何れ此上は清国皇帝より広東出張仏朗西官人共江逗留仏人等引取呉候様使節可差渡旨、中山王江申遣候処、私見込通相運ヒ、此度仏人無異儀引取候儀は則御届申上候通ニ御座候、右通仏人列帰候付而は、国元重役共は勿論、琉球国下民共ニ至迄一統及安堵、分而中山王致大慶候趣申越候、就而は寸功茂相立候様仕度、左候而私事茂最早相応之年齢罷成、家督以来当年迄四拾ヶ年無懈怠致精勤、琉球人茂両度召列、其外御用向茂度々相勤、旁之訳御取用被下、御出格之

御沙汰を以昇進被仰付被下度、只管奉歎願候、左様御座候得は私重ク御取扱茂被成下候儀、自然と異国江茂相響き、別而琉球国諸島迄も人気を固メ、第一西洋之押へニ茂可相成儀ニ御座候間、厚御汲取被下、右申上候通、此涯昇進被仰付被下候様、偏ニ奉願候間、御推挙之程宜奉頼候事、

十月十七日　　御名

口演

今般御届申上候通、私領琉球国江五ヶ年以来滞留罷在候仏朗西人平穏ニ引取候成行は、委細最前差出候書面ニ相認候得共、右始末は仏人共根深キ奸計有之、種々之難題等を申掛、此方動静を量、戦争之発端をも可開と相巧、品々琉人共を恐惑為致候事柄と相察候間、其奸計ニ陥り候而は不相成儀と第一ニ心附、中山王并摂政・三司官初国民共ニ至迄、一統疑懼之心を不生様厳猛之武備手厚相示し候上、専仁慈寛宥之主意を以夫々及指揮候処、敢無異念差図を相守、清国江使節等之儀茂私存込之通取計候事ニ御座候、且又滞留罷在候仏人共追々及見聞候趣茂、琉人共一統日本之御武徳御国恩を奉感戴、下民共ニ至迄聊変動之人気茂不相見、又は仏人共江対し軽率之振舞茂無之、更ニ奸計ニ可陥様子無之候付、所詮謀計之不成就を発明いたし、是迄度々渡来之本国船之者共江も右之様

子及示談致帰国候哉ニ奉存候、依而は初発之際、乍恐厚思召を以私父子被召出、難有蒙御内命

御主意奉敬承、日夜心力を尽し、肝胆を砕き致評議候処、事之成否ニ至り候而は、琉球国之興廃は扨置、御国体に拘り候儀付、容易ニ取計候儀は以之外之事付、再三了簡を尽し候処、兎角武威を以取挫、再渡来不致方之所置可然抔申出候者も有之、自然寛宥之取計ニ過候哉之風評茂相聞、彼是心痛仕候得共、何分一時之快心而已を以後患を引出し候而は、全異賊之奸計ニ陥候儀と思惟仕候付、前件之通計策を運し、終ニ存意之通成行候事ニ御座候、右之通寛猛之指揮を以無事静謐ニ至候段、琉球国中は勿論、領内一統安堵仕候儀御座候、兼而厚御内沙汰等茂有之儀付、今般寸功茂相立候始末厚御執成被下候様、此段幾重ニも伏而相願申候事、

十一月十七日　　御名

今度中山王より以飛船申越候趣は、従往古和漢を琉球之父母と称し、通商之利益を以相建、就中穀物其外日本之産物ニ而相弁来候処、去ル辰年仏国船渡来種々難題申掛候付而は、歴代王爵を受、祖宗之祭祀奉シ来、乍小国数百世之社稷、一時夷賊之為ニ滅亡之期可到哉と、国中一統昼夜沈悲歎居候処、当七月仏国迎船来着、逗留之仏人共無事故引取、国祚再相延、諸民蘇生之懐を成シ、愁眉を開候儀、畢竟重御内命之旨厚申含差渡候家来共、寛猛之処置協時宜御国体ニ不相拘様不失御主意取計、

「御封書一通　右之通申十一月十二日被差出候事、　但、本郷丹後守様・筒井紀伊守殿、其外去方等江茂被差出候事」　阿部伊勢守様

皇国之御威光異域江相耀候儀と深奉謝御恩徳候、依之幼少之事候付為代来夏国頭王子を以謝恩申演度と之事ニ候、然は数年逗留之仏人三ヶ条之利害を説、或は威勢を示し、或は相懐、只管外法教へ導キ候而茂国中一統、聊動揺不致、従来微賤之者ニ至迄孔孟之道歓奉之国柄故、於異教は堅相断候旨一途申放、始終不相変

礼待を厚ふし柔順之道を尽し候付、手を可出廉無之、終ニ平穏致帰帆候次第、誠ニ以不容易時宜付、来夏国頭上国之上は、中山王始摂政・三司官、其外役々迄茂加級品々出格之褒賞不申付候而は、近来万国互ニ邦域を争広メ候風俗故、爾来如何様之異船渡来茂難計候付、益人心固ク相結置候儀、此上肝要之儀と勘考仕事ニ候、抑琉球は自古来九品之位階を以功労を賞し候国法、其上年々清国江朝貢之使者相渡、衣冠・文物之品級能相弁へ、専官爵を尊候国習ニ候得は、兼而奉内願置候儀は勿論、殊ニ国頭上国ニ付而は、此涯格外之以

御評議昇進被仰付被下度奉存候、右之

御盛恩を中山王初役々共江推及シ候ハヽ、弥

御威光奉感戴、猶又人心相結バリ、敢後患有之間敷、然時は奉蒙

御殊遇候儀、自然と海外江茂相響キ、永く西海之鎮護罷成可申奉存候、依而外藩相拘へ候訳旁出格之奉蒙

御評議、此節昇進被仰付被下度、伏而奉追願候事、

十一月　　御名

添書

琉球国江仏朗西人等来着、前後之始末手当向等之儀、太概左ニ申上候、琉球近年大旱風雨之災殃相続、至而難渋之折柄、文政十亥年当王祖父尚灝王依病気隠居願出、尚育王江家督申付、則為御礼国許并御当地江使者為差登、其上封王之冠船如先例引受、清国江恩謝之使茂差渡、御代替付天保十三寅年賀慶使差上、其中国許并清国江朝貢之船々毎度及破損、必至逼迫之折柄、去ル辰年仏人等渡来、大総兵船より千余人乗来、逗留之中琉球役々始多人数召附置、国許より茂上下数百人差渡置、旁莫太之失費ニ而偏少之国力難及、依而過分之粮米、其外救遣候得共、漸々土地致疲労、加之去ル辰年中城王子死去、且尚育王去年致死去、頃日弥以困窮弥増候得共、右異人江之遇待は不相変慇懃を尽し候次第、貧窮之小国実以不容易事候、尤右為指揮追々人数差渡置候趣は時々御届申達候

通、然は於国許茂琉球万一違変到来候得は、夫より端を破り、第一
皇国之禍ニ可相成は必定之事候付、城下家族旧臣共を始、領内諸卿ニ至り無残所兵備厳重いたし、武威耀海外異賊自ら致畏服候様と之考ニ而、追々防禦之術計いたし、兵粮・玉薬・武器等都而相整、古来家法之手当を以応急変候様、当時専指揮仕事ニ候、且海岸は勿論城下諸所修築造営、只管厳密取計、且御当地第宅之儀茂文化三年寅春類焼、其秋琉人参府付、忽卒仮建之侭ニ而無程相損、近年一入傾頽いたし候得共、尋常之事ニ候得は成丈修補等ニ而可召置之処、既ニ来々年琉人参府付無拠普請等取起、近年琉球扶助之儀茂不一方、且防禦手当付而は大炮器械追々相調、右通桁々太粧之及入価大金を費し、中々産物料等行届候儀ニ無之、過半大坂借入等を以相弁、右通取計候儀は全非余儀、仮令琉球等異変有之候共、武器・兵粮等全相備、何程費財有之候而も府庫充実之形を以為致安堵壮麗を示し候様仕度、無左候而は海隅人心之違変難計、又は西洋人共伺隙候端ニ茂可相成と存、当事専国力を此事ニ相用、就中琉球国江は相応之人柄相選、数百人之備茂召附遣置、其外家来共外寇防禦之術而已ニ日夜尽心力、辺境之士民共迄砕筋骨致奔走、神職・僧侶之輩ニ至り異賊調伏、天下安穏之祈願、精神をこらし、其外旧来軍役之佳例ニ任せ、石清水・長谷等ニおゐても大法秘法修行いたし、殊国許名山大社等格別之祈願を以修造致興行候、大法修行付而は神職・寺僧・修験之者共各位階昇進等之儀取計為抽丹誠、国中一統只管異賊防禦術計之外、更無他事、就而は私家之儀六百年来襲封いたし来、大小之旧臣偏ニ休戚を共ニいたし候存慮、殊ニ琉球之儀は日本之門戸と相心得、皆共分限を尽し深心痛仕居候処、此節仏人無事故引取候儀、全奉敬承
御内命、私指揮茂行届、且国中誠心相貫キ候故と、上下一同相歓候次第御座候間、此度奉内願候趣、偏ニ家之栄耀而已を存候儀ニ無之、琉球国は勿論、国中江
御盛恩を推及シ、夫々褒賞之取扱仕、尚

御殊遇を感戴為仕、永世西陲鎮衛之長策致全備候様取計度、仍此段追啓仕候事、

十一月　　御名

冊子原寸　縦二八・六糎　横二一糎　五一枚

（別紙）「覚

一御心願一巻書抜一冊

一琉球江致来着候異国船関係書二冊

右合テ三冊、近日於骨董店見当申候付、御太切成御帳留と奉存奉献候也、

明治十八年十一月廿三日　　三原経世」

別紙原寸　縦一八・五糎　横二七・七糎

三五　斉興公ヨリ久光公ヘノ密書

斉興公隠退ニ付　　（御手許五番十一号）

（包紙ウワ書）「用向〆　　周防とのへ」

（封紙ウワ書）「用書　　申入周防とのへ　〆　　」

大急キ書ちらし申候、

極密内用申入候、此度代合も相済、表向登　城ニ而被仰出も相済候ニ付為心得申入候、

二白、玉里作事出来之上ハ、引移可申心得ニ付、夫迄之内下り不申候間、能々気付可被申候、

一是迄通り諸事少シも相替無之様、

一自分とちかいうたくゝりにてさかしいくせ有之候事、

一勇気少シ世事計ニ而不宜、

一万事もれやすし、

一豊後より昔より之家法定法能々申上候様、

一無用之物すき多有之、

一にきやか好之方、

一少膽ニ有之、

一付之者人きらい有之、
一右之外ニも其元心付之程も可有之候間、日夜由断なく心掛、手堅く相勤可被申候、城下其外士共之気ニ合不申やと案申候、無役若者其外共さわき立不申、是迄通（又申入候、世上人気引受候所、いかゝニ相成候や、難有かり候や、きらい候や、豊後と被申談篤内御知せ頼入候、）手堅万事相勤心掛、無ゑき之事とも不致候様、能々気ヲ付可被申候、心付之仮不取敢申入候、猶此後心付候事も候ハヽ、知せ可申候間、密〳〵豊後と談可被置候、
以上、

正月廿九日認

くれ〳〵も返事ニハ不及候、以上、
大急ぎ書改けし申候、
此書付豊後へ御見せ候而も不苦候、以上、

文書原寸　縦　一七・八糎　横一〇七・三糎　包紙原寸　縦二八・一糎　横四〇・三糎

三六　斉彬公襲封ニ付家老以下へノ諭書

（御手許五番十一号）

写

太守様御六拾余歳被為成、
少将様御儀御年齢被為成候付、御政務
御譲可被遊
御隠居旨被
仰出、其段島津将曹御使ニ而被
仰進候処、今暫は是迄之通被遊
御指揮被下候様被遊
御願度
思召候得共、最早
御決心之御事ニ候得は、
御止茂難被
仰上御事候付、
御請被
仰上、左候而御政事向ニ付而は不容易御事ニ而未御取
馴茂不被遊候付、万端御相談御介助被成進候様、御厚
御願之趣被為

在候処、御尤ニは被
思召上候得共、被遊
御隠居候上御政事向ニは御立障難被遊御断
思召之段、被為及
御返答候付、再往無御拠御願被
仰上候処、無御余儀被遊
御許容候、左候而表向
御願書之儀は、当正月中被差出賦之段御到来候、

二月　　豊後
　　近江

（本文書ハ「鹿児島県史料　斉彬公史料」第一巻第一六八号文書ト大略同文ナリ）

文書原寸　縦一九糎　横一三二・九糎

三七　家老ヨリ一門方ヘノ通達

斉彬公仰出ニ付　　（御手許五番十一号）

（付箋）「御一門方」

今度就
御家督何れ茂是迄之通相勤、猶又入念候様被
仰出候条、難有可被奉承知候、

三月　　豊後
　　石見
　　近江

文書原寸　縦一八・六糎　横六七糎

三八　斉彬公ノ諭書ニ付家老ヨリ大身分其他ヘノ伝達

（御手許五番十一号）

今度
御家督付而は専
御先代之御規則ニ基、我意私欲等無之、正路を心掛、
御領国中之御仕置万端行届候様、且諸士末々ニ茂文武忠
孝を志、質素節倹を守、信義を専にし、農工商ニ茂夫々
職業を励、日夜家業出精専一候旨、御別紙之通
御筆を以被

仰出、誠以難有
御趣意之御事候条、此旨謹而被奉承知、
仰出之趣、聊無忘却誠実ニ被相守、家来末々迄茂急度可
被申付候、
右之通諸向江申渡候間被成御承知、御一統被仰合、家
中末々迄茂急度御申付可有之候、
（異筆）「嘉永四年亥」五月「十六日」　豊後
将曹
石見
近江

文書原寸　縦一九糎　横一五〇糎

三九　久光公ヨリ斉興公ヘノ願書
斉興公ヨリ久光公ヘノ返書

久光公ノ第二子右近養子ノ件　二通

（御手許五番十一号）

（包紙ウワ書）「〆」

三九ノ一

乍恐奉願上候、此節島津図書儀、病身ニ有之隠居願出候
賦之由ニ御座候、就而は直子無御座候ニ付、私二男勝山
右近未若年之儀ニは御座候得共、折角教育仕行先　御用
立候様可仕候ニ付、　思召を以図書養子被　仰付被下度
奉存候旨、
太守様江極内奉願候処、
御前思召次第何様共可被　仰付候間、　御直書ニ而御相
談被　仰上候御事なから、猶又私よりも申上候様承知仕
候ニ付、此段奉願上候、何卒右之趣被遊
御許容被下度奉希上候、敬白、
十月十八日　島津周防
上
御左右

文書原寸　縦一九糎　横四二・五糎

三九ノ二

返事旁申候、図書病身ニ而隠居之願之由、其方二子勝山

右近図書養子之儀尤ニ候、願出遣可申候、夫ニ付右図書先々代比より世評も色々ニ而不宜やニ承り候、常々朋友之向不宜人柄故と存候、此度遣候ハ、入込候人物是迄之様ニ無之者ヲ撰被申可然候、此儀ハ其元心中かきりニ而外へハ口外不可然事ニ候間、心付之侭申入候、以上、

十一月廿九日

周防殿
申入

文書原寸　縦一八・八糎　包紙原寸　縦二八・二糎
横五八・五糎　横四〇・二糎

五三　斉興斉彬二公へ下賜ノ御製　（一号唐櫃入）

（包紙ウワ書）「安政の初　斉興公・斉彬公に賜ふ　」

御　製

五三ノ一

詠寄国祝　和歌

武士もこゝろあはして
秋つすの
国はうこかすともに
おさめむ

文書原寸　縦一七・四糎　横七六・二糎

五三ノ二

斉興朝臣・斉彬朝臣か国政にあつき心さしを　叡感浅からす、つねく仰ともありしに、こたひ武士も心あはしての　御製を御懐紙に　宸筆染られて伝へよと、あつき仰ありしをかしこみて、武士の心も君かめくみもて、けにいやましに国やおさめむと、つたなき筆こと葉も後のしるしにもならむとかき添て伝へ侍るもの也、

安政二とせの春　右大臣忠凞

さつま
宰相との
中将との

文書原寸　縦一七・九糎　包紙原寸　縦二七・七糎
横二三・九糎　横　四〇糎

五七　斉興公ノ文武奨励士風振興諭達

（御手許五番十一号）

造士館・演武館は
大信公御代厚尊慮を以て御造立之処、其後何となく致衰微候付、此節改而掛り申付候条、是迄之悪弊を改め、造士之文字に相叶候様可取計候、
一演武館之儀茂同様ニ相心得、修練之精粗且平常之心懸等、微細に検察無油断可令沙汰候、
一学問之標的は修身斉家、治国平天下之道理を研究、本末先後を知別いたし、然而当時之政務奉行候而茂能其任に堪候様ニ心懸専要之事ニ候、文章詩作も儒者学問中一端之科業ニ而稽古尤ニ候得共、専造士之法相立、正学之風奮起候様に学術厚吟味可然事ニ存候、
一第一三綱五常之本領を守り、義理を明にし、名分を正し、各祖宗を敬崇ひ、生国のために道を開き候儀、天理自然之本意ニ候処、当時儒者と唱候中には、我皇朝をも夷狄同様に心得違ひ、古典は勿論、律令・格式または六国史已下ニいたり候而も不弁別之者も有之候半欤、然は孔子之道にも不協、第一天照皇太神之御明慮も可畏儀ニ而、右等之処一同深く心得分、学風令振起、追々国用ニ相立候様宜有工夫儀専要ニ候、
一古昔聖賢の言行を以て一身を正し、扨今日の世上に引競、時勢相応の政務を執行候基本を修行ふてこそ誠の学問と存候、いかほと博学多才ニ候とも、今日之行ひ士道ニ背き候而は修行之詮無之候之間、館中之役者能々心を潜め深致勘考、和漢之経史に渉り名義を明弁いたし、興廃治乱之本原を研究し、造士の道相立、国家之良臣追々出来候様致教導候事緊要と存候条、教授已下諸役へも厚く可申含候、且又読書候而も意味取違候へは雲泥の相違たるへきなれは、経書ハ勿論、小学・近

思録・大学・中庸之或問、又は論孟精義語類文集・二程全書・淵源録等ニいたる迄熟読之上、今日の実行に相応之処、修行第一と存候、

一儒官相勤候ものハ格別、其外之面々ハ詩文章等不得手ニ候とも、今日政事の一助ニ相成候様ニ心懸、為致修行候儀肝要と存候、当時之学者と唱候ものハ、今日の世事ニ疎く、経済の道をも捨置、沙門同様制外之様ニ相成、其行ひ正しからす、外々よりも又制外の様ニ心得候も間々有之候、全く学問之趣意取違候故と被存候、古今之賢相・智将いつれも明に

皇国の大道を弁へ、漢土経伝之旨趣にまて貫通いたし、国家に力を尽候事蹟は典籍に歴然たり、然ハ名分に暗く道理に明かならす候てハ何事も難整事ニ候、惣して時務を考候こと第一ニ而、井田之法は西土三代之良法なれとも宋朝ニ而ハ難行、朱子も時と位を考、社倉の良法等も発明有之候如く、時勢当然之位を量り候儀、学問無之候而は道理相応の処置ハ難叶事と存候、仮令和漢の経伝を諳読、詩文章等通達候共、道義ニ暗く時務ニ達せす候而は実ニ無用之腐儒たるの間、右様之処上下一同厚く心得候様可申達候、

一古今家国之政務に致関係候ものハ須臾も捨置かたき学問ニ候処、士分已上不致学問者多く候ゆへ、義理に昏く正心修身之実行無之、利欲不当之行ひも有之故、家政向も乱れ士風も正しからす、役職相勤候もの共にも夫々仕向之条理に暗く、緩急軽重之時務ニ疎く、名分義理之筋合をも不弁様子も相見得候、是等之義ハ各格式ニも可恥事ニ候間、一同公務のひまを考修行有之様可申達候、

一正学を講明いたし物理を明らめ候儀は、惣て人倫に基き日用実行之為にて、仮令数万巻を記誦し詩文章達者に候共、実行なくてハ其詮も無之、

日新公いろは御詠歌の御意味にも相違、奉恐入次第ニ候、其書を読たる迄ニ而実行薄く、郷里に居て子弟之師と可仰徳行も無之、役義申付候而も利禄に心を配り、

当座之利得を考、万代不朽之良法に暗く、更に仁義を本として時務を施し候もの在少く、甚以嘆敷事ニ存候、畢竟全く無学のうへ、たま〳〵読書之者有之候而も道義之学問致さす、徒ニ読過候故と存候間、已来学術致一新義利之取舎を決し、俗学之旧弊を致改正度事と存候、

一天下に学校之設有之候は全く人道を修治する為ニ而、不可闕は勿論之事ニ候、然は五常之本原に由り五倫之定分を践ミ、文徳を修め武備を治る事にて経義を明らめ心術を研き、兵法武術の芸事を勉強して治乱の政事に通達する事等、惣て是人道中之要務と存候、孫子ニも彼を知り己を知る者百戦して不殆と相見得候、左候得は和漢の書籍而已ならす、当時外夷防禦専一之時節ニ候得は、夷狄之情態をも能致識別、彼の長を取て我の短を補ひ、上下一同心を合せ本朝の威武を拡充し、四夷制御之事当時武夫之急務と存候間、余力にハ西洋和解之諸書も熟覧し、外夷の風俗・器械をも致弁別、我羽翼となして、益

皇化万国に行亘り候様心掛肝要ニ存候、

一中にも大身之面々、成童入学之期に至り適造士館等出席候共、学局之賞翫ハ自然の理ニ而、切磋之功十分ニは調兼候道理、且ハ国中而已之学友にてハ井中の蛙にひとしく候、往々重職をも授、公私之大事可委任もの共ニ候処、切磋之功乏敷候ては臨機応変之処置等ハ申に及ハす、公界向之礼式より始め、国々の形勢人情世態ニうとく井蛙の見識にてハ心得違之儀も可有之欤、既

公辺拝礼等之節、不都合之振舞も有之、他国の者ニ対し頑愚之応答なと、当国ニ限らす他藩重役之内間々及見聞候も有之候、然は文武之修行を専要として物毎疎からぬ様心掛度存候、隣境肥後・肥前等ハ一門支族之家嫡等家来両三人召連、平士巡歴之姿ニ而随意ニ文武修行之由ニ候、是等ハ軽〳〵敷様にも候へ共、国家を大事ニ考候得は至極之良法ニ候、大身之面々ハ父母之

姑息を離れ、家中諸士之阿諛をまぬかれ、卑賤の辛苦
を識得し、各国之事情に達し候良法と存候間、以来志
有之人々ハ、家嫡にても無役之内他国修行両三年願出
候様申付度事ニ存候、殊ニ昨年
宰相様よりも寄合以上之面々ハ、別而学問第一と被
仰出候事故、家柄之面々一涯志を厲し、各父祖の令名
を穢さゝる様普く文武を練習し、又ハ諸士の亀鑑にも
相成、
宰相様尊慮をも安し奉候様心懸専要之事ニ存候、
右之条々以書面改而急度申付候間、後年ニ至る迄心得
違ひ無之様、館中役人は勿論、諸士一同江可申渡候、
家語曰、政之不中君之患也、令之不行臣之罪也と相見
得候条、能々可申付候、

（文書題ニ「斉興公」トアルモ「斉彬公」ノ誤リカ、本文書ハ「鹿児島県史料　斉彬公史料」第二巻第五四七ノ一号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦二一・二糎　横六九四・三糎

五九　斉彬公文武奨励ノ諭書及家老ノ副書　三通

（御手許五番十一号）

（包紙ウワ書）
「御筆　仰出写」

五九ノ一

造士館・演武館之儀

大信院様厚以
思召被召建置候得共、何分心掛薄処より御用立候人物相
少候付厚可心掛、右付学問之大体且武道心得之儀共、御
別紙之通、細々
御筆御書取を以被
仰出、誠以恐入難有
御趣意候条一統謹而奉承知、被
仰出之通学問・武道相励、往々訖と御用立候様心掛、可
奉安
尊慮候、

右之通可被奉承知候、

十月　　下総

伯耆

登

駿河

伊織

文書原寸　縦一九糎　横一二五・六糎

五九ノ二

（本文書ハ第五九ノ一号文書ト同文ニ付省略ス）

文書原寸　縦　一九・二糎　包紙原寸　縦　三二糎

横一二五・六糎　横四六・四糎

（三通トアルモ一通不明）

六七　万里小路博房卿ヨリ小松帯刀ヘ

哲丸君ニ付黒田清綱建言　（雑三十八番巻物）

六七ノ一

過日は参上、御面働恐縮之至ニ候、其砌拝借仕候別紙壱封令返納候、御落掌可給候、以上、

五月九日　　博房

文書原寸　縦一六糎　横二三・六糎

六七ノ二

謹而言上

此節於大奥

御男子様御出生、幾久敷恭悦之御儀、士民挙而雀躍仕次第御座候、然ルニ御産所近キ二之丸御庭ニ於而砲術調練、尚不被為止被仰付候御儀、是は畢竟

皇国之御為、当時之大急務ニ御座候間、暫くも不被為捨置被仰付候御儀と奉恐察、乍憚御当然之御事と深奉感服候、殊ニ

御出生様ニは、自ら主将之任被為備候御身柄、聊是等之事ニ御驚愕之御容子等可被為在とは更ニ不奉存候得共、凡臣下之身よりは遠慮不仕候而不叶訳合、子細は御主人

世子之御降誕涯ニ御身辺近くニ而銃砲打鳴し候儀、第一君上を崇敬し奉る之礼則に背キ、次ニは世俗一統之人気も不安、何れニも臣子之至情難忍事ニ御座候、因茲近比恐多奉存候得共、御国中士民之情意を被為汲、二之丸ニ於而之砲術稽古は暫御宥恕被相加、此涯磯御仮屋ニ而被仰付候様仕度、此儀御許容被仰付被下候ハ、、皆人難有一入勉励可仕、左候得は上は御国家之為武備之御世話も不被為緩、下は臣子敬畏之道も相立、乍両闕如不仕儀ニ御座候間、幾重ニも士臣敬畏之意相伸候様御処置被為成下候処、臣清綱乍不肖衆ニ代り遮而奉願上候、小臣微賤之身ニ而分位を犯し上書仕候儀、誠ニ僭踰之罪奉恐入候得共、右様士臣一統之情実徹　上不仕候而は、乍恐人気之動静ニも相拘、不容易事体と奉存、衷情難黙止、敢而微臣之賤愚を不顧奉言上候、誠惶謹言、

巳九月十九日　　黒田嘉右衛門

清綱稽首

（貼紙異筆）
「（朱）□
小松帯刀書」

文書原寸　縦一五・五糎　横一一七・三糎

八七　菊池源吾ヨリ大久保税所へ（雑三十八番巻物）

（包紙ウワ書）
「税所喜三左衛門様　　菊池源吾
安静　　大島より」

再三之御懇書難有拝見仕候、弥以御勇猛御勤仕之由、珍重奉存候、随而豚生無異消光仕居候間、乍憚御放慮可被下候、陳ハ斬奸之始末細々御申越被下、為　皇国御互大慶之御事ニ御座候、右次第ニ付而子弟を先立、碌々として潜居いたし居候儀、於情難堪血涙を咽候儀ニ御座候、御愍察可被下候、堀儀幸ニ信を得候儀、天幸之事御座候、願くハ嫌疑不相掛所祈入候、何卒此挙ニ乗し尾・越・伊達を登　城相成候様尽力之道ハ有之間敷哉、左候ハ、此三侯隠然として難罷在、是必不尽候而不叶時宜ニ茂相成、今通ニ而ハ力不及とて引込居候而ハ残心之至、此道相立候ハ、一機引動可申儀と奉存候、久世を説込候儀ハ随分

出来可申候、阿部の不明を能々申含候ハ、必相成可申、阿部侯御在位中同一体之上、無御拠御親類之由承居候間、必出来可申儀と奉存候、久世侯位ニ而ハ、有志之諸侯方江勢不相付候而ハ、迚茂正論被相行不申、必破可申儀ニ御座候間、早々此道を計ひ申度儀と奉存候、只々明日〳〵と変を相待居候而ハ不相済、変ニ入候ハ、夫ニ応し、又今通当年中も押通候ハ、、其計不致ハ益難儀相重可申儀と奉愚按候、井伊之弱国恐れ申儀更ニ無御座候、必拙速ニ出候儀無覚束、面皮腫候時分漸々起立可申欤、木侯ハ是迄有志之方とハ承居候得共、如何之向ニ御座候哉、岡本と両人ハ弥本道之人ニは可有御座と奉存候、何も細事御返事出来不申、乍漸筆を取候儀ニ御座候、乍末筆追々頂戴物恐入次第、厚御礼申上候、恐々謹言、

五月廿五日　　菊池源吾

税所喜三左衛門様

大久保正助様

文書原寸　縦二四・二糎　横七七糎

九二　襲封ニ付茂久公ヨリ家老ヘノ諭書

家老ヨリ一門及役々ヘノ伝達　二通

（御手許五番十一号）

（包紙ウワ書）「御筆仰出写」

九二ノ一

御跡目御相続被遊候付而は、

御先代様より被定置候御規格之通、聊茂無寛疎相守、御政事向一涯入念可取計、且又士は文武之道を学、古来之御国風不取失、万事致出精候様、御別紙之通

御筆を以被

仰出、誠以難有

御趣意之御事候条、此旨謹而被奉承知

仰出之趣、聊無忘却誠実ニ被相守、家来末々迄茂急度可被申付候、

十月　　伯耆

登

駿河

右之通諸向江申渡候間被成御承知、御一統被仰合、家中末々迄茂急度御申付可有之候、

文書原寸　縦一九・五糎　横一三五糎

九二ノ二

家老中江

我等儀身雖不肖、
順聖院様依
御遺言、御跡目相続蒙
仰難有儀ニ候、就而は
御先代様不奉汚
御積徳様ニと日夜令心痛事ニ候、尤我等事何篇不取馴之事候間、心付候儀は不差置可申聞候、且又各始諸役人末々ニいたり、
御先代より被定置候規格之通、聊茂無寛疎相守、政事向一涯入念可取計候、殊更士は一々礼義廉恥を存、深く文武之道を学ひ、耳目之欲陥四支之安佚を不顧、古来之国風不取失、万事致出精候様肝要ニ候、以上、

十月廿八日

文書原寸　縦二一・四糎　包紙原寸　縦三二・九糎
横　一四三糎　横四五・五糎

九五　久光公関係ノ御書付類目録　（御系図唐櫃入）

九五ノ一

（表紙）「久光公江モ御関係之御書付類
模写ヲ以可被進分目録　」

久光公江モ御関係之御書付類模写ヲ以可被進分目録

白木御文書拾番箱九十番
安政六年三月

一島津周防殿格別之御続付表向御礼席出仕之儀御宥捨被仰付、并島津図書無御拠御続合付、以来年頭・八朔・五節句・月次等、御座之間御礼被仰付候御書付　壱通

同百二番
安政六年十二月
一島津周防様御一世諸御会釈被相替候御書付　壱通

同百十六番
万延二年酉三月
一御同人様御儀ニ付　公義より
太守様御承知之御書付　壱通

同百十九番
文久元年酉四月
一周防様格別之御倫次ニ付、深　思召之訳被為　在、以
来御実形之御身柄ニ被為復候御書付　壱通

同百廿八番
文久二年戌四月
一諸藩士浪人等江面会之儀、其他ヶ条ヲ以三郎様被　仰
出候御書付　壱通

同拾壱番箱四番
文久二年戌九月
一三郎様江御後見御願立之御書付并公義御附紙　二通

同六番
文久二年
一右御同断ニ付　公義より之御書付　壱通

同七番
文久二年戌三月
一和泉様　仰出　弐通

同
文久二年戌三月
一御同人様二丸御住居御介助ニ付
太守様ヨリ御家老中江之　仰出書　壱通

同
文久二年戌四月
一和泉様浪人御取押へ
叡感被為　在候儀ニ付御書付　弐通

同九番
文久三年亥三月
一太守様御筆　仰出并
三郎様於京都被　仰出候御書付　弐通

同十一番
文久三年亥八月
一英艦御掃攘ニ付達
天聴、不容易被為蒙

褒勅候儀ニ付
太守様　三郎様御連名　仰出　壱通

同十四番
元治元年子二月
一夷賊征服之儀ニ付　少将様於京都　仰出　壱通

同十二番箱六番
元治元年甲子七月
一勅書　壱通

同年八月
一幕府より之御書付　壱通

同年同月
一一橋中納言慶喜卿御感状　壱通

同十一番箱三十九番
慶応四年辰二月
一中将様御筆　仰出　壱通

同四十番
慶応四年戊辰三月
一御宸翰　三通

同
慶応四年戊辰二月
一勅書写　壱通

同
慶応四年
一太守様御筆　仰出　壱通

同四十一番
慶応四年五月
一中将様御筆　仰出　壱通

旧御番所四番箱ノ拾七番
明治二年六月
一御両公江為　御賞官位昇進、禄拾万石下賜候行政官御書付　壱通

右同
同年同月
一少将様江高拾万石永世下賜之御書付　壱通

右同
同年同月
一少将様参議従三位宣下之御書付　壱通

右同
同年八月

一御返献之賞秩一年限リ半方救荒ニ被為充候旨太政官御書付　壱通

右同
同年同月
一右通御沙汰相成候得共、西郷以下之儀は不被及御沙汰旨太政官御書付　壱通

右同
同年同月
一右ニ付従二位上京之上云々之御書付　壱通

白木御文書十二番箱一番
明治二年十一月
一御賞秩御返献之儀ニ付朝廷ヨリ之御書付　壱通

同九番
明治四年辛未九月十日
一御分家御賞典高御分賜御書付　壱通

冊子原寸　縦二六・五糎　横一九糎　九枚

九五ノ二

（表紙）
「久光公江も御関係之御書付類模写」

白木御文書拾番箱九十番

○　島津周防殿

右は相応之年輩ニ茂被罷成、殊ニ太守様格別之御続ニ付、以来年頭・八朔、其外御礼等之節々、表向御礼席出仕之儀御宥捨被仰付、時宜次第於奥御対顔被為在候様、左候而奥江被罷通候節は桜之間江被相扣候様被仰付候、

右之通被仰付候間、帳面可記置候、
安政六年三月
駿河

白木御文書拾番箱百二番

○　御記録奉行江
島津周防様

右は
御前向江茂脇差被帯候様被仰付候、
一此様文字
御前御用たり共相用候様被仰付候、
但 他所向之儀は是迄之通、
一年頭其外屹と立候節供廻六七人、平日茂三四人相増被召列候様被仰付候、
一虎皮鞍蓋金紋先箱、御当地迄被相用候様被仰付候、
一登
城之節
御楼門は是迄之通ニ而、北御門通融之節は中之口御玄喚前迄、大奥江は通番所前迄、御台所御門は士番所御門涯迄乗輿候様被仰付候、左候而諸御屋敷并神社寺院は右ニ準被乗通候様被仰付候、
一登
城之節は桜之間脇二階江被相扣、御家老座江御用之節は時々勝手ニ被成御通候様被仰付候、
一御高五千石御一世被召附置候、
右は格別之 御倫次付、別段深思召之訳被為 在、御一世右之通御会釈被相替、虎皮鞍蓋金紋先箱之儀は家格ニ被相用候様、御家老以御使御達可申旨被
仰出候、此旨帳面可記置候、
安政六年十二月 筑後

白木御文書拾番箱百十六番

○ 松平修理太夫

島津周防儀、其方家督之節より国政向万端心添致し精勤之趣相聞候付、来年其方参府之上は国許政事向猶厚く相心得、万事行届候様可取計旨可被申聞置候、此段内々可相達との 御沙汰ニ候事、
万延二年酉三月

白木御文書拾番箱百十九番

○　　御記録奉行江

周防様御事重富家江被為入候得共、格別之　御倫次付当分通ニ而は御成合不宜、別段深思召之訳被為　在候付、以来御実形之御身柄ニ被為復、何篇左近様御同様被　仰付候、左候而重富家之儀は島津又次郎殿江相続被仰付候旨、御家老以御使被　仰出候、此旨帳面可記置候、

文久元年酉四月　　摂津

白木御文書拾番箱百二十八番

○一諸藩士浪人等江私ニ面会不可致事、

一命を受すして猥りに諸方江奔走不可致事、

一万一異変致到来候共、敢て不致動揺、下知無之内其場江不可駈付事、

一酒色可相慎事、

右之趣先度より追々申渡候得共、以来猶又可相守候、若此上違背之族於有之は無宥捨可処罪科者也、

文久二年戌四月

白木御文書拾壱番箱四番

○実父島津三郎事、私家督以後国政向万端心添致し、精勤之趣入御聴、参府之上は国許政事向猶厚心得、万事行届候様可取計旨御内沙汰被為在候段、去年三月御内達之趣承知仕、難有仕合奉存候、然処方今之時勢品々心配之筋茂有之候付、私後見被仰付被下度、左候は国政向万端、猶又申談厚致指揮候様仕度相願候、此段御内意申上候、以上、

文久二年戌九月廿八日　　松平修理大夫

別紙書面願之趣は、其方ニ而取計候儀は可為勝手次第事、

白木御文書拾壱番箱六番

○　　松平修理大夫

島津三郎儀、願之通其方後見被　仰付候条、国政向を始諸事厚申談可被取計候、

文久二年　　在口裏
松平修理大夫江

白木御文書拾壱番箱七番

○拙者より書取を以申渡候事遠慮ニ相考候得共、当時世上之情態何欤不隠之趣ニ相聞得候ニ付不得已事、先日為相達事ニ候、其後猶又致熟考候処、畢竟上威之軽キ処より群下類を引ニ至り候儀ニ而、　当主は勿論、於拙者も心痛至極之事ニ候、士風沙汰之儀は此前より追々被　仰出置、近比ニも再往申渡為相成事候得共、方今之模様ニ而は非常之変事到来之節致一和候処無覚束存候、

皇国ニ生れ候者、誰とても

王朝を尊ひ夷狄を悪み候情意は有之筈ニ候、若其志操無之者ハ禽獣同然之事ニ而、別ニ勤　王家之誠忠派之と可申様、更ニ無之事ニ候、然るに右通之名目相唱候由、別而不可然事ニ候、殊ニ年若之面々容貌異様にして放恣之者共有之哉ニ候、是以先年より追々為被　仰渡事候処、近比は其節とは相変り候風儀と相成、愈以不宜次第ニ候、士は行跡律儀ニ廉潔を専としてこそ本意之事と存候、何程武文研究いたし候共、言行不正異様異風ニ而は武士とは被申間敷候、且郷士以下家来末々ニ至り候而も右様之者共有之哉ニ而、猶以不可然事候条、右之趣奉行頭人能々相心得、支配下江丁寧ニ申諭、父兄又は同郷年長之者共よりも心得違無之様、屹と教誡有之度存候事、

文久二年
戌三月　　久光

同上

○去ル午年外夷通商御免許以来、天下之人心致紛乱、各国有志と相唱候者共、尊

王攘夷を名とし、慷慨激烈之説を以四方ニ交を結ひ、不容易企をいたし候哉ニ相聞得候、当国ニも右之者共と私ニ相交り書翰往復等致候者有之哉ニ候、畢竟勤王之志ニ感激いたし候処より右次第ニ及候筈ニは候得共、浪人軽卒之所業ニ致同意候而は、当国之禍害は勿論

皇国一統之騒乱を醸出し、終ニは群雄割拠之形勢ニ至り、却而外夷之術中に陥り、不忠不孝無此上義ニ而、別而不軽事と存候、拙者ニも公武之御為、聊所存之趣有之候ニ付、以来当国之面々右様之者共と一切不相交、命令に従ひ周旋有之度事ニ候、若又私之義を重んし絶交いたし難き者は有筋に申出候ハ、、其訳に応し何様共可致所置候、尤此節之道中筋、且江戸滞留中右躰之者共致推参候共、私ニ面会致間敷、乍然無拠訳ニ依り致応接候共、敢て不致議論、其筋之者江談判いたし候様返答可致候、乍此上不勘弁之族於有之は、天下国家之為実以不可然事候条、無遠慮罪科可申付候事、

文久二年
戌三月

久光

同上

○　家老中江

和泉様御儀、何篇是迄国政向御内談申上、且先度公義より御内沙汰之趣茂有之、我等実ニ多幸之至りニ候、就而は此度二丸江御住被遊候付、猶又表向御介助奉願置候間、以来仰出等弥厳重相守候様可取計事、

文久二年
戌三月

同上

○和泉様御事、御別紙之通被為蒙勅令御滞　京之段不容易御儀、於我等も冥加之至難有奉存候、依之一統拝見申付候条、謹而可奉承知候事、

文久二年
戌四月

写

浪士共蜂起不穏企有之候処、島津和泉取押置候旨、先以
叡感思召候、別而於御膝元不容易儀於発起は、実ニ被悩
宸衷候事ニ候間、和泉当地滞在鎮静有之候様思召候事、

文久二年戌四月

白木御文書拾壱番箱九番

○今般英夷軍艦横浜江渡来重大之事件申立候一条ニ付、
於京都御別紙之通
三郎様御筆を以被　仰出候趣、御尤之御義ニ存候、
皇国之御大難当家より事起り候訳は幾重ニも恐入候得
共、畢竟生麦一条ニ就而は曲直分明、武門ニおひて不
可遁之先習ニ候間、万一前浜江渡来候ハ、正議之論を
以致応接、彼をして令屈伏候は必定と存候得共、自然
我ニ兵端を相開候訳も候ハ、強暴之極と可申候得は、
三郎様之御趣意奉汲受、天下国家之為粉骨砕身夷賊誅
伐有之候様頼存候、就而は手当向相掛候義共、猶更於
役場手厚尽評義候様可有之、且亦一同相心得候訳と存
候得共、攻守之命令相加候迄ハ如何之軍艦渡来候共、
少も動揺いたさす候義専要存候事、

文久三年亥三月

同上

○今般英夷軍艦横浜江渡来不容易重大之事件申立、於
幕府御許容難相成趣之由、畢竟去秋生麦一条と相聞得
候、就而は
皇国之御大難当家より事起り候訳ニ而、別而恐入次第
ニ候、尤彼儀は曲直分明之事候処、蛮夷之情態可悪之
至ニ候条、遂強暴申募り兵端相開候節は、
天下国家之為抽他藩一統粉骨砕身夷賊誅伐有之候様頼

存候事、
文久三年
亥三月

白木御文書拾壱番箱十一番

○今般英艦掃攘之趣達

天聴、不容易蒙
褒勅、不肖之身只奉恐入次第ニ候、全体掃攘ニ付而は
指揮不行届之事候得共、一統粉骨砕身決戦有之候故を
以不至敗走処、右様
御賞美之
勅命致承知候義、一統尽力之訳と不堪感賞候、若此末
襲来之節は折角心を用ひ可致指揮候条、此旨深相心得、
一心同力
皇国之御武威不致失墜様忠戦有之度頼存候、
文久三年亥
八月　茂久
久光

白木御文書十一番箱十四番

○夷賊征服之儀、従来之
叡慮ニ被為　在候得は、今般
官武御一途之根軸被為立、
宸翰ヲ以被
仰渡候趣茂被為　在候上は、
幕府は勿論、列藩一同尽死力不奉安
宸襟候而は、臣子之分難相済儀と存候、就而征夷之策
略ニ於て方今之急務たるハ、摂海之要港守備厳重相調
候儀ニ可有之存候間、聊愚意之趣幕府江建言いたし置
候、尤時世之急務致上言候様と之趣は、先達而申渡置
候得共、猶又右摂海守禦之術ニ於てハ成敗之所分人命
所係ニ而、実以至大至重之事候間、方略之次第存寄有
之者ハ不差置可申出候、当時於諸藩開鎖之説紛擾いた
し候哉ニ相聞得、甚キニ至り候而は我藩ヲ開港説と唱
候由候得共、決而可咎ニあらす、又一時愉快之説を聞
可動ニ非ス、我等趣意ニ於てハ一昨年来致持論候通、

我ニ十分武備を設、万古不易之征夷を行ひ度との着眼ニ而、
神州之御安危ニ致関係候御大事之時ニ当り、数年之叡慮ニ奉基大策見居候上は、天下後世迄も致貫徹度微志ニ候条、幾重ニ茂趣意取違無之様為心得申聞置候事、
元治元年子二月

白木御文書十二番箱六番

○去十九日
禁闕之下不容易擾乱之処、各藩兵士等忽出張粉骨砕身抛一命遂防戦速及鎮静之条、忠勤叡賞不斜候、殊其後数日終夜御守衛相勤、残熱之砌別而苦労
思食候旨
御沙汰候事、
元治元年甲子七月
右之通従
御所被
仰出候事、

同上

○　松平修理大夫
先般松平大膳大夫家来共入京、迫禁闕砲発及乱妨候節、速ニ家来共出張及接戦候段、達御聴候処、常々申付方宜一同励忠勤候段、抜群之働一段之事ニ被思召候、此段可申聞旨
上意候、
元治元年甲子八月
在口裏
松平修理太夫江

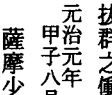
同上

○今度長人乱入ニ付、其手人数中立売御門公卿門ニ於而防戦賊兵追退并堺町御門之救応、其余天龍寺江出張等

抜群之働候、仍而感状如件、

元治元年
甲子八月

慶喜



薩摩少将殿

包紙
感　状

白木御文書十一番箱三十九番

○一治乱一途之政体ニ変革之事、
　右ニ付急務之箇条
一刑法変革之事、
一諸役人・書役・小役人等減少之事、
一不急之役場引取之事、又は合并、
　右は方今乱世ニ陥り候上は、大平之気臭を一洗し、海陸之軍事愈興張有之度、此節機会と存候ニ付、各申談涯々成功相立候様可遂評議事、

慶応四年辰
二月

白木御文書十一番箱四十番

○朕夙天位を紹き、今日天下一新之運ニ膺、文武一途親裁を以万機を断決す、国威之立不立蒼生之安不安ハ、朕か天職を尽不尽ニ有れハ、日夜不安寝食甚心志を労す、朕不肖ト雖列聖之余業
先帝之遺意を継述し、内ハ列藩万姓を撫安し、外ハ国威を海外ニ耀さむ事を欲す、然るニ徳川慶喜不軌を謀り、天下遂及騒擾万民塗炭ニ陥とす、故朕不得已断然親征之議を決せり、尚已ニ布告せし通、外国交際も有之上ハ将来之所置尤重大ニ付、天下之為ニ於てハ形勢ニより万里之波濤を凌き、身を以艱苦ニ当り、国威を海外ニ及し、祖宗
先帝之霊ニ対へんと欲す、汝列藩朕か不逮を佐け、同心協力、各其分を尽し、為国家努力せよ、

慶応四年戊辰三月

同上

○　御宸翰之御写

朕幼弱を以て猝に大統を紹ぎ、爾来何を以て万国に対立し
列祖ニ事へ奉らんやと、朝夕恐懼に堪さる也、窃に考るに、中葉
朝政衰てより武家権を専らにし、表は
朝廷を推尊して実は敬して是を遠け、億兆の父母として絶て赤子の情を知ること能ざるやふ計りなし、遂ニ億兆の君たるも唯名のみニ成り、果其が為に今日
朝廷の尊重ハ古へに倍せしが如くニて、
朝威ハ倍衰へ、上下相離るゝこと霄壌の如し、かゝる形勢にて何を以て天下に君臨せんや、今般
朝政一新の時ニ奮り、天下億兆一人も其処を得ざる時は皆
朕が罪なれば、今日の事
朕自身骨を労し心志を苦め艱難の先に立、古
列祖の尽させ給ひし蹤を履み、治績を勤めてこそ始て天職を奉じて億兆の君たる所ニ背かざるべし、往昔
列祖万機を親らし、不臣のものあれば自ら将としてこれを征し玉ひ、
朝廷の政総て簡易にして如此尊重ならざるゆへ、君臣相親しみて上下相愛し、徳沢天下に洽く、国威海外に輝きしなり、然るに近来宇内大ニ開け、各国四方に相雄飛するの時に当り、独我邦のミ世界の形勢にうとく、旧習を固守し、一新の效をはからず、
朕徒らに九重中に安居し、一日の安きを偸ミ百年の憂を忘るゝときは、遂に各国の凌侮を受け、上ハ
列聖を辱しめ奉り、下ハ億兆を苦しめん事を恐る、故に
朕ここに百官諸侯と広く相誓ひ、
列祖の御偉業を継述し、一身の艱難辛苦を問ず、親ら四方を経営し、汝億兆を安撫し、遂にハ万里の波濤を拓開し、国威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置んことを欲す、汝億兆旧来の陋習に慣れ、尊重のミを
朝廷の事となし、

神州の危急をしらず、
朕一たび足を挙れば非常に驚き、種々の疑惑を生じ、
万口紛紜として
朕が志をなさゞらしむる時ハ、是
朕をして君たる道を失はしむるのみならず、従て
列祖の天下を失はしむる也、汝億兆能々
朕が志を体認し、相率て私見を去り、公義を採り、
朕が業を助て
神州を保全し、
列聖の神霊を慰し奉らしめは生前の幸甚ならん、

右

御宸翰之通広く天下億兆の蒼生を
思食させ給ふ深き
御仁恵の　御趣意ニ付、末々之者に至る迄敬承し奉
り、心得違無之
国家の為に精々其分を尽すべき事、
慶応四年戊辰　　総裁

三月　　輔弼

同上

○　誓文

一広く会議を興し万機公論に決すべし、
一上下心を一にして盛に経綸を行ふべし、
一官武一途庶民に至る迄各　其志を遂げ、人心を
　して倦まざらしめんことを要す、
一旧来の陋習を破り天地の公道に基くべし、
一智識を世界に求め、大に
　皇基を振起すべし、
我国未曽有の変革を為んとし、
朕躬を以て衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大に斯国
是を定め万民保全の道を立んとす、衆も亦此旨趣に
基き協心努力せよ、
年号月日　　御諱

勅意宏遠、誠に以て感銘に不堪、今日の急務永世の基礎、此他に出べからず、臣等謹で叡旨を奉戴し、死を誓ひ聒勉従事、冀くハ以て宸襟を安じ奉らん、

慶応四年戊辰三月

総裁名印
公卿
諸侯 各名印

同上

○ 勅令之写

積年王事ニ勤労、遂今日王政復古
皇運挽回ニ至候事、偏両藩父子之尽力ニ有之、
叡感不斜候、猶此上益以勉励
王室を可奉輔佐被思召候事、
慶応四年 辰二月廿八日

同上

○今般以
宸翰
御別紙之通不容易
御趣意被
仰出、忝も
主上
神霊ニ被為誓、不肖之我等迄も於
御前致誓約、無二念
聖旨遵奉之赤誠を表し
御受奉申上候、熟惟るに
皇国之隆替由而分るゝ
御新政之時ニ当り、未曽有之
御盛典を被為挙、殊ニ天下億兆一人も其処を得されハ、
罪を
聖体ニ
御反躬被為遊、艱難之先ニ立せ賜ひ、
天職を可被為奉、且又旧来之陋習ニ慣れ、尊重ノミを

朝廷之事となし云々之
御趣意を奉翫味候ニ、誠ニ貫千古候
玉音ニ而、実ニ
御盛業可被為遂
御骨髄と感銘至極奉存候、従来我等不肖之身を以　中
将公御鞅掌之御志業を奉戴シ、聊犬馬之労を尽シ、如
此大事之場ニ遭遇致し候儀、固より其任ニあらす、昼
夜忘寝食令苦慮候、此上如何之分を以臣子之大義を尽
し、前条之
御趣意ニ可奉対答候哉、奉比較も恐入候得共、我等
朝廷ニ所以奉尽之道、即チ各我等ニ尽す所以ト一轍之
理と存候間、一身一家之上ニ於而は申迄も無之、断然
蔽習を脱シ、当世之事務ニ通達シ、
朝廷非常之
御盛典ニ基き奉り上下戮力シテ奉安
宸襟候様、一層其職掌を奮励シ補助之任を尽度所存候
間、各心附候義は不差置極諫シ、今般大事御受之詮を
在シメ、家名を不失様貫徹致シ呉度頼存候、此旨末々
迄も可申聞置候事、
慶応四年

白木御文書十一番箱四十一番
○今般非常之時勢ニ付、旧格ニ不拘改革申渡候処、掛役
は勿論一統厚汲受、速ニ相運為国家深悦入候、猶此末
心を用ひ候様可申達候事、
慶応四年
五月

旧御番所四番箱ノ拾七番
○　　島津宰相中将
　　島津少将

積年勤
王之称首ト為リ、大兵ヲ挙ケ、断然力ヲ
朝廷ニ尽シ、戊辰之春伏見一戦大ニ賊膽ヲ破リ、天下
人心ノ方嚮ヲ決シ、続テ東北諸道ニ出兵シ、毎戦取捷、

竟ニ今日平定ノ偉功ヲ奏シ、奉安
宸襟候段、洵ニ国家ノ柱石ニ被
思食、
叡感不斜、仍テ為其賞官位昇進禄拾万石下賜候事、
明治二年六月　行政官

同上

○　島津少将

高拾万石
依勲功永世下賜候事、
（太政官印）
明治二年己巳六月
在包紙　島津少将

同上

○　島津少将

任参議
叙従三位
右
宣下候事、
明治二年六月　行政官

同上

○　鹿児島藩知事島津忠義

賞典ハ深重之
叡旨ヲ以テ被　仰出候事ニ付、願之趣不被及　御沙汰
段、先達テ御達相成候処、猶又再三懇願之旨趣全ク至
誠之所致神妙之至被
思食候、就テハ即今諸道不登庶民凍餒之勢ニテ救荒、
目下之御急務ニ候処、御用途必至御差迫之折柄、旁以
乍御不本意、当年限リ賞秩半方返納被　聞食、救荒ニ
可被為充行旨被　仰出候事、
但叙位返上ハ不被及　御沙汰候事、
明治二年八月

太政官

同上

○先般深重之
叡旨ヲ以下賜候賞典、再応辞表之趣神妙ニ被
思食、知事ニハ別紙之通
御沙汰相成候得共、西郷以下之儀ハ不被及
御沙汰候事、
明治二年八月

太政官

同上

○従二位上京之上
御沙汰可被為在旨、先達テ被
仰出候得共、今般別段御詮議之筋有之、別紙之通被
仰出候事、
明治二年八月

白木御文書十二番箱一番

○　従二位源朝臣久光
　　従三位源朝臣忠義

賞秩返献之儀、先頃以来再三及建言候ニ付、当年限リ
半高上納被
仰付、救荒ニ被為備候処、猶又今般自分并ニ西郷以下
賞秩一同返献及懇願候儀、全以至誠精忠憂国之衷情ヨ
リ申出候段、深ク
叡感被為在候得共、元ヨリ其功労ニ被為酬候厚キ
思食ヲ以テ下賜候儀、決而不可固辞旨、更ニ
御沙汰候事、
明治二年十一月

太政官

白木御文書十二番箱九番

○　従四位島津忠義

同姓従三位儀、積年功労不少候ニ付、格別之

思食ヲ以テ分家被
仰付、御賞典十万石之内五万石為家禄分賜候条、此旨
相達候事、
明治四年
辛未九月十日

太政官
□（「正院之印」）

冊子原寸　縦三二・二糎　横二三・三糎　一二〇枚

三六　久光茂久二公ヘ下賜ノ御製　（一号唐櫃入）

（包紙ウワ書②）
「御製二通　」
（包紙ウワ書①）
「文久の初めの賜ふ
御　製　」

文久はしめの年季冬、物部の忠魂磐石をもつらぬく利剣
送こせる事時世にあたり、実に憂患をはらふ志と頼母し
く思ひつゝよめる、

和歌

世をおもふこゝろのたちとしられけり
さやくもりなき武士のたま

文書原寸　縦二七・四糎　横四六・六糎　包紙原寸　①縦二七・七糎　横三九・八糎　②縦二七・八糎　横四〇・一糎

三六　短刀御下賜勅書写　（白木箱入）

近衛忠房卿添書

（包紙ウワ書②）
「島津泉州先生
極内密　忠房
封　」
（包紙ウワ書①）
「泉州先生
極内々　忠房
□（朱「緘」）□
封　」

包紙原寸　①②縦三一糎　横四二・三糎

一六五ノ一
（包紙ウワ書）
「勅書写　内々御譲リ申候」

（封紙ウワ書）
「近衛大納言のもとへ　」

尚以時気専自愛可在存候、呉々泉州江宜可申達様頼入候也、

連日夏景増加候、弥其卿壮健満足候、偖は泉州即今浮浪之輩鎮静之儀頼ミ置苦労ニ存候、且亦惣体国論勤王之志専にして、万事進退可応勅諚之趣、実以正論、殊更頼母敷く、弥其趣意深厚行末々迄モ勅命遵奉有之候様ニト存候、此品麁軽ニ候得共、従来持古シ候故、芽出度内々泉州心底可賞旁一笑ニ遣度、先其卿江差出候侭宜伝達頼入候、決而極内々儀其辺相含候而取計之義も頼置度存候也、

四月廿四日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第二巻第五七号文書ノ一部ト同文ナリ）

文書原寸（折紙）　縦二一・二糎　包紙原寸　縦　四五糎　横五七・一糎　横三二・五糎

一六五ノ二

（包紙ウワ書）
「御内書　」
（封紙ウワ書）
「島津和泉とのへ　忠房
内々　」

尚々、余条ハ帯刀へ可申と存候事、

今日モ快晴ニ候、弥御平安珍重ニ候、其元誠忠之条々天朝不浅　御満足之御旨趣、就テハ其元御心底被　賞、従来　御物之　御短刀極密々被遣度叡慮、昨日不存寄勅書ニテ賜候事、何共恐入、於愚拙モ深畏ニ候事ニ候、御礼厚申上置候事ニ候、仍今日帯刀招寄、目出度御伝申入候、幾久敷　御重宝可為存候、賜候勅書写置候侭　御拝見之様存候、御跡ハ幾久敷其元へ御残シ置之様存候、仍写取目出度内々御伝申入候事、

四月廿五日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第二巻第五七号文書ノ一部ト同文ナリ）

文書原寸（折紙）　縦一六・四糎　包紙原寸　縦　三一糎
横　四五糎　横四二・五糎

一六四　近衛忠房卿ヨリ久光公へ
三郎ト改名ノ件　（御系図唐櫃入）

（包紙ウワ書）「島津和泉とのへ　忠房」
（封紙ウワ書）「泉州とのへ　忠房」

口述

唯今忠左エ門招寄候義ハ、其元呼名和泉之処、於関東老中水野和泉守モ有之、差当如何ニと存候間、呼名御改ニ而は如何、殊ニ三郎と被改候ヘハ、尚更之事ト存候、仍右之通申入度、旁忠左エ門入来　御頼申入候事ニ候、

五月十一日

文書原寸（折紙）　縦一六・五糎　包紙原寸　縦二八・五糎
横四六・五糎　横四一・二糎　二枚

一六五　一橋越前任命ニ付久光公ヨリ脇坂中務大輔ヘノ書　（白木無号御手紙類入）

先日は旧来御親昵之一筋を以御役場御離れ御面会被成下、別而忝次第奉存候、誠ニ随貴意存慮無腹蔵申述候処、何も御異論無之安堵仕候、夫ニ付猶又熟考仕候処、何れ天下之御為と奉存、僭踰之罪ヲ不顧、左条之義申述候間、（ママ）御都合次第御同列方江も御談合被成下度奉願候、

一此節叡慮之趣被為在、久世氏上京之儀被仰出候処、御請及遅滞候ニ付不被為停止、態々勅使被差下、公武御一和　御国内一致之処無之候而は不相済被思召、然而一橋・越前之両侯人心之帰嚮する処故、後見・大老ニ御登庸有之候様との　御趣意、誠以恐悦至極之御事と奉存候、然処先日略御咄致承知候得は、名目之処御評義甚御六ヶ敷由、其節は愚意何共不申出、態と差扣罷在候得共、退而致勘考候得は存付候義致黙

止候而は、却而不忠之至と奉存、不得已事申上候、遐
迩
勅使被差立被　仰下御趣意、纔名目ニ被為拘、御評義
御決定無之候而は、乍恐優柔不断と可奉申欤、当時不
容易折柄、旧格先例ニ御拘泥被為在候而は以之外之御
事、ヶ様御評義御遅延罷成候而は、又々人心疑惑ヲ生
し、異説紛々致流行、浪人共蜂起いたし候義も可有之
哉と甚懸念奉存候、若其次第ニ相成候而は、迚も御国
威御挽回之期も被為在間敷、実ニ恐入奉存候、何卒非
常之時節御出格之訳ヲ以一日も早く御評決、
勅諚御遵奉被為在候様伏而奉希候、乍併越前君之儀ハ
御家門之故聊御故障之事御座候ハ、、御大老同様御政
事総裁有之候様屹と被仰渡、御実意ニ御登庸被為在、
一統江も右之趣承知仕候様御達被為在候ハ、、御国内
静謐人心一和罷成、無此上恐悦之御事と奉存候、
一長州之事粗申出候処、御答不分明承知いたし候、是は
先比脇方より当五月二日之上書落手仕、虚実は分兼候
得共、愚意聊疑惑仕候、此御一条は粗申上候通、何そ
当年中不被為行候而も、天下之人心紛乱仕ニも有御座
間敷、来秋中ニ而も被為行候ハ、可宜欤と奉存候、
貴公様ニも其御趣意と致承知候、然共長州は頻ニ此儀
催促申上候姿ニ有之、甚無心許奉存候、方今之所ニ而
は勅命通越侯御登庸之上、当秋上京被命、外夷御処置
国是之御議論、其上有之
叡慮御伺相成候方可然奉存候、急速ニ御上洛被為在候
而御道中宿々迷惑ニ及、且於京師種々御評義決兼候御
事共被為在候而は以之外之御事、却而　皇国紛乱之基
欤と乍恐奉存候、大膳大夫爰許江罷居候ハ、小子面会
直談致度所存も有之候得共、着を乍存道を替、前日発
足候次第、何共不審千万、心底難量御座候、長門守出
府之由ニも候得共、相成事ニ候ハ、兼々決義も可有之
候ニ付只今之内再被召返、小子と篤と談合仕候様被仰
下候儀は相叶申間敷哉、左様御座候ハ、趣意致一致、
公武之御為別而可然御事と奉存候、

右之趣家督之者ニも無之候得共、亡兄遺言之一筋も有之、不得已不肖之身ヲ忘れ所存十分申上候間、若忌諱を犯シ僭踰之罪御糾シ有之候ハヽ、何様共可奉畏候、此節国許発足仕候より身命を抛周旋仕候義ニ而、敢而功名栄利を貪り候趣意に無之候間、一橋君御後見之儀は近比田安君御後見御免ニ相成候故、際々之所如何との御評義哉ニ奉伺候、尤之事ニて御座候得共、不容易時節　宸衷ヲ被為悩、態々勅使を以被仰下候事御座候得は、快く御請被為在候ハヽ、公武御一和之御実情御通徹被為在候御義ニ而、天下之人心も是御一条ニ而至極奉感服、御国家御安泰之基と乍恐奉存候、公武御一和御国内御一致被為成候得は、愚身は如何様罷成候而も、曽而遺憾無御座候、此趣不悪御汲取被下度伏而奉願候、

文書原寸　縦一七・二糎　横一八八・三糎

三七　久光公ヨリ幕府ヘノ国是要目二十余条ノ建言　（白木無号御手紙類入）

「（封紙ウワ書）不用書

戊年　於江戸
一橋・越前江談判之覚」

一勅命之御事御座候ニ付、是非来ル八月中旬比爰許発足ニ而、越前上　洛有之度、尤爰許ニ而以来之御処置大概評決之上、閣老一人同伴上　洛之事、

一一橋・越前登庸之上は実意ニ大政評論有之度、尤巷説ニ内実は一和無之哉など〻申事ニ候得は、若右之姿露程も有之候而は、第一　徳川家之御為、別而不可然奉存候事、

一大赦被　仰出御事ニ御座候得共、至今何共申渡無之、勅命奉行之旨ニ違ヒ候ニ付、際々施行有之度、尤午年以来諸浪士等死・流・幽囚等総而御赦免之事、

一此節所司代被命候得共、此人ニ而は又々人気に相拘り可申欤と至極懸念御座候、今一往御評義之上御人撰有

之度事、

但　大坂も同断、

一是迄公武之御間名義不相当之訳、細々御取調御変革有之度事、

一将軍宣下之節は　上洛、

一御書附認振、

一勅使御会釈振等、其外段々可有之欤、

一和宮様御会釈向、今一際御手厚有之度、是迄将軍家より諸大名江御縁組ニ不準と奉存候事、

一朝廷御続料十万欤十五万欤、御重メ有之度事、但公卿方も今少しッヽ同断、

一来年中ニは是非　将軍家御上　洛、公武御一和之御実意天下ニ顕れ候様有之度事、本文か様申上候得共、和宮様御上落来春中被為在候ハヽ、将軍家は来々年ニ而可宜哉之事、

一諸役人之邪正、屹と御糾シ有之度事、

一諸大名も同断、

一公卿方も同断、

一酒井若州儀隠居慎被仰渡度事、

一安藤対州も今一際重ク被仰渡度事、其外随従之面々屹と御咎メ有之度事、

一九条家も隠居慎被　仰出度、随従之公卿方も有之候ハヽ、武家ニ可被準事、

一諸大名参勤是迄通ニ而は迚も海防十分難行届候ニ付、遠（三百り以上）　中（二百り以上）　近（百九十九り以下）ニ応し年数差別有之度、若此義難調候ハヽ、妻子国許江引取度事、

一海防之儀爰許は勿論、諸大名一統江年限御定、是非十分行届候様御達相成、此上若不行届有之候ハヽ、厳科被仰付旨、屹と被仰渡候事、尤前条参勤之義御達之上たるへき事、

一公武之御方ニ今般御慎解被為在候上は、再御家督被仰出度事、尤是迄之御家督は部屋栖ニ被仰付度候、

但此条は

京師より被仰出度奉存候事、

一爰許は勿論、大坂・兵庫・堺等警衛、方今之趣ニ而は
不相済奉存候事、
一京師警衛、大藩四五頭江交代ニ而相勤候様有之度事、
尤是迄之彦根・高松等は御免ニ而、当地之守衛被命度、
左様無之候而は第一人心不和合之基と奉存候事、
一水戸前黄門贈官有之度事、
一故掃部頭、罪科屹と御糾シ、代数御除有之度事、
但井伊家は先祖代より　徳川家ニは格別功労も有之
候ニ付、当人迄之処ニ而申上候、
尤井伊・安藤等、右通御取扱無之候而は、
朝廷江被対不相済奉存候事、
一外夷御処置は内政大体居り合付候上ならでハ不宜欤之
事、
一外国人応接は以来拾万石より三拾万石計迄之大名江被
命（外様四人、普代四人二人ヅヽ交代ニ而参府）、少事は時々幕府江差図ニ不及、
臨機に而可取計、閣老宅之応接は取止にいたし可申、
尤登城も同断、

文書原寸　縦一五・七糎　横九一・三糎

三六　生麦事件ニ付晃親王ノ詠詩

（白木無号御手紙類入）

薩州老将髪衝冠　天子百官免危難
英気磷々生麦駅　海辺十里月光寒

文書原寸　縦一七・二糎　横二六・三糎

三三六　久光公上京召命ノ御沙汰書

（一号唐櫃入）

（包紙ウワ書①）「御沙汰書」

〆（付箋）『文久二年九月　御沙汰書』」

島津三郎暫滞在之様毎々
御沙汰有之候処、要用難繰合旨達而御断ニ付、無拠被任
其意候処、方今事体且当冬一橋刑部卿上京之旨、右ニ付
而茂万事被尋下度儀共被為在候間、遠路甚苦労

思召候得共、早々上京有之候様被遊度旨
御沙汰候事、

九月

文書原寸　縦一七・五糎　横五九・一糎　包紙原寸　①縦二七・九糎　横三九・七糎　②縦三一・九糎　横四三・九糎

三三　近衛関白ヨリ久光公ヘノ書翰　（一号唐櫃入）

（封紙ウワ書）
「島津三郎殿　忠熙
（「誠」）
□」

尚々、忠房ニも同様分而宜々申入度由ニ候也、
追々寒冷増長候、弥以御勇猛珍重存候、抑去々月再御上京ニテ幕府之形勢被　聞食
御満足之御事、於忠熙も大ニ安堵之仕合、且無滞参　内も相済、御都合之御事深安心仕候、其後度々御入来種々打明無腹蔵御内談共申入、大ニ心慥ニ存居候得共、其許発駕ニ相成、其後ハ長土両藩程ニ申立之事共も无之、多端之儀、殆心配り困苦より今度別
勅使も矢張被差下ニ相成、此儀ニ付而も甚々心配之事共は、且又一橋近々関東発足上京之由ニ而上在之、右ニ付而ハ深其許之上京不相成候ハ而は、
叡慮ハ勿論、於忠熙始甚無心元心痛之仕合ニ候、殊ニ
勅書ヲ拝領致、何卒其許早々上京ニ相成候様、段々深キ思食被為在候御事故、右　勅書写取入覧候、且又早々上京ニ相成候様御沙汰書モ被出候侭、良節ヲ以早々申進候、御国務何卒御繰合セニ而早々御上京之様分而申入候、扨此度ハ莫大之献朱弥々御心入之段、御満足ニ被為在候、右之儀モ良節ニ委細申置候侭御聞取可給候、呉々御満足之御事、御誠実之段感服候、何も早々御上京候期申入候也、

尚々御帰国後間も無達而申入候儀、甚如何ニ候間、実々御不寄心之
御沙汰、頻ニ被為在候間、御組取申上候様存候也、
時勢委細ハ良節ニ御聞可給候也、

十月一日

三三〇　有馬新七等処罰ニ付久光公ヨリ家老ヘノ口達　（白木無号御手紙類入）

（包紙ウワ書）「三郎様　御筆」

口述

先般伏見騒動張本有馬某外三人之儀、我等当地発足以前より尊王攘夷之説ヲ以種々致造言、諸藩浪人等江も其筋申聞、京摂辺通行之節兵ヲ起シ、九条家并所司代江可及乱妨趣共相企候段、我等室津着船之砌委細聞届候ニ付、早速理解人差遣、且着坂之上も丁寧為申諭候得共、迚も相用候勢ニ無之候ニ付、無拠又々人差出、其方共実に勤王之志有之候ハヽ、内分朝廷之御都合可相伺間、其内相待候様為申諭置、近衛家江参殿いたし委曲申上候処、早速議奏衆御招、御談合有之、其趣被達天聴候処、以之外之事候条、是非鎮静可致との旨致承知候故、其趣ヲ以再三及理解候処、使之目前ニ而は致承服、与類之者共江は内実は急速事ヲ破り可申との催促之筋ニ、暴威ヲ以実意等敷申聞候ニ付、無拠一同致同意推々上京之企ニ相及候始末、国家之義は勿論、皇国之御為別而不軽不届之事候条、罪科之義速ニ取調、両日中申出候様大目附江可申渡事、

但罪状相決申渡之節は、一統江も不洩様可相達事、

文書原寸　縦一六・一糎　横六七・二糎　包紙原寸　縦二九・四糎　横四〇・七糎

四〇四　西之宮中山次左衛門ヨリ京都小松帯刀ヘ江戸姫君帰国ノ途次播州辺巡覧ノ件

高木之後も益御都合好御通行、今酉刻過西之宮江

御光着、猶以
御機嫌克被遊
御宿候之間、恐悦御同意乍憚奉存候、将又別紙伺上越候
御日重一件、誠ニ不容易義、殊更今朝も細々御内話も承
知仕居候へハ、一日も早被遊
御帰国候方、万緒
御都合も可御宜山々奉勘考、御日重之事無之やうト工夫
仕候へ共、元来今日小野島より明日摩耶山
御参詣之儀ハ如何と承候付、右ハ全
御慰事ニも無之、江戸ニ而より承候ハ、
御安産御祈願之訳ニ而、可相成ハ
御直参被遊度奉存候処、御医師共申出候は、京都より之
御風気も全ハ未被為除候付、先ハ山深き高所ハ被遊
御遠慮候方可御宜と奉存候段申出、則其趣ヲ以小野島迄
細々申含、
御延引可被遊旨申上、其通御許容之上、又々被為召被
仰出ニハ、石之宝殿・高砂松・相生松等ハ、のこらす被
遊
御巡覧たき段承知仕候ニ付、是迄も
御拒申上候義ハ何共不本意ニ奉存候故、不得止事御日重
之事、別楮之通申上候、其段ハ御推察被下候様奉存候、
勿論小野島ニも御日重ニ相成候義ハ、実ニ以御気之毒に
奉存候ト返々も申候義ニ御座候、成程左右ニも得申候、
何分ニも宜敷御指図奉希候、以上、

十二月壬十一日　　西之宮より　中山次左衛門

帯刀様
奉尊下

文書原寸　縦　一六糎　包紙原寸　縦二七・七糎
横一八二・三糎　横三九・七糎

四三五　久光公御官位御任叙ニ付口宣々旨其他御書付類現書御引譲之目録　（御系図唐櫃入）

（表紙）「久光公御官位御任叙ニ付
口　宣々旨其他御書付類現書御引譲之目録」

久光公御官位御任叙ニ付

口　宣々旨其他御書付類現書御引譲之目録

文久四年正月十四日
一従四位下口　宣案　壱通
一同位記　壱通
一左近衛権少将口　宣案　壱通
一同口　宣々旨　壱通
一右上卿職事名書　壱通
同年二月一日
一大隅守兼任口　宣案　壱通
一同口　宣々旨　壱通
一上卿職事名書　壱通
元治元年四月十一日
一左近衛権中将口　宣案　壱通
一同口　宣々旨　壱通
一上卿職事名書　壱通
一従四位上口　宣案　壱通
一同位記　壱通
一上卿職事名書　壱通
元治元年六月一日
一女房奉書　壱通
元治元年六月十七日
一同　壱通
明治二年三月六日
一久光公参議兼中将并従三位
宣下之御書附　壱通
一右出格之　思食ヲ以
宣下候旨御書附　壱通
明治二年六月
一権大納言従二位任叙之行政官御書付　壱通
文久二年戌五月十一日
一和泉様三郎と御改称ニ付近衛忠房公御口述書　壱通
同年七月二日
一三郎様浪人御鎮静ニ付従　幕府御刀被下候御書付　壱通
文久四年子二月十六日
一少将様御書付ニハ島津大隅守トアリ御用有之節ハ御用部屋江被遊
御出候様御老中有馬遠江守より御承知之御書附　壱通

元治元年子
一三郎様不容易御時節ニ付　朝議参予可被為　在被　仰
出候ニ付、従四位下左近衛権少将推任叙被為蒙
宣下候御書附　　壱通

元治元年子四月十一日
一中将様従四位上左近衛権中将御叙任之口　宣案写弐通、
口　宣々旨写壱通、位記写壱通、上卿職事名書弐通、
御礼物請取書壱通

元治元年子六月朔日
一中将様
天朝より寮御馬御拝領之御馬道具、御譲道具之内江被
入置候旨御家老衆御連名之御書付　　壱通

同前
一中将様　将軍より御拝領之御馬道具、御譲道具之内江
被入置候旨御家老衆御連名之御書付　　壱通

慶応三年卯十一月十一日
一近衛忠房公御書翰壱通并内膳殿御添書壱通
但御書棚并鈍子（總）
皇上江御献上ニ付而之御書翰也、

元治元年甲子正月十七日
一前之浜ニ於テ英夷攘斥ニ付御鞍置御馬御拝領之御書付
但前書ニ島津少将トアリ、

元治元年甲子二月廿二日
一久光公従　幕府御鞍置之御馬御拝領之御書付、毛付并
御馬道具目録　　五通

明治二年三月
一久光公御病中推而　御登京ニ付御品賜之御書附
壱通
但別紙壱通相添

冊子原寸　縦二六・五糎　横一九糎　七枚

四九　英艦来襲ニ備フル久光公ノ諭書

（白木無号御手紙類入）

今般英夷軍艦横浜江渡来、重大之事件申立、於　幕府御
許容難相成趣之由、畢竟去秋生麦一条之儀と相聞得候、
就而は当家より事起り、
皇国之御大難成立候条、彼より強暴申募り兵端相開候節
は一統粉骨砕身、　天下国家之為死力ヲ尽シ、夷賊誅伐
有之候様頼存候事、

文書原寸　縦一六・三糎　横四七・八糎

尚々、別而混雑、細事□(欠損)□(欠損)候へ共、太概御推察可□(欠損)□(欠損)候、

今十一日、漸にして兵庫江

御安着、益御機嫌克被遊御座恐悦御同意奉存候、外之浦江中四日

御滞舟、雨風甚敷、已ニ八日朝ハ三り程沖江乗出候へ共、中々凌かれす、又々　御引返し、已ニ細島よりと申事ニ

御治定相成候処、九日朝快晴、直様御出帆之次第御座候、当所迄高猪参居、京地事実承、実ニ

朝憲を蔑にし候重罪之者多々有之、攘夷もいよ〳〵決定相成、已ニ今日ハ鴨社江

御幸、　太樹公供奉、諸大名も御供被　仰出度との事ニ

御座候、明日ハ　八幡

御幸同断、十五日かた御暇之由、然処御供舟未着いたし不申、直様御立も出来不申、旁心配之事ニ御座候、今や〳〵と相待事ニ御座候、是非共

大樹公ハ　御上京迄ハ御引留相成候様

三五五　学習院開筵ト学則　（御手許五番十号箱入）

三月九日卯刻学習院御開筵也、聴衆堂上百廿方余被

仰出候学則之覚

学則

履聖人之至道、崇皇国之懿風不読聖経何以修身、不通国典何以奇正明弁之務行之、

講師

寺島丹波助

牧　善　助

大沢権五郎

中沼口造

岡田陸造

三五九　中山中左衛門書翰　宛名ナシ

攘夷御親征ノ件　（雑三十八番巻物）

中川宮江　御直書も参り、高崎も承知にて直様帰京仕申候、いつれ共長ク　御滞京ニハ相成ましく模様も御座候ニ付、細島之処精々御差急キ、役掛等ハ此方より差返ス日割も無覚束御座候付、誰そ御遣し被下度、帶刀殿御差図御座候間、此段申上候、何分攘夷ニ決定、已ニ先陣を望ミ、一昨日

京地出立之輩も御座候由、誠ニ残念之事ニ御座候、其成功ハ全ク不論、下匹夫之輩よりか様大事を誤るの件、実忍不申候ハヽ、此節ハ折角おとなしくと相考居申候へ共、素より之暴ならでハ相済間敷御座候、及限りハ是非大道至理ヲ以

皇国之威光四海江輝候様有之度訳と奉存候、何分も機を失ひいたし方無御座候、しかしなから

御上京ならでハいか様とも難申上候、今一左右御待可申上候、今日もわざと町便ヲ以早々御左右申上越候、可祝、

三月十一日　　中佐衛門

文書原寸　縦一六・三糎　横八二・三糎

（一号唐櫃入）

三三　尹宮へノ密宸翰

（包紙ウワ書）「三郎殿　　尊融」

（付箋）『文久三年四月廿三日　密宸翰』

（付箋）『甲三通』

緘　　」

連日快霽薄暑催候処、倍云々々々々々候、扨は

神斎中々々今日一封差進候筈之処、及遅々々々差越忝存候、如御申社参モ先々無異ニ相済、重々以安心候、実ニ深神助之処、誠ニ以奉謝ニ無限事ニ候、実ハ過日一封ニて蜜々申入候後、段々ト心痛之廉相増候余、持病之眩暈相発、十日之云、迚モ遠路之乗輿、重大之義勤難、大心痛ニ而臨期延引之義、十日ノ朝関白云々之通候処、於関白モ尤ニハ存取云々々々々々発言成かたく候間、

叡慮決云々被出様返事候、無間三条乞面会、即押而逢候処、同様関白ニ承候由ニ而、実病虚病尋候而不承知之様子、乍御違例御決定なくハ申事故、其後決定之趣意両役へ差出候処、急ニハ無返事処へ関白入来ニ而面会、万々

話合候処へ参政・国事寄人ラ云々候而、御違例タリ共是非行幸有是様、全虚病云々少允ニ召寄尋御留申ぬやう申聞云々候、此上ハ云々御内義へ踏込、其上共無御承引ハ直ニつれ出し鳳輦へ入るゝやのと、けしからん大強勢之由、恐々入候へ共、此上ハ御決心次第致方もなくと、関白モ大ニ心痛之次第ニ候、其大(ママ)馬キ之用ニ済候後、両役返事ニ而何卒御所労、押而行幸有是候様とのぬらくら返事ニ候、其故誠ニ心痛乍十一日行幸候処、全神助ニ而少々之逆上ハ候へ共、予始下々無異ニ相済候而、先以安心之事ニ候、実々是計ニ不限、血気之堂上此侭にてハ万事ニ只々我意募候而、予・関白失権、両役ハ云々々々之堂上ニ次第ニ相成、朝廷云々付此上云々々、右之次第荒々乍御話申入候、何卒此上ハ一廉之御智謀ニ而、実々薩州ヲ招寄、予始三郎ト一致ニ而、暴論之堂上キト目ノあき候様いたさねハ、迚もともならす日々夜々心配候、何分参政・国事寄人云々云々止ニ相成候而一廉改革ニ不成候而は、迚も〳〵国乱之基ニ候、何卒此辺得々御蜜計有是度、内々其宮迄申入候間、決而不洩様策ヲ惟幕之内ニめくらし、成功ヲ千里之外ニ御輝シ頼置候、余り心配之余又々申入候、決而関白へも誰へも先無御沙汰頼入候事、先ハ荒御話申入候也、

四月二十三日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第二巻第三三五号文書ノ一部ト同文ナリ）

文書原寸　縦　一七・八糎　包紙原寸　縦二八・一糎

横一四三・七糎　横　四〇糎

三三七　尹宮ノ奉答書

（一号唐櫃入）

昨日は勅書給致拝見候、今朝モ快晴薄暑ト被存候、弥御機嫌ニ被為有恐悦ニ候、今日は敏宮ニモ移住、是又恐悦ニ存上候、扨昨日被仰下候条々、誠ニ恐入候次第、何共〳〵絶言語、実々御他言不被為有様、伏而従尊融モ願置候、此頃之模様ニ而は

朝威日々ニ衰恐入候、併唯今之処ニ而三条等へ彼是申候モ無益ト被存、唯々時節御見合被為有候様存上候、於尊融は行末ヲ奉助ノ外謀略無是、実ニ此時は彼ニ悪ヲ積シメ天誅ヲ御待被為有候様、伏而願置候、三郎之義ハ篤勘考仕置候故、猶伺公之節言上可仕候、日夜之御苦心恐入候、唯々此上は数々伺公モ致兼候故、以　勅書御沙汰被為有候様願置候、御請荒々申上候、恐々謹言、

四月二十三日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第二巻第三三五号文書ノ一部ト同文ナリ）

文書原寸　縦一七・七糎　横七二・三糎

三三四　尹宮ヨリ久光公ヘノ書翰

国家ノ為尽力ヲ望ム　（一号唐櫃入）

（封紙ウワ書）「三郎殿　尊融」

追日暑気相加候、弥御多祥珍重ニ候、過日は登京、其節ハ久々ニ而得面展色々承悦入候、早々帰国、誠ニ遺憾不少候、併以良節・助左衛門両人

禁中飽而被助之由被申越、於尊融誠ニ安心、猶此上之処、為　朝家天下尽力呉々モ御頼申置候、扨過日来種々御心入之品々被恵永可致重宝、毎々ニは不申入取束、荒々謝入候、亦方今之形勢ニ付定而深謀モ可有之賢考頼入候、猶良節・助左衛門両人へ申聞候事共被聞取、猶又以良節賢慮承度候、先は要々計申入候也、恐々謹言、

二白、過日給候、

勅書写且御請共御目ニかけ候、是等も宜賢慮被存候事、

五月十二日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第二巻第三三五号文書ノ一部ト同文ナリ）

文書原寸　縦一七・六糎　横一一四・八糎

三三六　進藤式部権少輔ヨリ小松帯刀ヘ

（雑三十八番巻物）

（封紙ウワ書）
「小松帯刀様　　進藤式部権少輔
〆　　」

二白、藤井宮内様御面会之御事御座候ハヽ、乍憚宜御伝声奉希度、是又御早く御帰京奉待候段、よろしく御伝伏而奉希候、以上、

向暑之砌、弥御安全被成御奉職、珍重之御義奉存候、扨は京師御発途後、御道中何等之御障も無之、御着家之御事と珍重不斜奉存候、御家族方ニも何等之御障も無御座候哉、扨御発途

内府殿へ御直に御申上有之候よし、彼晴雨計御献上にも可相成候哉之趣、近日御噂被為在、大に〳〵御満足ニて御待被為在候御事ニ御座候、就而は近日御噂には、先日貴亭へ御成之節、御覧被為在候のとは、すこし大なる品御上ケニ相成候やうに御申上御座候よし、右は色々御こゞと被仰入候へとも、何卒同しくは先日御覧のよりは今少し小き方、御有合御座候ハヽ、御献上に相成候様被遊度、此よし私より程能可申入候やう被仰付、幸御奉書御返翰指出候便にまかせ、右之段御はなし申入候間、別条御承知可被成下候、

一一日も御早く御帰京之儀、日夜奉待居候、且兼々懇願之義、既に御発途以前御噂之義も御座候旁偏畏悦仕、御吉左右のミ奉俟居候、何分にも此上可然様御配意奉希候、先は前件之義共申入度、猶奉待拝顔候、草々頓首、

五月廿一日

文書原寸　縦一六・二糎　横一四二・七糎

三七〇　近衛忠熙卿ヨリ島津久光公ヘ　　（一号唐櫃入）

公ノ上京ヲ促ス

（包紙ウワ書①）
「島津三郎殿　内々　　忠熙
□（朱「緘」三ツ同ジ）□」

□　　」

（封紙ウワ書）
「　内々
島津三郎殿　　忠熙
□（朱「緘」）　」

暑気甚候処、弥御安康之条珍重、尚承度存候、扨は段々切迫之時勢、天下治乱之堺ト相成、甚以不堪苦心候而、朝廷実ニ恐入候形勢ニ在之候、幕ニ而も以之外之次第、如何可相成哉と痛心之至ニ候、右ニ付段々被悩叡慮候御次第ニ而、中川宮忠熙江勅書御内々賜之候テ、其侭御伝申入候様トノ御沙汰ニテ、中川宮ヨリ被伝候事ニ候、御拝見在之、急速御上京可被奉安叡慮存、右大臣始同志之人々連署ニ而も可申入候侭、偏ニ御熟考、早々御上京之様御頼申入候、委細之儀、本田弥右衛門江申含差下候侭御聞取可給、何も要用ノミ申入候、実安危切迫之次第可察給候也、

五月廿日

文書原寸　縦一七・九糎　包紙原寸　①縦二七・六糎　横　四〇糎
横八七・七糎　②縦三一・五糎　横四二・三糎
包紙原寸（総括）縦三三・二糎　横四八糎

五七三　久光公ヘノ宸翰

上京周旋ノ勅命　（一号唐櫃入）

（包紙ウワ書）
「上」

攘夷之存意は聊茂不相立、方今天下治乱ノ堺ニ押移リ、日夜苦心不過之候、今度大樹帰府之儀ニ付テモ段々不許趣申帳（張）候得共、朕存意ハ少ッモ不貫徹、既ニ帰府治定候事、実以於朝廷茂存分更ニ不貫徹、総而下威盛ニ中途之執計已ニ而偽勅之申出、有名無実之在位、朝威不相立形勢、悲歎至極之事ニ候、何分ニモ表ニ誠忠ヲ唱、内心姦計、天下之乱ヲ好候輩已ニ候、昨年基本ヲ開候事故、深依頼ニ存、只管待候事ニ候、三郎急速上京ニ而、尾帳（張）前亜相ト申合セ、一奮発ニ而中妨無之手段厚周旋、為皇国

尽力在之、先内ヲ専ニ相整候辺不浅依頼候、昨年上京之砌言上之筋一廉モ不相立は同姦人之策ニ候得は、何分此処ニ而姦人掃除無之而は、迚モ不治ト存候得は、早々上京ニ而始終朕ト申合、真実合体ニ而無寸違周旋有之度候、何分此侭ニ而ハ天下催已ニ而昼夜苦心候間、其辺深熟考有之度候事、

上京於周旋は依頼致シ度儀モ候ヘハ、速ニ承知周旋兼而頼置候事、

文書原寸（折紙）　縦二二・二糎　横五七・六糎　包紙原寸　縦四四・二糎　横五七・七糎

包紙原寸（総括）　縦三五・五糎　横四九・三糎

三七三　尹宮ヨリ久光公へ　（一号唐櫃入）

御内勅書ノ伝達

（封紙ウワ書）「三郎殿へ　内々　申入候　尊融」

唯今　御内勅書、従前関白殿被廻候故、本田弥右衛門ヘ相渡候、此御趣意速ニ致遵奉候様、従尊融別而申入候、

恐々謹言、

五月晦

文書原寸（折紙）　縦一六・三糎　横四五・二糎

三六六　小松帯刀書翰　宛名無シ　（雑三十八番巻物）

祇園祭ノ事

尚々、時下随分御保養被成度、呉々も奉存候、

暑中難凌御座候得共、御堅勝被成御奉職候半と奉欣喜候、二ニ小子ニも無異相勤居候ハ、御休意可被下候、然は爰許之形行ハ別紙を以御問合申上候通ニ御座候、此両日ハ中々暑サ厳敷御座候、此方ハか様之暑ハ無キ事と存じ候処、思之外ニ御座候、其上御長屋木陰ハこれなく照抜ニ而厳敷御座候、暑中ハ其御元御浦山ニ御座候、昨日ハ祇園祭ニ而誠ニ賑々敷御座候、別紙申上候通錦ヘ御客様有之、五日之夜より夜明打続キ、昨朝より昨夜も深更迄

御客様誠ニ閉口ニ御座候、御推察可被下候、今日迄ハ未くたひれ居申候、細事ハ後便と申上越候、乱筆御免可被下候、乍便宜如斯御座候、已上、

六月八日　　小松帯刀

文書原寸　縦一五・九糎　横七五・六糎

六三　久光公ヘノ宸翰　（一号唐櫃入）

上京猶予ノ御沙汰

（封紙ウワ書）「〆」

島津三郎

御用之儀ニ付、急速登京可有之被
仰出候得共、発途之儀は今暫猶予可有之候、重而
御沙汰有之候節は早々上京可致候事、

七月

文書原寸　縦二一・七糎　包紙原寸　縦　二八糎
横七一・八糎　横三九・八糎

六四　久光公上京猶予ノ御沙汰書　（一号唐櫃入）

今度不容易時勢ニ付、格別依頼ニ存候ニ付召候処、一端ハ予之所存貫通候テ、則申渡しニ相成、尚上京之上ハ厚頼度件々モ在之、偏ニ相待居候処、即今列藩之中彼是申立之次第モ在之、就テハ弥依頼ニ存候ヘ共、右申立之儀ニ付、即今仮初之一策ヲ立ねハ、元来之存意篤ト貫徹之場ニ難至見込相立候ニ付、更決断ヲ以テ一寸猶予之沙汰ニ及候事ニ候、右様之儀ニ候故、一通り猶予之沙汰ニ聞取候ハヽ、定テ予違存之事欤疑惑不快ニ可存哉ト深心痛候へとも、最初ヨリ之存慮弥以相替義聊無之候故、今度猶予之事申渡し候ニ付テハ、不計激発之義等在之候而ハ、予之本意却而遂果かたく、即今輦下之指引、聊之儀至極之大事ニ候故、右之次第ニ成行候儀、実以歎入候得共、即今猶予之沙汰ニ不相成ハ、忽混雑ニ及候趣ニ候而、実以於予ハ一端急々ト召候テ、再沙汰替りニ相成候儀、何迄モ不承知ト段々申候得共、列藩々中更ニ不応、従而堂上ニモ拒輩有之、六ケ敷申立候趣ニ相聞ヘ候ニ付、勘考

ヲ廻し猶予之沙汰申渡し候儀、其辺予所存厚組取、先此場ニテハ静ニ予之命ヲ受置候様ニ厚々頼入候、兼テ之内勅モ在之候ヘハ、奮発ニモ可及哉ト心痛候、先内勅之義ハ三郎宵中ニ含置候テ、即今内勅ヲ以テ奮発之儀ハ決テ〳〵不宜儀ニ予ヨリ沙汰可申入、猶上京候ハ、更ニ内勅可出候間、是迄之内勅之儀は決シテ〳〵口外必々無之様厚々頼入候、実ニ色々ト相成候勅諚、何共悲歎申条無候、呉々不悪組取、決テ此場合ニテハ内勅口外無之様、分テ〳〵依頼致度存意ニ候事、

文書原寸（折紙）　縦二二・二糎　横五七・八糎　二枚

包紙原寸　①縦四四・一糎　横五七・五糎　②縦四二・六糎　横五七・九糎

六六五　七卿ノ官位褫奪其他ノ朝譴

（白木無号御手紙類入）

（端裏書）「帳面書載済」

去廿四日極急飛差上候後、格別相替儀無御座、追々朝儀も御宜敷向罷成、

鷹司様御辞表御差出後、御参　内不被為在候、未被免は無御座候、

一中川宮様、一昨廿七日、於

禁中　御元服、弾正尹被為蒙　仰候由承知仕候、

一御守衛兵士之儀、別紙通吟味、土州江結、会津侯江一昨廿七日差出申候、会津も同意ニ候得共、主人御職掌ニ付連名不仕候、

一和州江乱入之大将之中山侍従以下、高取城ニ責詰候処、植村様方より砲発ニ敗軍、七人討取、生捕五拾人計有之、兵器ヲ奪取、残党高野山江引取候風聞御座候、賊方残は何程と申儀相分不申候、紀州・藤堂江討手被仰付差越候得共、墓々敷評判も承不申候、

一尾州前様、一昨廿七日、名護屋御発途之由御座候、当主は御隠居御願之由承申候、

一越前侯出京御差留、家士いつれも愕閉仕居候、彼是周旋も承候得共、何分いまた御慎解不仰出、其上異国交

易之取沙汰専ニ而、京師至而人気不宜、
朝敵春嶽と呼捨ニ唱候、既ニ去ル十八日之騒会ニは、
坂本ニ陣を取、叡山より京師江責下候なとゝあらぬ雑
説ニ而、人気大ニ動揺、夫等之処より畢竟ハ更ニ御差
留為相成欤と申事ニ御座候、
一先日長州江相下候
勅書、諸家江　御布告相成候処、其後相替出替相成申
候間、写差上申候、
以下文略ス、
右、内田仲之助書状写
春来彼是違
叡慮候上、攘夷
御親征之期未及到来候得共、何れ
御親征可被為在候ニ付、為
御祈願、大和国
行幸可被為在
叡慮之処、
御親征機会今日を不可被過、旁
行幸於大和国軍議可被為在旨、屢遮而及言上矯
叡旨候段、不容易次第ニ
思召候、依之御取調可被為在候付、被止参　内候得共、
押而参上難計、且暴論之徒引卒推参可有之候而は及紛乱
候故、九門御固被仰付、尚又於長藩も士気壮烈ニ過候よ
り、疎暴論之輩も可有之哉難計不被為得止事、堺町御門
御固御免候事ニ候、然処長藩追々引退候節、三条中納言
以下堂上七人同伴他国ニ及候段、不憚
朝威甚如何ニ被
思食候事、
今般
行幸暫　御延引被　仰出候得共、於攘夷は早可遂成功、
累年之
叡念候、依之勤王之諸藩不待幕府之示命、速ニ掃攘之旨

叡慮被　仰下候事、

御守衛兵之儀は是迄御先規も不被為在候処、暴論之徒追々建白仕候趣有之、畢竟兵力を借、高貴之御方々江逼り、自己之暴威を逞し、或は無名之刑獄を起し、終ニ矯叡旨候ニ至り京師之騒擾を醸候事、実以国家之妨害、甚不可然御事と奉存候、万一緩急到来仕候節も、畢竟烏合之徒、元帥之任も無御座、何之御用ニも相立申間敷奉存候、方今列藩之重兵を以警衛仕候上は、猶以速ニ被免候而、各藩江被差返候様仕度奉存候事、

広橋左衛門督
豊岡大蔵卿
東園中将
滋野井中将
万里小路右中弁
烏丸侍従

議奏被仰出候事、

右差扣被　仰出候事、

三条中納言
三条西中納言
東久世少将
壬生修理大夫
四条侍従
錦小路右馬頭
沢主水正

広幡大納言
徳大寺中納言
長谷三位

依願議奏御役御免、御自分遠慮、他人面会被止候事、

正親町大納言
柳原中納言

右、去ル十八日不法進退依有之、被止官位候事、

三条西中納言

橋本少将

右之輩、自今被止国事御用掛、

豊岡大蔵卿
東久世少将
万里小路右中弁
烏丸侍従

右之輩、自今被止参政、

東園中将
滋野井中将
壬生修理大夫
四条侍従
錦小路右馬頭
沢主水正

右之輩、自今被止寄人、

右之輩、自今被止参　内候事、

一自今以後被止参政・国事寄人等之職役候事、

右之通被　仰出候旨、加勢左衛門督被申渡候由、伏原三位被演説候、尤番々且小番未勤之輩江は自親族中可申渡候、仍而早々申入候、以上、

八月二十日　　保実

清三位殿

追而申、河鰭少将・正親町少将等は、追而　御沙汰候之事、

文書原寸　縦一六・七糎　横二三〇・六糎

六七五　内田仲之助ヨリ京摂状況報告

（白木無号御手紙類入）

（端裏書）「相済」

一昨廿二日、永山清左衛門・西田次右衛門極々急ニ而差立申上候後之形勢、左ニ申上候、

昨廿三日長州江被　仰出候

勅書、猶亦御評義之上、正議之二字御除キ、且堂上早速帰京候様、長門宰相父子江可被　仰付候事と申儀、御別紙之通相直、更ニ諸家江御告布相成、天下之大幸

無此上御儀と奉存候、且又三条以下官位御解脱之義も
今日被仰出候旨、慥ニ承知仕候、
一紀州様壱万計之人数ニ而今日着、中納言様ニは二条御
城江御入之由ニ御座候、
一尾張前大納言様去ル廿二日　御発駕之処、御所労ニ而
多分は御延引可相成旨、藩中角田正次郎と申者申居候、
一阿州・上杉、長之義種々申上、別而
朝議之妨相成候由承得候、
一大和辺一騒之義は、別紙ニ申上候通御座候、
一益田弾正より差出候書付は御取揚無之、御差返相成候
由、慥ニ承得申候、
右之通申上候、以上、
八月廿四日　内田仲之助

文書原寸　縦一六・七糎　横四五・三糎

六四　七卿西走、大和騒動報告（白木無号御手紙類入）
（端裏書）
「相済」

昨廿六日暁七ツ時比、五条表致屯居候浪士共凡千計押
掛、貝・大鼓足並ニ而当城下土佐町西之方入口三四丁
前迄押掛候間手配仕、西口より壱町余人数押出、向よ
り大砲并小筒打掛候ニ付、無余儀及戦争候処、左之通、
一雑兵首　七ツ
一同生捕　凡五拾人
一木筒　六挺
　但、玉目六封度より十五寸迄
一小筒　三拾六挺
　但、玉目凡三四匁
一陣太鼓　一ツ
一槍　九筋
一刀　弐拾五本
一弓　弐挺
一脇指　三拾九本
一兜　一ツ
一具足　壱領

一陣笠　五拾六
一玉薬たんす　弐荷
一高張提灯　弐本
一箱提灯　一ッ
一法皮　三枚
右之通ニ御座候、味方ニ鉄砲薄手弐人、死人は一人も無御座候、此段不取敢先御届申上候、以上、

八月廿七日　植村駿河守使者　村田丈四郎

三条殿初欠落之公卿又は浪人等、如何之模様も難計、細々聞合、何分可申上致承知、長州初当所江は下坂無之、山崎街道通行、西之宮より乗船之模様ニ而、於当地小早船段々借入差廻候段相聞得候ニ付、則慥成者両人為聞合方去ル廿日より西之宮・兵庫等江商人躰ニ而差出候処、左之通申出候、

一去ル廿日、長州人数京都より山崎街道通行、西之宮江出、公卿三条殿・四条殿之由ニ而、外ニ壱人は名前不相分、いつれも重立候人と相見得、乗馬ニ而候由、附添候者共、いつれも解髪、白鉢巻着込等之由、

一毛利讃岐守凡人数弐百三拾人計、吉川監物人数三百五十人計、長州家老益田弾正初其外藩中凡六百人計、惣人数凡千百人計、何も鉢巻いたし白装束ニ而背ニ姓名を記し、銘々槍又は鉄砲携居候故、所之者共驚惑、何事歟と相尋候処、無別儀、万一京都より追手差越事も難計候故ニと相答候由、西之宮着は廿日暮前ニ而候、都而止宿之賦候処、前日十九日作州津山侯泊ニ而、廿日ニ出立之賦候得共、京都急変到来之段相聞得、滞在相成折柄、土州女中泊ニ付止宿為差支由候得共、公卿并長藩丈止宿相成、俄ニ毛利・吉川等之人数は不残踏越、兵庫江同夜四ッ過比着、止宿之由、

一西之宮止宿人数は暁七ッ時出立ニ而、兵庫江五ッ半時分着之由、

一公卿并警固人数六拾八人、兵庫旅宿旅込町豊島や嘉兵衛所之由、右下向ニ付而は、日向船并小早船都合八十

余艘借入相成、廿一日夕方、毛利・吉川之藩中致乗船候由、公卿其外警固之人数、同夜四ッ時分乗船相成、翌廿二日昼九ッ時分迄ニ兵庫出帆相成候由、

一長州家老益田弾正事、跡押として昼八ッ過比乗船いたし候由、惣藩中江一人ニ付仕舞料金壱両ッ、、僕江は一人ニ付金弐歩ッ、、於兵庫渡方相成候由、

一津山侯は、廿二日五ッ時分西之宮出立相成候由、

一廿日夜四ッ時分、兵庫小豆や助右衛門所江吉川監物側廻之者共弐拾壱人、供方之者共九人、都合上下三拾人止宿為致由候処、何れも為何咄も不致候ニ付、何事ニ而罷下も色地不相分候間、供方之者共江、京都大変為有之哉ニ承候間御下向之義は何故ニ候哉、亭主共より相尋候処、京都騒動ニ付長州受持之場所江出張相成候処、先陣ニ薩州様御人数御出張相成居、少人数ニ而大砲相備差向、此方人数は多人数ニ候得共、右次第殊ニ大国之事ニも候間、手向不致其侭空引取相成罷下候段為申と之義、小豆や之者共為相咄由、

一小豆屋之義、御国許御本陣之義は全不気付由、然処出立掛御紋付飾之旗を目ニ懸、爰は薩州本陣ニ而は無之哉、藩中ども相尋候ニ付、船問屋之段相答候由、

一公卿衆初警固之者共通行掛楠公石塔参詣、又は生田之森江参詣為有之由、

文書原寸　縦一六・八糎　横一六六・八糎

六六　英艦再襲ニ備フル久光公ノ諭書

（白木無号御手紙類入）

今般英艦掃攘之砌、指揮不行届而已之事候得共、一統粉骨砕身決戦有之候故不至敗走儀、国家之幸福と存候、右之趣達

天聴、不容易蒙

褒勅、不肖之身只奉恐入次第ニ候、此以後襲来之節は、折角心を用ひ可致指揮候条、此旨弥相心得一心同力、皇国之御武威不致失墜様、尚又忠戦有之度頼存候事、

八月

文書原寸　縦一八・一糎　横四三・四糎

宸翰拝写

宸翰　近衛忠凞忠房両卿へノ宸翰

三条実美ノ風説ニ付　（一号唐櫃入）

実美之儀ニ付風説之趣承、扨々困り候（衍カ）入候儀ニ候、併有間敷事、暴論忌禁候儀ハ各委細承知之事、予存分通リニ候ヘハ、今少し厳科ニ行度程之存念、然ルニ左様之者江密事申遣候儀ハ決而無之、左候ヘハ以女房向文通抔ハ尚更虚忘無相違候、尤女房向ヘモ申含置候間、決テ右様之者ハ無之候、当節人気騒々敷虚談区々、且於脱走之輩モ種々姦計ヲ運候義モ難計、何卒決而不採用様致度候、先達而モ申入置候通、此上不外聞之義出来候テハ、実ニ歎ケ敷候ヘハ固ク申聞候間、其辺深心得候様致度候事、就テハ右風説ハ毛頭無之儀、全姦邪之所意故、爾来右様之輩於有之ハ予之趣意ニ違候間、其辺官武之諸臣一同相心得候様、急度申渡候事、

努々心得違無之様之事、

宸翰　近衛忠凞忠房両卿ヨリ久光公ヘノ書翰

三条実美ノ風説ニ付　（一号唐櫃入）

（封紙ウワ書）「内密乱書推覧

島津三郎殿　忠凞

忠房

几下

（朱「誠」三ツ同ジ）

□　□　□」

尚以、誠々大取紛〳〵、甚々御不沙たニ打過候事ニ候、帯刀へも宜敷御鶴声御頼申入候事、

弥御安康珍重候、扨昨烏書中ヲ以明日帯刀招候哉も難計旨申入置候へ共、今日ハサシテ招候ニ不及、仍以書中委曲申入候、右子細ハ三田尻辺ニ而紛々相唱ヘ、元三条中納言ヘ天下之事御委任可被遊トカ申辺之事ニ付、極内々尹宮申合セ、

主上ヘ申上候処、甚殊之外〳〵之御逆鱗ニ而被為在、実ニカ、ル重大之御政務之折柄、脱走之輩之為ニ衆人

主上ヲ御疑ヒ申上候而ハ、甚御国務之御妨ニ相成候事、
深御不平之
龍顔ニ被為在、衆人疑惑ヲ抱、甚不容易事柄故、
叡慮之御趣意被染
宸翰、昨日各拝見仕候事ニ而、誠ニ何共恐入候事ニ候、
其許ヘハ極内々当方より拝写候テ為見置候様
御沙汰ニ付、右
宸翰拝写仕極内々其許ヘ入覧候、扨又伝奏衆よりモ、何
レ　叡慮ヲ被伺取、御書付ニ而諸藩被　仰渡候事と存候、
誠ニ此末如何之事申唱候モ難計、深々
御懸念之御事ニ被為在候、実々脱走之輩ハ深々　御忌禁
被遊候御事故、其辺一統篤ト会得在之候様被遊度
思召ニ伺候而、扨々恐入候次第ニ候、扨昨烏佐太郎持参
候書付之義、委細ニ承御尤至極ト感佩候、右ハ明日之御
評議之節ト被　仰出候事ニ候、何も甚繁雑〳〵大乱書、
乍例御推覧可給候也、

十月廿九日

文書原寸　縦一五・八糎　横一五三・一糎

七四　久光公ヘノ宸翰　（一号唐櫃入）

（包紙ウワ書）
「宸翰拝写」
（表紙）
「愚存書」

極密愚存認深依頼候事、

其方事深依頼ニ存、先頃内存極密相渡候事ニ候、今度
応招早速上京感悦ニ候、仍極蜜申聞候事、
一抑戊午以来時勢種々変化苦心之義候、尤承知ト存巨細
ニハ不注候、実以無益ニ無罪之輩モ蒙災難、朕意外之
所置候義候、即戊午年義各落飾之一件ニ候、実以朕心
中砕肺肝之至、其後至当節ニ而も大小ハ候ヘ共、兎角
疑念偏執より右様之次第欲発一天之為主身豈不痛心哉、
依之朕一身之義毎々申出候得共、一向ニ承知之人無之、
只々痛心之至ニ候、其後追日時勢モ種々様々ト相替候
後過激之義相起候、是モ元ハ忠誠乍、浪士暴論之輩ニ

被惑候より前後不弁、予存意矯候事屢盛ニ相成、忠変不忠之勤仕関白モ失権、朕座前ト退語ト全相違考ニ両舌ニ相似、重職不相応之件々モ有之候、随而は両役モ只々時宜ヲ見ノ勤方深心痛不容易候、是ト云モ朕愚昧より所起悲歎不過之候、依之而尹宮は従来股肱之連枝故、内蜜申談、会藩ヲ頼、既ニ八月十八日之一件ニ相成、深喜悦之事ニ候、猶又内書以前関白深倚頼、何分ニモ一改革なくてハ如何故、深柱杖ト頼試候、先八月十八日前之憂患ハ粗攘候へ共、猶爾来処一大事ニ候へは其方ト手ヲ組、無腹蔵嫌疑に実以安慮之次第深所頼ニ候事、尤愚昧之朕拙筆盲妄之書状、赤面無限候得共、為国家朝廷之只々存分不顧恥辱打明申候間、宜聞取秘他耳頼入候也、

一攘夷之一件

右は今更無申迄茂、盟

神明　神州不汚穢、皇国之輝照永代無疆、万民快楽已存慮候より、従来数度申出候へ共、何分年久之治世、武備不充実候而は無理之戦争ニ相成、真実皇国之為共不被存、当春以来之次第ニ而は無法之所置トハ存候得共、多勢ニ無勢、其上如朕愚昧鈍言、迚茂申伏セ候無力、徒然ニ附合候は朕一身之不行届已無他事候、此後之処は何卒真実之策略にて皇国永代無穢安慮之攘夷迅速有之度、右之建白所望候事、

一関東江委任、王政復古之両説有之、是モ暴論之輩復古深申張、種々運計略候へ共、於朕は不好初発より不承知申居候、過日決心申出候通、何レニ茂大樹江委任之所存ニ候、此義は先達而大樹江モ直ニ申渡、一橋エモ直話ニ而、今更替候義無之、何処迄モ公武手ヲ引、和熟之治国ニ致度候、右之義深心得貫度候事、

一八月十八日前之勅諚事ハ、如前文実以真偽不分明ニ候間、不審之義も候ハヽ、真偽之処一々尋貫度候、十八日之一件、実以会藩忠働深感悦候事、

一堂上暴論過激之説ニ成候モ、全諸有志浮浪之輩語ヒ候ヨリ、追日根本ハ扨置、私之権威増長候得は、自今堂

上家并地下官人共エモ兵馬之権之輩立入ハ、能々其人体撰、猥ニ入込無之様致度候事、

右之義十八日後両役エ申渡、急度承知之筈ニ候へ共、経年月候得は自然ト易戻候へハ、一了簡所置頼置候事、

一公武和熟ハ前文通リニ候、然於関東モ戊午年頃且此迄之所置ハ実ニ改、爾来ハ従朕は深頼不捨之所置、従幕府は深勤王尊奉之道相立候得は、万民幕府ヲ矢張尊之道理欣悦不過之候事、

一猶又大樹モ上京候ハヽ、種々倚頼申立候義モ候半欤、其砌於其方モ出格之助勢、兼而頼置候事、

一八月十八日已来ハ総而朕於座前ニ之評決ニ相成、深安心候、右様ニ候得は自然中途之計策モ先無之ト存候、依体候得は兎角次之評義ニ成安キ欤、其辺心痛候、自然朕不居所之評義ニ候へは、時々刻々ト十八日前ニ可曳戻モ難計存候、此辺ハ尹宮江モ毎々申聞居候事ニ候、何卒無急度其方存付ニ而建白有之度候事、

一十八日一件掃攘改革は、真実朕腹発之事ニ候処、不取留事乍非真実之叡慮、尹宮・会藩又は右府已下之所作之様風説候、尤風説故無頓着之事候、又々疑念発言より無益之怪我人候而は深心痛候故、別紙尤廻覧候半仍茲不注右府以下江令廻覧候事ニ候、此旨篤ト聞込、爾来何等之虚説候共、決而無信用様、万一疑ケ敷義は一封にて不表立、以尹宮・前関白等直々尋呉候様、左候へハ真偽明白ニ可答候、何卒右虚説取押方勘考有之度候事、

一十八日粗落著候へ共、至此節テモ十分ニ不開通候欤、堂上中ニモ八月十八日之一件不信用、詰リ元三条以下ヲ惜ミ候模様ニモ被愚察候、右様候テハ爾来之処深被按候間、何卒其方之美策、何卒説得有之度候事、

一先年来虚談布告ニ成、朕深迷惑之次第モ候、猶爾来之処如何之儀有之候共、真偽相正風説信用無之様、列藩江モ為聞置度候、是又直々一封にて聞呉取押方只管頼入候事、

一正親町少将は不脱走候へ共、何分中山家之胤、どうも

人質不宜候、当時差扣申付置候へ共、如毛利秀才何等之義、何時仕出モ難測候、右は深朕存慮有之候間、正親町より辞表辞官位除席ニ相成候様、右之次第ニ相成候上は、又何等之事仕出モ難計候間、実父家中山家ニ而堅固ニ籠居可然存候、右之義何卒運熟考候上、父大納言江急度説得有之度候、右存意ニ候ハ、申試頼置候也、

一関白ハ於此比辞表ニ相成候方可然存候、猶賢考之上建白有之度候事、

一去八月十八日脱走之実美以下七人ハ実以暴激私情已之人体、従来苦心候処、既脱走後モ種々之姦策ヲ廻、実以害基ニ候ヘハ急度厳重之処置致度存候、依之先帰洛致サセ候上、厳重ニ後禍ニ不成様之手段内談依頼候、何分此姿ニテハ実ニ為方不宜ト内心心配候、何分大胆之輩故厳重ニナクテハ如何ト深存候、復職ナトノ沙汰モ有之哉乍決而成間敷候間、猶美策是又頼入候事、

一元同輩ニテ不脱走之輩ハ当時差扣、他人面会止申付有之候、右ハ不脱走丈軽罪乍、何等之密計モ難計心痛候、右之輩其方智略ニテ、是迄之所存令改心様説得ハ相成間敷哉、但十ニ八九迄ハ六ケ敷哉共存候、右出来候ヘハ重畳、左ナクハ朕真実免迄ハ決而不宥免、厳重ニ籠居之様ト存候、天下之主万民子育之事一人ニテモ刑罪ハ不好、説得ニテ改心ナクハ一人ニテモ無難之様ト存候ヘ共、寛宥過候テハ愚計暗眼ニ相成心配候、猶勘考有之度候事、

此事ハ猶熟考之上承候上ハ、又々予存意候ヘハ、猶又可打合候事、

一姉小路一件ニテ其藩ヘ何カ疑掛リ候由、厳重之次第モ有之、気毒之至ニ候、右モ為心得申聞候ハ決而朕不真実、其証拠ハ朕疑掛候次第有之候ヨリ、四五日後関白より話之序ニ承、初而左様之事之有之哉ト申居事ニ候、是ニ而何処何人之策哉可有察候事、

其方深依頼候而早々召之事申出候得共、関白以下無承知、既ニ二日頃欤朕深申張候得共、愚昧之朕多勢ニ難

敵、既万里小路博房モ出頭、強而申張候而朕申条矯切候事有之候、右は右府・前関白・内府左幕下等モ同座ニ而巨細ニ存知候事、

一列藩布告浮浪取扱之義は、過日来談候而布告申附置候、猶不成後禍様精々勘考頼置候事、

一堂上之処、追々申聞度義モ候半欤、其節は又々内蜜之往反依頼申置候、猶含置頼入候也、

一大樹上京モ候ハヽ依頼候義モ有之候半、右ヶ条内々申合置度候、若助勢聞呉候ハヽ乍荒凉又々為見候事、猶其節は宜鋪頼置候也、

一段々於其方モ勤王誠忠令感悦候、猶爾来朕乍愚昧申出処周旋深頼置候也、

一深心配候は、是迄ニモ兎角疑念偏執より申触シ候虚談カ真実ニ相成、無益之疑掛、堂上向モ予腹心ト存人ハ兎角退居ニ相成、後ニハ内儀迄江モ疑掛、無益ニ朕深心痛不外聞之義、外より仕出シ呉候義も有之欤にて誠ニ心痛候、爾来右様之義決而無之様、万一候共其方取押方深頼入候也、

右之条々愚昧之存書鎖細之事已ニ候得共、従来存込先認入一覧候、猶宜鋪頼置候也、猶存出候得は又々認可差出候事、返書何卒入此箱貰度候事、

秘々

会藩モ守護職之事周旋モ候ヘハ、此書状可遣哉否模様モ候半、内蜜令相談候事、

外ニ従来朕一身ニ深苦心之事モ有之候、右は猶篤ト熟考之上、又々申聞候哉モ難計候、然未定ニ候、万一申出シ依頼候節は、程克聞取周旋成功頼置度兼而申置候、事件不顕候而ハ答モ六ヶ敷哉、乍先可否尋置候也、

此書状覧後、返却深頼置候也、

文久三年

文久三年亥十一月十六日

揮乱毫拝写　源久光

六四　久光公ノ奉答書

（一号唐櫃入）

（包紙ウワ書）
「　御請書草稿　」

宸翰拝戴被
仰付、不肖卑野之小臣恐懼之至ニ不奉堪、謹而拝見仕候
処
御趣意之件々逐一徹肺腑、低頭感泣仕候外無御座候、抑
戊午年以来
公武御隔意被為在候哉ニ伝承仕、臣子之身傍観難仕、且
故薩摩守遺志モ御座候ニ付、昨春上京仕、至愚之献言仕
候処、恐多モ
叡慮ニ被為叶鄙策
御採用被為　在、且浪士鎮静之義ニ付御短刀御内密ニ而
拝領被
仰付、誠以恐入難有仕合難尽筆頭次第奉存候、其後依
勅命
勅使附添関東下向周旋仕候処、
御趣意十分奉行ニは難至候得共、先聊遵奉相成候ニ付、
再上京復命仕候処、不料モ参
内被
仰付、殊ニ御剣一振拝領被
仰付、其後薩摩守贈官位之
宣下ヲモ奉蒙、武臣之面目、家門之名誉感泣拝舞仕外無
御座候、然処当春又々依
勅命上京仕候処、浮浪之暴論沸騰仕、大樹初後見・総裁
等手ヲ束候勢ニ相成居、不肖之小臣一人之力ニ難及、長々
滞京仕候而は短慮之家臣共如何様之不勘弁可仕も難計、
殊ニ夷難モ相見得居候ニ付、無拠御届書差上帰国仕候次
第、何共恐入奉存候、其後時勢種々転換仕、被悩
宸襟候御事共伝承仕、切歯仕次第ニ御座候処、当夏は不
図以
宸翰　御趣意之条々拝承仕、誠以恐入難有仕合奉存候ニ
付、速ニ上京仕、暴論輩鎮静仕度策略精々熟考仕候得共、
何分時節到来不仕大苦心罷在候処、至秋愈増長仕、既ニ

不容易形勢ニ相及候処、会津中将初莫大之尽力ヲ以、遂
ニ八月十八日之一挙ニ相成、聊被安
宸襟候御事、実以
朝家之御高運ト抃躍仕候義ニ御座候、依之今般又々
勅命承知仕候ニ付、上京仕
公武御一和之御実意貫徹仕候様、只管周旋仕候含御座候
処、先日は再不料モ
宸翰ヲ以御依頼之
勅命、且御質問之件々拝承仕、不肖之小臣重畳之
天恩奉報謝候ニ無所、水火之中ヲモ不辞周旋尽力仕度奉
存候得共、素ヨリ至愚短才之身
御主意通奉行仕候義無覚束、赧慙仕候外無御座候、併微
力之及候丈は相尽、奉安
宸襟度含ニ御座候間、乍恐左様被　思食上被下度、九拝
奉伏願候、
一攘夷之一件、積年之
叡慮ニ被為　在、度々被
仰出候得共、於幕府奉行不仕処ヨリ下情大ニ致乖戻、
戊午之一変相生シ、其後桜田之一挙等、皆是天下之人
心紛乱之根元と乍恐奉存候、実以堂々タル
神州醜虜之汚辱ヲ受候は、有志之者誰欤切歯扼腕仕ラ
ザランヤ、雖然如
勅諚二百年来之泰平、武家モ有名無実之形勢罷成、殊
ニ外夷方今之戦争は
皇国古来之戦争とは雲泥之相違ニ而、其辺別而難行届、
於幕府モ無拠訳合とは奉存候、乍併只管防禦之術ニ心
ヲ用ヒ、指揮十分行届候得は、不日シテ成功ヲ奏候筈
ニ御座候処、何分不行届故、終ニ奉戻
叡慮、天下之人心モ是ガ為ニ瓦解之模様と罷成、痛恨
之次第奉存候、就而は今般大樹上洛、一橋初諸大名会
合仕候上は、右之処精々談判仕、愈武備充実之世話行
届候様、周旋仕候含ニ御座候間、乍恐左様被
聞食上被下度、伏而奉希上候、尤夷情等之義は先日家
来ヨリ前関白江差出置候一書御座候間、乍恐

御熟覧被遊被下度、偏ニ奉願上候、小臣急速之攘夷ヲ
相好不申趣は去秋奉言上候通、迚モ方今之形勢ニ而は
一度兵端相開候得は、万民快楽之
叡旨ニモ不奉叶、
皇国億兆之人民是ガ為ニ塗炭之苦ヲ受、乍恐堂々タル
神州醜夷之匹馬ニ被穢候様罷成候而は、何共奉恐入候
次第御座候、此方江武備充実仕候得は、彼は不戦シテ
畏服仕候は案中ニ御座候、此義は小臣乍過言盟而御受
合可奉申上候、全体当時之夷人は古来之蒙古・新羅等
之類ニ無之、世界万国不至処無ラシムルノ主意ニ而、
一度掃攘相成再不来之醜虜ニ而は無御座、
皇国而已鎖国難相成形勢ニ御座候、尤方今開鎖之権ハ
彼ガ掌握ニ帰シ候故、我より鎖港之義相達候而モ難被
行而已ナラス、却而彼ガ怒ヲ激シ、後患勝テ計へ難キ
勢ニ御座候、此権我ニ帰シ候得は、彼自然恐怖ヲ生シ
可申と奉存候、此権之我ニ帰スルト申は、武備充実之
外策略無御座候、乍恐其辺之処深ク
御熟慮被遊被下度、九拝奉懇願候、
一天下之大政大樹江　御委任之
御趣意、乍恐御至当之御事と奉存候、中古武将天下之
権ヲ執候以来、万民大半其勢ニ従ヒ居候得は、方今俄
ニ
王政御復古は難被行御義と奉存候、殊ニ夷難之折柄、
内政紛乱仕候而は不相済、第一内ヲ斉へ候而社外夷之
御処置モ可相成、修身斉家治国平天下之次第、乍恐篤
と
御勘考被遊度奉希上候、
一堂上暴論過激之説ニ成候云々、乍恐是以御至当之
御趣意と奉存候間、尚又以来御取締向厳密行届候様、
堂上方は勿論武臣共へも時々談判仕可申候、
一八月十八日已来
朝議之御次第逐一拝承仕、万機ニ
叡念ヲ被為用候御事、啼泣感拝仕候外無御座候、其以
後は矯

勅諚候者誰モ有御座間敷奉存候得共、尚又其辺之処は
尹宮・前関白等江時々談判仕可申候間、乍恐被安
宸襟候様奉希上候、
一十八日一条、実以
叡念之御事候処、非真実、尹宮・会藩又は右府以下之
所作之様風説仕候義は、長州且浮浪輩之人心ヲ疑惑セ
シムル造言ニ御座候間、乍恐不被悩
宸襟様奉存候、於小臣は寸分も奉疑候心底無御座候間、
乍恐左様被
思召上被下度奉希上候、
一十八日粗落着候得は云々、此義至当時候而は有之間敷
奉存候、若右様之説申立候堂上モ御座候ハヽ、早速尹
宮等申談、再三説得可仕と奉存候、
一先年来虚談布告云々、此義誠以恐入奉拝承候、爾来左
様之義は決而有之間敷候得共、尚又列藩江御布告被為
在候御事は御至当之御事と奉存候、乍併此義は大樹上
洛諸大名会合之上、一同参
内被
仰出、於
玉座之下
御直達被為在候ハヽ、人々感佩拝承仕、疑心致氷解、
向後虚談絶果可申と乍恐奉存候、
一正親町少将云々、此義尚又熟考仕、尹宮・前関白等江
も談判仕可申候、尤武臣之面々へも評義被
仰付度御事と奉存候、
一関白辞表之事、御至当之御事と奉存候、此際退職無御
座候而は列藩之疑惑不少欤と奉存候、
一脱走七人之事、自然
朝議之御定策も可被為在候得共、実以不忠無限事御座
候間、尚又熟考仕、武臣之面々江談合仕可申奉存候、
一元同輩ニ而不脱走輩之事、是又御至当之御趣意ト奉拝
承候、中ニは随分改心仕候人も可有之奉存候間、説得
之手段、尚又談合仕可申奉存候、
一姉小路一件云々、実以恐入奉拝承候、家来疎暴之者御

座候故、
御疑ヲ奉蒙何共無申訳次第奉存候、乍併一藩総而奉蒙
御疑候義は只々苦心仕罷在申候処、十八日後寛宥之
御沙汰ヲ奉拝承、幾重ニも奉恐入候次第御座候、夫故
上京之
勅命モ抑留ニ相成候次第、恐縮不少奉存候、
一列藩布告浮浪取扱之義、委細奉拝承候、後禍ヲ不成様
トノ御事、逐一御至当之御事と奉存候、尚勘考仕取締
行届候様談合仕可申候、其外　御依頼被
仰下候件々奉拝承、徹肺肝只々恐縮仕候外無御座候、
一深御心配之御一条、此義何共奉恐入候得共、御腹心之
人才能々御観察被遊度御事と奉存候、遠小人親賢臣ト
申古語、篤と御熟考被遊度、若
御取違之御処置共被為在候而は不容易時節、別而恐入
奉存候事、
一会津中将江此
宸翰同様拝戴被
仰付度トノ
叡慮、実以難有
御趣意ニは御座候得共、聊幕習之気味も有之候間、此
義は先
御猶予被遊度奉存候、小臣江も度々ケ様
御秘密之
宸翰拝戴被
仰付候而は、所々響合も如何敷奉存候ニ付、以来は尹
宮・前関白之両人丈は御談合被遊候而、拝戴被
仰付度奉存候、乍恐右之趣不悪
御聞済被遊被下候様、九拝奉伏願候、
一外ニ従来　御苦心之御事被為在候間、御依頼之節は周
旋仕候様、兼而被
仰付候旨委細奉拝承候、乍恐　御訳合何共承知不仕候
得は、当座何トモ難申上御座候得共、小臣微力之及候
義ニ御座候ハヽ、必死ニ周旋可仕奉存候、
右は不容易　御秘密之

宸翰拝戴被
仰付候ニ付、不顧至愚之身忘卑賤、犯忌諱所存献言
仕候、聊ニ而も
御採用相成候義被為在候得は、別而難有仕合奉存候、
誠惶誠恐頓首謹言、
十一月　　久光拝
上

六九　山内容堂公ヨリ島津久光公ヘ

薩藩ノ尽力ヲ求ム　（雑三十八番巻物）

（付箋）「山内容堂□□」（朱、二ツ同ジ）

追日寒威増長候、弥御安福珍重候、誠ニ過日ハ御咎閉門被　仰附恐入候事ニ候、乍去元来覚悟之義、今更可驚義ニハ無之候得共、右様御所置ニ而ハ益　朝廷御失体天下ニ顕候事、深ク恐入遺憾不少候、右ニ付他人面会文通等も被禁、殊ニ守衛も被附候義、往反甚不便、忠魂難立、万事杜絶、如何共無致方次第、実ニ非歎之至ニ候、朝廷国家之御為ヲ存上　言上、却而蒙御咎、其上番兵被附候義古今例有間敷、角迄条理倒置何共歎ヶ敷存候、殿下ニも是迄ハ万事彼宮ニ牢絡ト而已存候処、今度之件全同穴ノ狐、最早可扶筋更ニ無之、両役人共ニもヶ程条理不弁義、実ニ〳〵長歎之外無之、此末如何可相成哉と苦心之事ニ候、且山階宮ニも不寄存知次第、就而ハ内公御一人ニ相成、嘸々御困ト存候得共、弥御強力御周旋無之候而ハ難相成、何卒御力ヲ被添、十分御弱り無之様御申上御頼申入候、兼御依頼申入候貴藩之義、何卒御尽力、朝儀相立条理分明ニ相成候様、可然御周旋偏御頼申入候、扨又大隅守殿ニハ弥御上京ニ候哉、如何ト苦心之事ニ候、先只今之様子ニ而ハ賊臣益勢ヲ得、何レ将軍　宣下も不遠可被行義ト存候、扨々不及力義ト只々歎息之外無之候、何分ニも貴藩御尽力御周旋之程所祈候、尚又此上御着眼之辺も令承知度、又々心得ニも相成候義ハ内々御示頼入候、蒙御咎候得共忠魂益確乎、聊変動無之候間、乍此上可然御心添是非忠実貫通候様、幾重ニも御頼申入候、何

欤申入度又承度儀も有之候へ共不克、其儀先極内々申入候、只今差出候家来連ト申は、大底之義ハ御申入候而不苦候間、何そ心得ニも相成候義も候ハヽ、御申聞頼入候、呉々長大息之事ニ候、早々不備、

十一月

追而文通被禁候義、一覧之後早々火中頼入候、乍然洩候而ハ夫ハ大変ニ候、此段御頼申入候也、

文書原寸　縦一八・八糎　横一一二糎

九一　尹宮へノ宸翰。及写。久光公ヨリ尹宮へノ復書　三通

（一号唐櫃入）

（包紙ウワ書）「文久三年十二月三日　密宸翰　（付箋）『己三通』」

七九一ノ一

別紙愚腹例之打明申入候、抑昨日御面会之砌余程申度候得共、又々列座之義、十分ニも難申出候間、漸半口計耳元寄申入、可否之義無御分ト芳（本ノマヽ）村成ニ及御別候、扨申入候義ハ、昨日も鳥渡前関白も発言之一件、兼而予尹宮江申入度ト存候事ニ候、先昨日承候処ニ而は、尹宮事、何か奸謀有之義之一件、実は於此方も何入耳候事も候得共、強而不申出は有体実は不頓着、即右様之義も種々申触し候ハ、即長州ヲ根本トシテ、右長州ニ附属之輩申出、人気ヲ迷し、終ニは予之腹ヲモくつかへす手段ト存候、是か即暴人共、八月十八日之一条ヲ俗ニひくりかへし、咎之輩再生之手段、右手廻し足廻し候策略ニ候間、左候得は於予之鑁策故、一説無頓着、強而発言迄も無之打捨候、尤又左程迄巨細之義も不承候事、北野之張紙ト申事は入耳候得共、未写も不手入候間、何共不分候得共、何分尹宮・肥後守等手ヲ組、何か於石清水誰ト申僧ヲかたらい呪詛有之候由、又尹宮予位ヲ取うハひ候由之義、風説ニ承候得共、例

之風説即戊午年も有之義、其時すら於予ハ一説不頓着訳、別而当説去八月十八日之一条ハ、全予憂患払候は、会津周旋トハ乍申頓ト元ハ其宮之御周旋事ニ候、十八日前ニ毎々彼反(本ノマヽ)候而、兎角其宮江何事も不申様各承置候処、蜜々乍予より文通候而粗御分り之事、始而被存候事も有之候事ニ候、其も段々次第至当節候も全其方之御尽力、予ト手ヲ組万々申入候而、於当時ハ六ヶ敷トハ申乍、十八日前トくらへ候而は抜群之違、又腹心乍前関白江もかくし尹宮江申入候義も、毎々ニ候事ニ存候、左候得は前文之次第姦人申触し候迚、其ニ予なづむやうなる訳無之義は、賢明之方にて御分り可有之候、疑ひ起り候も事起り候而紛(本ノマヽ)而差縛之基ニ候、右様之義於予ハ前文之義ニ而頓着之有無、今更無申迄候得共、若尹宮もヶ様之風説有か、上ニは御採用有か、よもや有まい乍、申様ニより十之中一ツ二ツにても、どうしやうしらむとおほしめすかなと、於尹宮被存候而は却而あちらこちらの疑ニ相成、左様被存候と、これまでどうでもなしに被聞入候事申条ニもおかしく、自然被取候やうの物、左やう候へは其之貌色を見受候へは、たとへ詞ニ不出ともぢきニ相分候物故、これまて御心安くけんくわもいたし候処、ひかへめニいたす、左候へハ又其宮ニもおかしく被存と申物、さやう成候へハいらざるの出来候、右之次第ニ成候へハ、矢張姦人之策之成就と申物にて、心外無此上候、於尹宮も予腹ハ十分御見ぬき、於予も尹宮之心底ハミぬき候つもり、真実之連枝と存候ニ、左様之姦策かりに合候てハ実ニ大変故、決而〳〵疑心無之、不相変附合有之度候事、

右ヶ様ニ申も、於尹宮之様子、左様疑ひ、右様ニも不被存候へ共、前関白申条并北野之張紙不被為見之所置歎敷候、乍憚一天之為主為身ハ如何殊外(本ノマヽ)候共、人ハよかれと存候ニ、過日来二度程前関白詞之中ニ、実ニ予一身之迫り心痛之事も候、○○○(本ノマヽ、さにか)ニて右之次第ニも及候やと存候、何分其方ニおゐてハ決而従来之朋友之御

疑〇ふるも有間敷存候得は打明申入候辺、宜聞取頼入候、

実ニケ様之事も姦策之所置か目ろミニ事ニ逢やうニ成候へハ、切者(本ノマヽ)義の候や、猶又扶助頼入候事、

一三郎へ過日蜜ニ遣し候返書、昨二日前関白より到来候、右過日承候辺も候、疑心発候ニは無之候へ共、右返書尤三郎腹心之まゝニ候や、万々一前関白文言世話有之候や、内々尋申入候、此義ニおひても其宮御一人ニ申入度義も候事、

一昨日返し被下候過日御渡し申候予拙書、弥御周旋被下候や、内尋候事、

一正親町息一件、昨日鳥渡申候へ共、強而も不申候、右は御一人ニ篤と申入度義も候間、何卒休日之日、乍御面働臨期御出頼入度、先申掛候事、

一脱走之七人、差扣之輩一条も同様之事、

一於正親町之義ハ過日も申入候通、予外せきニ候得は少々愛憐も付候半、雖然於息ハ深予存意候、右辺ハ如何敷申条乍、於摂関家又華族等ハ申にくゝ候、聞取辺も如何ト其実之事ニ無之候、於尹宮ハ其辺も毛頭〇〇辺別打明申入度義も候間、猶御推聞頼入度候事、

今明日は休日ニ候、其余いつ成共御一人御入来、蜜談いたし度申入掛候也、

十二月三日

（本文書ハ「鹿児島県史料　忠義公史料」第二巻第六〇八号文書ト同文ナリ）

文書原寸　縦一九・四糎　横三六二糎

七九一ノ二

宸翰御写、謹而拝見仕候処、御趣意一々御至当之御事、何も御疑念不被為在候由、難有乍恐安堵仕候、自ら小臣等所存之趣は一橋初連名を以建白仕候義ニ御座候、且先度小臣江拝戴被仰付候

宸翰御請書之義、

勅問承知仕恐入奉拝承候、前殿下江は内見は有之候得共、

趣意於てハ差図有之候義ニは無御座候間、右之趣宜御取成被　仰上被下度奉伏願候、

文書原寸　縦一九・四糎　横五四糎

七九一ノ三

右之通之

勅書給候故、極蜜々御目ニ懸候、早々、以上、

十二月五日　朝彦

三郎殿へ

文書原寸　縦一九・四糎　包紙原寸（総括）　縦二七・四糎

横二九・六糎　横三九・一糎

八三　久光公従四位下叙位制記一巻　（御系図唐櫃入）

（付札）「従四位下源朝臣久光島津少将」

付札原寸　縦一三糎　横二・二糎

源朝臣久光

右可従四位下

中務表節兵欄宜勤羽衛

（「天皇御璽」）

精誠無懈夙夜在公宜授

栄爵用旌寵章可依前件

主者施行

文久四年正月十四日

二品行中務卿幟仁親王　宣

正五位下守中務大輔臣卜部朝臣教久　奉

正五位上行中務少輔臣藤原朝臣資生　行

正二位行権大納言兼右近衛大将臣　家信

正二位行権大納言臣

正二位行権大納言臣　公績

正二位行権大納言臣　実徳

正二位行権大納言臣　俊克

正二位行権大納言臣

正二位行権大納言臣　忠順

正二位行権大納言臣

正二位行権大納言臣　道孝
従三位守権大納言臣　輔政
正二位行権中納言臣　実順
従二位行権中納言臣
従二位行権中納言臣　雅典
従二位行権中納言臣　有容
従二位行権中納言臣　為理
従二位行権中納言臣　重胤
従二位行権中納言臣
従二位行権中納言臣　光愛
従二位行権中納言臣　通富
正三位行権中納言臣　実麗等言
制書如右請奉
（天皇御璽）
制附外、施行謹言
文久四年正月十四日
制可

月日辰時正四位上行大外記兼助教中原朝臣師身

右中弁
関白従一位行左大臣朝臣
太政大臣闕
右大臣正二位朝臣
内大臣正二位兼行左近衛大将朝臣
兵部卿闕
正四位下行兵部大輔紀季
正四位上行右大弁経之
告従四位下源朝臣久光奉
制書如右符到奉行
従四位下行兵部少輔兼出羽守貞彝
（天皇御璽）
大録
少録
少録
文久四年正月十四日

文書原寸（巻子）　縦二六・六糎　横一六二・八糎

〔三〕 久光公従四位下叙位口宣案及
左近衛権少将口宣案及宣旨等　四通
（御系図唐櫃入）

（付札）
「口宣案　二枚
宣旨　一枚
位記　一巻　島津少将」

付札原寸　縦四二・四糎　横八・四糎

八七三ノ一

島津少将

従四位下
上卿　坊城大納言
同
職事　中御門頭右大弁
少将
上卿　坊城大納言
同
職事　勘解由小路中務少輔

文書原寸　縦一九・五糎　包紙原寸　縦三一・九糎
横五二糎　横四三・八糎

（封紙ウワ書）
「口宣案」

上卿坊城大納言
文久四年正月十四日　宣旨

従四位下源久光朝臣
宣任左近衛権少将
蔵人中務少輔藤原資生奉

文書原寸　縦三三・八糎　包紙原寸　縦四五・四糎
横五〇・八糎　横三二・一糎

八七三ノ三

（封紙ウワ書）
「口宣案」

上卿坊城大納言
文久四年正月十四日　宣旨

源久光
宣叙従四位下
蔵人頭右大弁藤原経之奉

文書原寸　縦三三・八糎　横五一糎

八七三ノ二

包紙原寸　縦四五・四糎　横三二・二糎

八七三ノ四

従四位下源朝臣久光

正二位行権大納言藤原朝臣俊克

宣奉　勅件人宜令任

左近衛権少将者

文久四年正月十四日大外記兼助教中原朝臣師身奉

文書原寸　縦三七・二糎　包紙原寸（総括）縦六四・一糎

横五六・九糎　二枚（礼紙アリ）　横　五一糎

八三　久光公ニ対スル朝議参予従四位下左近衛権少将宣下　（御系図唐櫃入）

（包紙ウワ書①）「〆」

島津三郎

不容易御時節ニ付、

朝議参予可有之被

仰出候、依之従四位下左近衛権少将推任叙被

宣下事、

文書原寸　縦一六・七糎　包紙原寸　①縦二七・八糎　横四〇糎

横五三・一糎　②縦　二九糎　横四三糎

八四　薩英戦争ニ付久光公ヘ賞賜ノ御沙汰書　（御系図唐櫃入）

島津少将

昨年七月、薩摩国鹿児島江英夷渡来之節、早速攘斥、不

墜

神州之威名格別尽力之由被

聞食、

叡感不斜、依之鞍置御馬一疋賜之候事、

文書原寸　縦二一・三糎　包紙原寸　縦三七・七糎

横七四・五糎　横五三・六糎

九一四　久光公大隅守兼任口宣案其他　四通

（御系図唐櫃入）

（付札①）「源久光任左近衛権少将　宣旨」
（付札②）「源久光兼任大隅守　宣旨」
（付札③）「口宣案一枚　宣旨一枚　島津大隅守」

付札原寸　①②縦一八・三糎　横　三糎　付札原寸　③縦四三・九糎　横　九・二糎

九一四ノ一

島津大隅守

上卿　坊城大納言

職事　清閑寺頭左中弁

文書原寸（折紙）縦二二糎　横五七糎　包紙原寸　縦三二・四糎　横四四・三糎

九一四ノ二

（端裏書）「口宣案」

上卿坊城大納言

文久四年二月一日　宣旨

左近衛権少将源久光朝臣

宜兼任大隅守

蔵人頭左中弁藤原豊房奉

文書原寸　縦三三・七糎　横五一・一糎　包紙原寸　縦四六・一糎　横三二・六糎

九一四ノ三

左近衛権少将源朝臣久光

正二位行権大納言藤原朝臣俊克

宣奉　勅件人宜令兼任

大隅守者

文久四年二月一日大外記兼助教中原朝臣師身奉

文書原寸　縦三七・三糎　横五七・七糎　包紙原寸（総括）縦六四・五糎　横五一・三糎

九三四　幕府ヨリ久光公ヘノ令達及書添　二通

（御系図唐櫃入）

御用部屋ヘ出頭ノ件

（包紙ウワ書①）「〆」

九三四ノ一

島津大隅守

御用有之節は、御用部屋江罷出候様可被致候事、

文書原寸　縦一六・一糎　横三〇・六糎

九三四ノ二

御別紙、二月十六日、於二条　御城御老中有馬遠江守様より　御承知被遊候事、

文書原寸　縦一五・四糎　包紙原寸　①縦二七・九糎　横四〇・三糎　②縦三〇・二糎　横四〇・八糎　横二〇・六糎

九四〇　将軍ヨリ鞍置馬下賜ノ辞令書　五通

（御系図唐櫃入）

九四〇ノ一

（封紙ウワ書）「御道具目録」

覚

一御鞍（浪ニ碇、千鳥模様）　宮備中守時道作　壱脊

一御鐙（塗御鞍同前）　同人作　壱足

一御手綱　晒染　壱筋

一手綿　紅糸　壱掛

一押掛　紫守山　壱掛

一御馬衣（御紋附）　花色錦　壱疋分

一轡（御紋附）　十文字　壱間

一泥障　熊　壱刺

一切附　壱口

以上

二月

文書原寸　縦一七・三糎　包紙原寸　縦　二四糎
横五七・一糎　横一七・二糎

九四〇ノ二
（封紙ウワ書）
「御馬毛附」

覚

御鞍置
一陣ケ森栗毛六歳
四寸五分仙台立

以上

二月

文書原寸　縦一七・三糎　包紙原寸　縦二四・一糎
横　一八糎　横一六・九糎

九四〇ノ三
（包紙ウワ書②）
「大隅守様　御馬
御拝領之
御書附　」
（包紙ウワ書①）
「〆　」

（裏書）
「島津大隅守江」

島津大隅守

年来国家之御為励精尽力致し、当節之御場合ニ至候段御満足ニ被　思召候、依之御鞍置御馬被下、愈精勤可致候、

文書原寸　縦　二〇糎　横四九・二糎
縦二一・二糎　横四三・五糎（同文ニ付省略）
包紙原寸　①縦二八・二糎　横三九・八糎
②縦三八・三糎　横五三・八糎

九四八　横浜鎖港ニ付久光公ヨリ閣老ヘノ意見書

（白木無号御手紙類入）

（封紙ウワ書）
「艸稿　横浜鎖港論　不用」

横浜鎖港は至当之事ニ而、実事断然と被行申候得は、何そ懇々と申上ル迄も無御座候得共、三港之内ニ而も彼地は夷人第一庶幾する処ニ御座候得は、懇ニ談判申掛候共、

種々苦情申立承服不仕而已ナラス、却而
御国恥を引出し可申は案中と恐入奉存候、子細は談判之
御趣意と申も人気不居合、長州如キ之暴論輩有之等之趣
を以、御申込之義と致承知候、彼より狂暴之輩は兵革を
以取押可申候間、是非只今通と申募候節は、如何御答可
相成哉、尤御使被差遣候ニ就而は、定而於国々種々論判
有之、急ニは帰国有之間敷、若其内国ニより軍艦数艘差
向ケ、右通之趣を以強情申立候節は、遂ニ兵端相開候義
疑無御座候、武備不充実之
皇国ニ而何を以対応相叶可申哉、義烈之壮士は忠死を遂
可申候得共、怯懦之輩ハ遂ニ遁逃いたし、
御国体を汚し候義は必然ニ而、乍恐
幕府は勿論、万代不易之
天朝之御行末如何可被相成哉と、誠以嘆息痛恨無限次第
ニ奉存候、若又彼鎖港ニ承服仕候得は、別而之大幸ニ御
座候得共、其時は引払料と欵名付候而、莫大之金ヲ御遣
相成候筈と致承知申候、当時衆口嗷々と申立候族も、ケ
様之事とは夢ニも不存、立派ニ鎖港被為整候様考居候半、
若引払料被差出候節ニ相成候ハ、、定而人気一層之沸騰
ヲ増可申、其節は迚も鎮静相成申間敷と甚以懸念至極奉
存候、且粗致承知候得は、御使帰国迄ハ数月を経候ニ付、
其節ニ至り候ハ、、又其節之時宜次第と欵申御評義も有
之由、又外二港之義、将来如何処置可被為成哉と先日御
尋申上候得は、是は永久と御答致承知候、是こそ真之開
港説ニ而は有御座間敷哉、従来攘夷之
叡慮ニも不奉叶、以之外之義、長大息之次第ニ御座候、
私定論ニは、方今開鎖之論は先差置、断然と摂海其外要
港之地砲台之実備厳整いたし候様屹度被　仰出、迅速ニ
御手被相附、右ニ申上候夷人引払料ニ被相渡候筈之莫大
之金を以其御用途となし、且諸大名も分限ニ応し聊ニ而
も出金被　仰渡、浪花は勿論、其外富有之寺院・商人へ
も分限相応差出候様、理を尽し被　仰渡候ハ、、於御用
途は随分御不足無之筈と奉存候、御軍艦は此際彼ニ御注
文も可有之、詰る処ハ於此方御造立相成候様、精々御心

ヲ御用ひ候ハヽ、不久して御成功相整可申と奉存候、充実之上は開鎖之権我ニ帰し候故、彼も従来之軽侮を絶ち可申、其節ニ至候而は鎖港ハ至て容易之事ニ可有之、遂ニは彼か巣穴を覆し候程之

御国威相輝キ可申義と奉存候、ヶ様御処置相成候而こそ乍恐上は奉安

宸襟、下は生民を被為保候義と奉存候、只目前之小計ニ而将来之大議ニ暗く候而は

勅意ニ被為叶可申哉と、別而恐入奉存候、右は私愚痴蒙昧之管見を以御国家重大之事件評論仕候義、恐惶不少奉存候得共、邂逅御用部屋へも罷出候様難有仰を承り候上は、存慮内蔵仕候而は不成と奉存候ニ付、不顧多罪申上候間、何卒各様方御英智を以、理非得失明白御裁断被成下度奉伏願候、誠惶敬白、

文書原寸　縦一七・四糎　横一五九・六糎

一〇〇四　左近衛権中将昇任口宣案　其他合四通

（御系図唐櫃入）

一〇〇四ノ一

（付札①）「口宣案一枚　宣旨一枚　島津中将」

（付札②）「源久光転任左近衛権中将　宣旨」

付札原寸　①縦　四二糎　横八・七糎

②縦一八・四糎　横三・一糎

島津中将

上卿　柳原中納言

職事　勧修寺右少弁

文書原寸（折紙）　縦一九・五糎　横五二・二糎　包紙原寸　縦三二糎　横四四糎

（端裏書）「口宣案」

上卿柳原中納言

元治元年四月十一日　宣旨

左近衛権少将源久光朝臣